

2022 年 10 月

食料安全保障月報

(第 16 号)



令和 4 年 10 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 10 月食料安全保障月報（第 16 号）

目 次

概要編

I	2022 年 10 月の主な動き	1
II	2022 年 10 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 「米国とロシアの穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	17
7	FAO 食料価格指数	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は前月予測に比べ 3.6 百万トン下方修正の 44.9 百万トン	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増	
	＜豪州＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トン、輸出先国は中国が増加	
	＜EU27+英国＞ 小麦の飼料用需要がとうもろこし等の代替で上方修正	
	＜中国＞ 8 月の小麦輸入先国のシェアは豪州が 86.1%	
	＜ロシア＞ 生産量は史上最高の 91.0 百万トン、期末在庫量も高水準	
	＜ウクライナ＞ 生産量は過去 5 年平均を 26.6%下回る 20.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より 4 割減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により価格が高騰	
	＜インド＞ 生産量、輸出量ともに下方修正	
	＜中国＞ 中国の飼料用米需要が下方修正	

<タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
<ベトナム> インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が上昇

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1

<米国> 単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

<ブラジル> 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し

<アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）

<中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

<カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の飼料をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：米国イリノイ州のとうもろこしの収穫（9 月 21 日撮影）

天候に恵まれ収穫作業は順調に進展した。

(概要編)

I 2022 年 10 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終了し、その他の作物は成熟期から収穫期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、10 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月に過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、世界の生産量が米国や欧州の乾燥等の影響により前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：9 月）については、植物油（163→153）が下落した影響などにより、8 月より下落（138→136）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年 9 月の値は 129）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、直近 5 年間の最高値を記録した 2021 年 10 月の水準と比較して、4 割程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、10 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

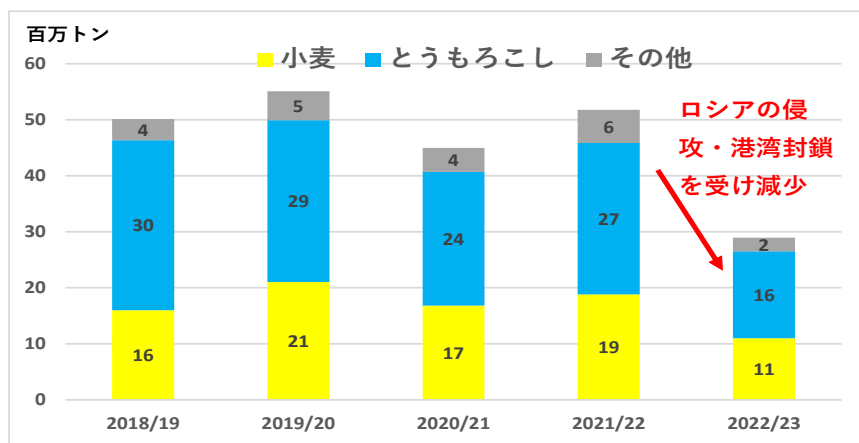
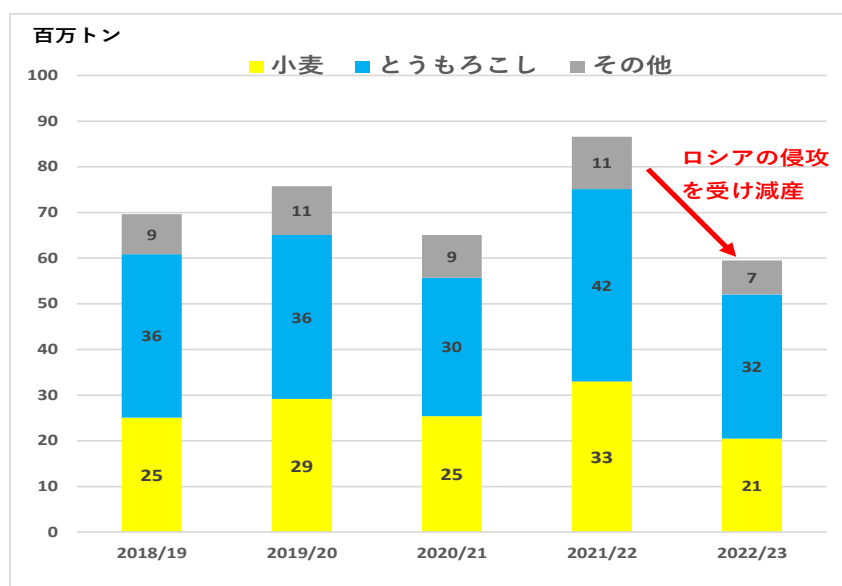
ウクライナ農業政策食料省の 10 月 21 日報告によると、冬小麦は収穫が終了し、1,920 万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が開始され、計画の 12% に当たる 270 万トンが収穫された。

7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8 月以降、オデーサ港等 3 港からの輸出が再開された。9 月 30 日までに 559 万トンの穀物・油糧種子等が輸出された。

米国農務省（USDA）の 10 月見通しによれば、ウクライナの 2022/23 年度の小麦生産量は、前月見通しから変更はなく 2,050 万トンの見通し。ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比 38% 減となっている。輸出量は前月見通しから変更はなく、前年度対比 42% 減の 1,100 万トンの見通し。

一方、とうもろこしの生産量については、前月見通しから変更なく、対前年度比 25% 減の 3,150 万トン。輸出量は上方修正されたが、前年度対比 43% 減の 1,550 万トンの見通し。

(参考) ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

1 ブラジルの 2022/23 年度の大豆、とうもろこしは大幅増産見通し

ブラジルの 2022/23 年度の夏作物の作付けが開始された。ブラジル食料供給公社の 10 月見通しでは、とうもろこしなどの穀物と大豆などの油糧種子を合わせ生産量は史上最高の 3 億 1,240 万トンの見通し。そのうち、9 割近くが大豆ととうもろこしが占めている。

作付け期を迎えた大豆は、乾燥の影響を受け減産となった前年度から 21.3%増の 1 億 5,240 万トン。とうもろこしは、現在作付け中の夏作と、大豆の収穫後に作付けされる冬作を合わせ、前年度比 12.5%増の 1 億 2,690 万トン。いずれも史上最高を更新する見通し。

他方、現在、ラニーニャ現象が継続しており、生育期の天候に注視が必要である。

2 インドの高温・乾燥、パキスタンの洪水で穀物生産量は減少の見通し

USDA によれば、インドの小麦生産量は、収穫期の熱波の影響で、対前年度比 6 % 減の 1 億 300 万トン、コメ生産量は、生育期の降雨不足で 3 か月連続で下方修正され、対前年度比 5 % 減の 1 億 2,400 万トンの見通し。小麦、コメとも輸出規制が継続している。

一方、パキスタンは、南部のシンド州を中心に、洪水による水が引かない地域があり、コメ生産量は対前年度比 19%減の 740 万トンの見通し。11 月以降の 2023/24 年度の小麦の作付けについても懸念されている。

3 EU の穀物生産は干ばつの影響で、特にとうもろこしが大きく減少する見通し

EU の穀物生産については、500 年に 1 度ともいわれる 7 月から 8 月の干ばつによる影響を受けて減産となった。EU の見通し(9 月 30 日)によれば、穀物全体では前年度比で 8 % 減の 2 億 7,090 万トンの見通し。特に、受粉期のとうもろこしが影響を受け、生産量は前年度比で 24%減の 5,550 万トンの見通し。

一方、小麦については、7 月までにおおむね収穫が終了したことから大きな影響は免れ、生産量は前年度比で 2 % 減の 1 億 3,440 万トンの見通し。

とうもろこしの減産に伴い、小麦や大麦の飼料向けとしての代替供給に加え、ブラジルや輸出が再開されたウクライナからの輸入が想定される。

なお、2023/24 年度の小麦は 9 月以降の降雨に恵まれ、順調に作付け、生育が進展しているとみられる。

Ⅱ 2022 年 10 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、9 月末、330 ドル/トン台後半で推移。10 月に入り、ドル高等から 320 ドル/トン台前半に値を下げたものの、ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から 340 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、豊作によるロシアの輸出枠撤廃の可能性やウクライナ産の黒海経由での輸出維持に向けた協議の見通し等から値を下げ、10 月下旬現在、310 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、9 月末、260 ドル/トン台後半で推移。10 月中旬には。ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から、一時 270 ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から、ほぼ横ばいで推移し、10 月下旬現在、260 ドル/トン台後半で推移。

コメは、9 月末、450 ドル/トン前後で推移。10 月に入り、バーツ高により、一時 450 ドル/トン台前半まで値を上げたものの、その後のバーツ安や新穀の供給への期待感から値を下げ、10 月下旬現在、440 ドル/トン台前半で推移。

大豆は、9 月末、500 ドル/トン前後で推移。10 月中旬には USDA の 10 月需給報告で米国の生産量が市場予想に反して下方修正されたこと等から、一時 510 ドル/トン台前半まで値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から値が小幅に上下し、10 月下旬現在、510 ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 900 万トン下方修正され 27.5 億トン。消費量は、前月予測から 780 万トン下方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.6%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.5 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.7 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 10 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.0%となる見込み。

(注：数値は 10 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国とロシアの穀物等の生産・輸出動向

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、米国では7月から9月にかけての高温乾燥により、とうもろこしや大豆生産が影響を受けた。現在収穫が進展しているが、前年度より減産見通しとなっている。小麦については、前年度干ばつであった春小麦の生産量の回復により前年度よりわずかに増加したものの、3品目とも期末在庫率は低水準である。

一方、ロシアについては、米国と対照的に小麦など穀物について史上最高の豊作が見込まれ、期末在庫は積み上がっている。両国の穀物の生産・輸出動向についてまとめた。

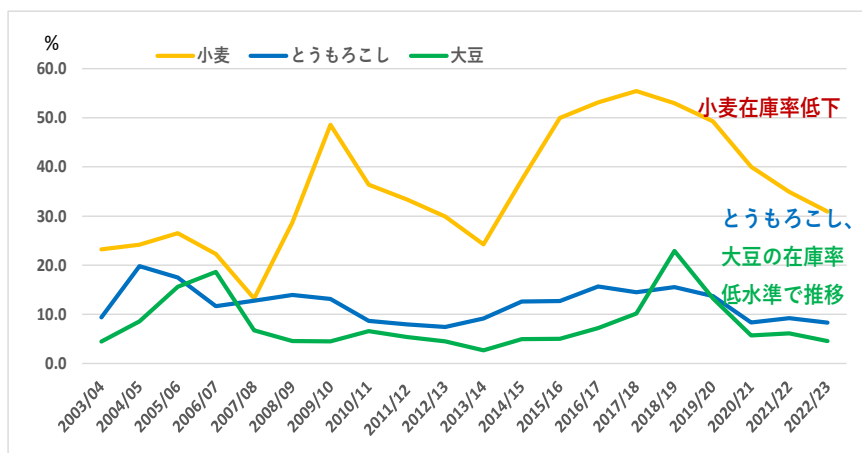
注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、米国のとうもろこしは 2022 年9月から 2023 年8月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 米国

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移

(1) 小麦の生産・輸出見通し

2022/23 年度の冬小麦、春小麦の収穫は終了した。USDA の10月見通しによれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦とも前月見通しから引き下げられたことから、全体で362万トン下方修正され、4,490万トンの見通し。前年度と比較して、冬小麦は乾燥により減産も、春小麦が



出典：米国農務省 「PS&D」(2022.10)

前年度の干ばつの影響から回復したことから、合計では、前年度をわずかに上回るものの、過去20年で2番目の低水準となった。

生産量の下方修正に伴い、相対的に価格が高い米国の輸出見通しも下方修正され、2,109万トンと前年度を下回る見通し。

期末在庫量は、1,568万トンと過去15年で最低の水準。期末在庫率も30.9%と大きく低下する見通しであり、過去10年間で見て2013/14年度以来の低水準となっている。

(2) とうもろこしの生産・輸出見通し

USDA の「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10月16日時点のとうもろこしの収穫進捗率は45%と過去5年平均(40%)より進展している。

USDA の10月見通しによれば、前月見通しから124万トン下方修正され、3億5,295万トンの見通し。肥料価格の高騰による施肥量の少ない大豆などへの作付けのシフトによる作付面積減に加え、夏季のコーンベルト西部の高温乾燥による単収の低下などから、前年度より8%減の見通し。

減産に伴い、輸出見通しも下方修正され、5,461万トンと2年連続で減少の見通し。

期末在庫量は、2,977万トンと前年度より低下、期末在庫率は8.3%と過去10年間で最低、とうもろこしのシカゴ相場が過去最高値を付けた2012/13年度以来の低水準となる見通し。

(3) 大豆の生産・輸出見通し

USDA の「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10月16日時点の大豆の収穫進捗率は

は63%と過去5年平均(52%)より進展している。

USDAの10月見通しによれば、前月見通しから178万トン下方修正され、1億1,738万トンの見通し。とうもろこしからの作付けのシフトにより作付面積は増加したが、夏季の高温乾燥による単収の低下などから、前年度より3%減の見通し。

減産に伴い、輸出見通しも下方修正され、5,566万トンと2年連続で減少の見通し。

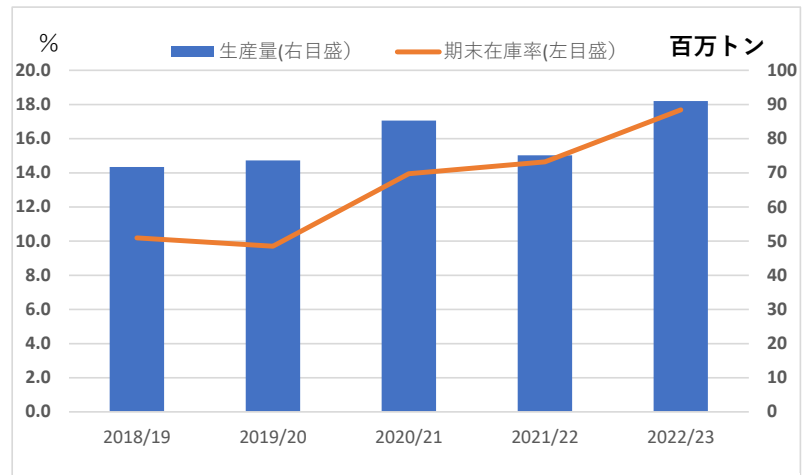
期末在庫量は、544万トンと前年度より低下、期末在庫率は4.5%と2013/14年度(2.6%)以来の低水準となる見通し。

図2 ロシアの小麦生産量と期末在庫率の推移

2 ロシア

(1) 穀物生産

ロシア農業省が公表した9月30日時点の収穫状況は、穀物、油糧種子全体で1億4,000万トン(クリミアを含む、その他のウクライナの占領地域は含まない)を超えた。そのうち、小麦については、収穫終盤を迎え、1億トン※を超えたとしている。



出典：米国農務省 「PS&D」(2022.10)

※注：あくまで品質調整前の数値(バンカーウェイト)のため、実際には数%少ない数量となるとみられる。

これは過去最高の数量であり、USDAの10月見通し(以下クリミアを除く)でも小麦の生産見通しは、対前年度比21%増で史上最高の9,100万トンとなる見通し。

とうもろこしについては、現在収穫中であるが、USDAの10月見通しでは、1,500万トンで対前年度比25%減も、過去5年で比較すると10%増となる見通し。

(2) 穀物輸出

小麦やとうもろこしの穀物輸出税については、7月以降、ドル建てからルーブル建てとなった結果、ドル換算で割安となり、8月以降、実質ドル換算では、下落傾向となっている。

USDAによれば、十分な期首在庫と生産量の増加、輸出税の低下に伴い、小麦の輸出量は4,200万トンと過去最高になるとみられている。とうもろこしの輸出量は、400万トン程度となる見通し。小麦の期末在庫率は17.7%と、前年度末の14.6%から上昇し、ここ数年間の中でも高水準で推移している。

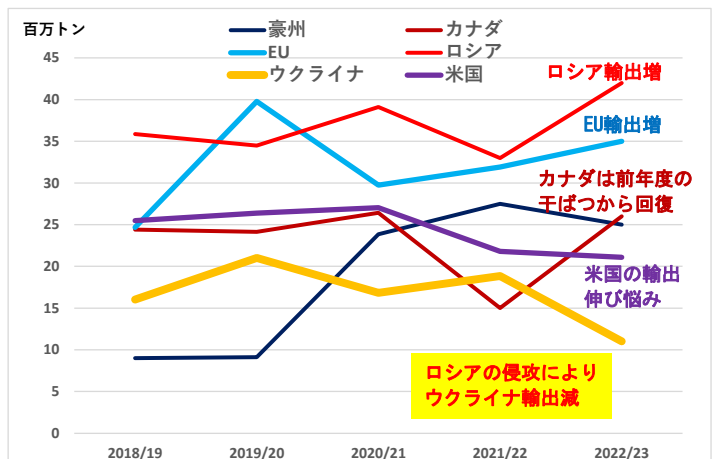
3 今後の世界の穀物貿易への影響

(1) 各品目の状況

小麦については、世界の生産量は前年度を上回る見通しとなっている。主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し(2,050万トン：以下USDA10月見通し)となっているウクライナを除き、ロシアは史上最高の生産見通し、カナダでは生産量は3,500万トンで、干ばつの前年度を大きく上回り、過去5年平均を上回る見通し。豪州の生産量は3年連続豊作見通しの3,300万トンとなっている。インドの輸出規制などの影響は限定的で、米国産は、輸出価格が高いため輸出競争で劣勢となっている。

とうもろこしについては、世界の生産量は前年度を下回る見通しとなっている。主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によるウクライナの減産(3,150万トン)、米国中西部の高温乾燥で減産見通しになっている。輸入国側では、EUが夏季の干ばつにより、対前年比20%以上減産(5,620万トン)となる見通し。今後のウクライナの輸出状況にもよるが、2021/22年度の冬作が豊作で、史上最高の生産見通しとなっているブラジル産に各国からの需要が集中するとみられる。5月にブラジル産の輸入について検疫事項で合意した中国の動向が注目される。

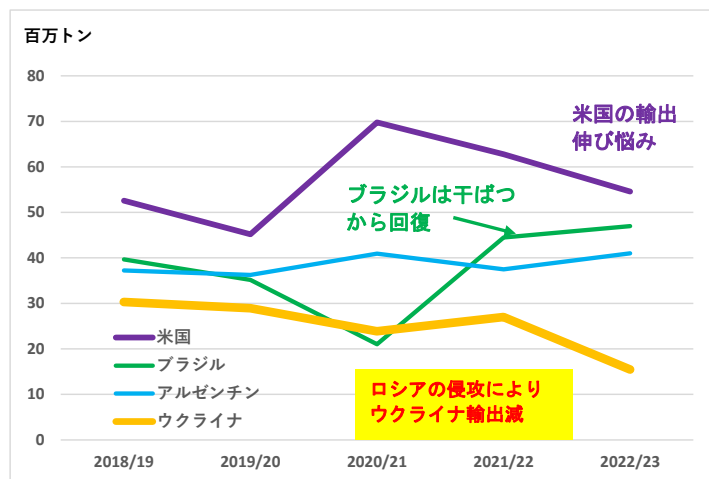
図3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

大豆については、米国は減産見通しであるが、世界の生産・貿易動向は、2022/23年度産の作付けが開始された南米次第である。南米では、現時点では作付面積の増加による大幅な増産(ブラジルで1億5,200万トンなど)が期待されているが、ラニーニャ現象が継続している中、今後の生育状況が注目される。

図4 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 10)

(2) ウクライナの輸出をめぐる4者合意の延長

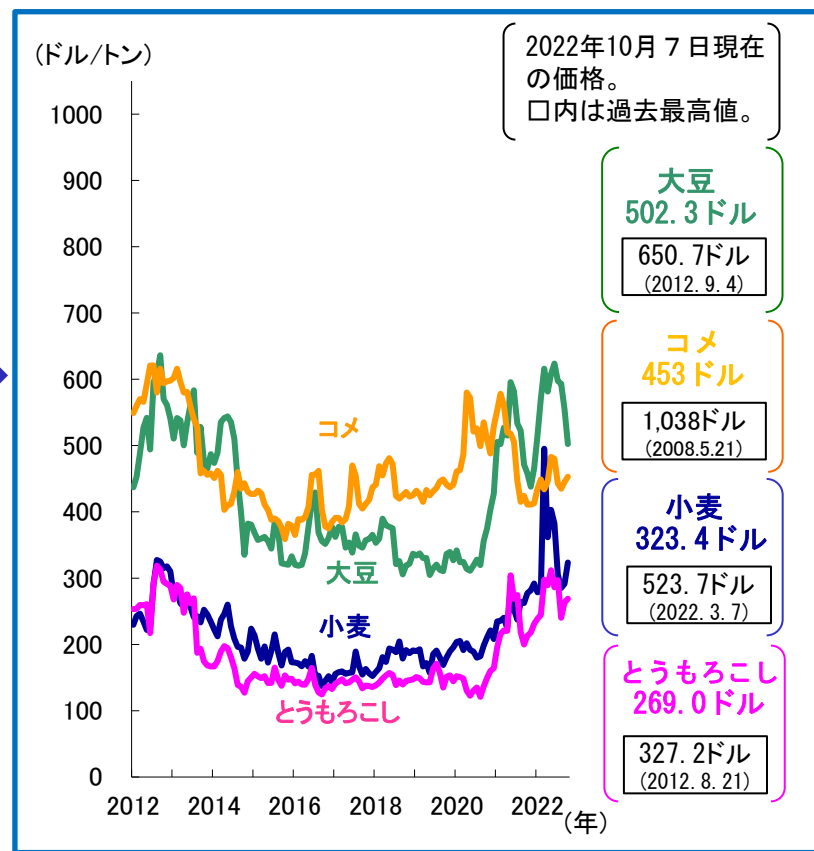
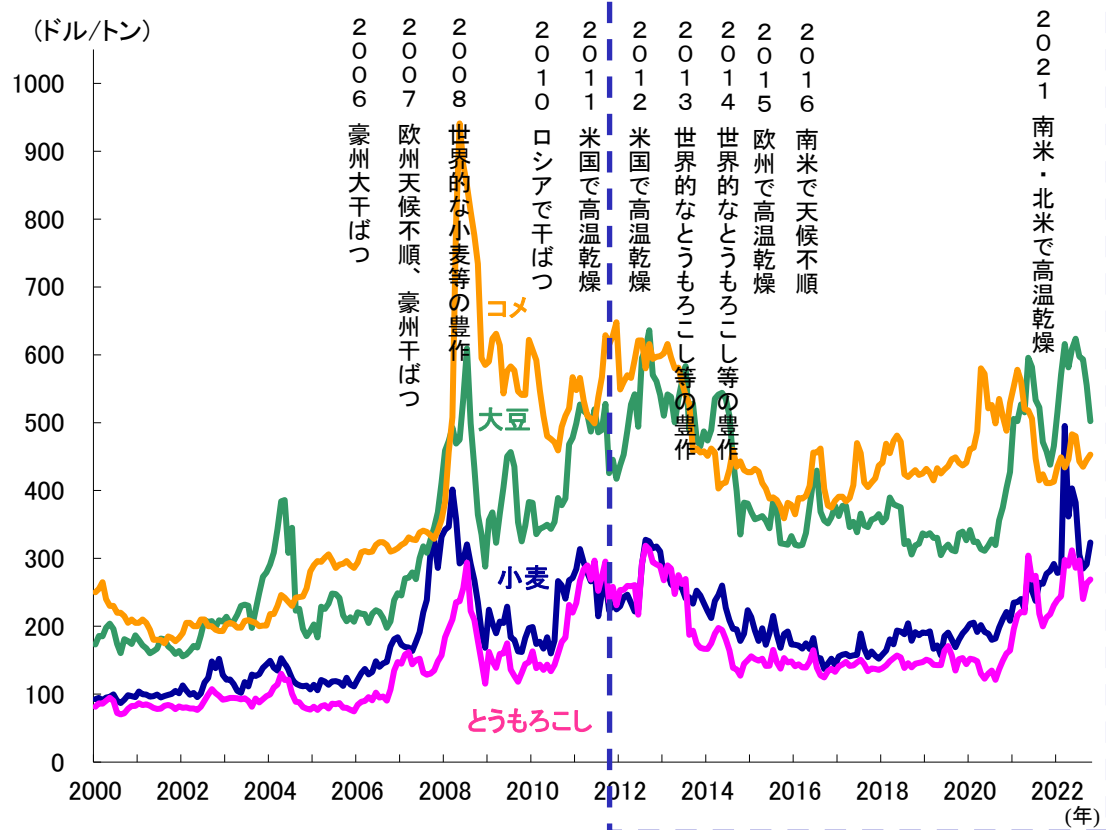
10月8日に、ロシア本土とロシア占領下のクリミア半島を結ぶクリミア橋の爆破事件が起き、その後、ロシア側のウクライナ国内のミサイル等による反撃があり、ウクライナ・ロシアの穀物輸出への影響が懸念されたが、10月下旬現在、穀物相場に影響を与え大きな動きは見られていない。むしろ、小麦や大豆を中心に、ドル高や米国の収穫進展などから9月下旬時点と比較して下落している。

一方、現行のウクライナの穀物輸出に関する4者合意については、11月19日で合意から120日となり、更新時期を迎える。報道等によれば、ウクライナ側はさらなる輸出拡大を求めて、共同調整センターの検査職員の増員や現在のオデーサ港など3港に加えミコラエフ港の追加を希望しているが、ロシア側がロシア産穀物や肥料の輸出拡大のため、障害となっている欧米側の経済制裁の緩和等を継続の条件としているといわれており、引き続きウクライナ情勢に注視が必要。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



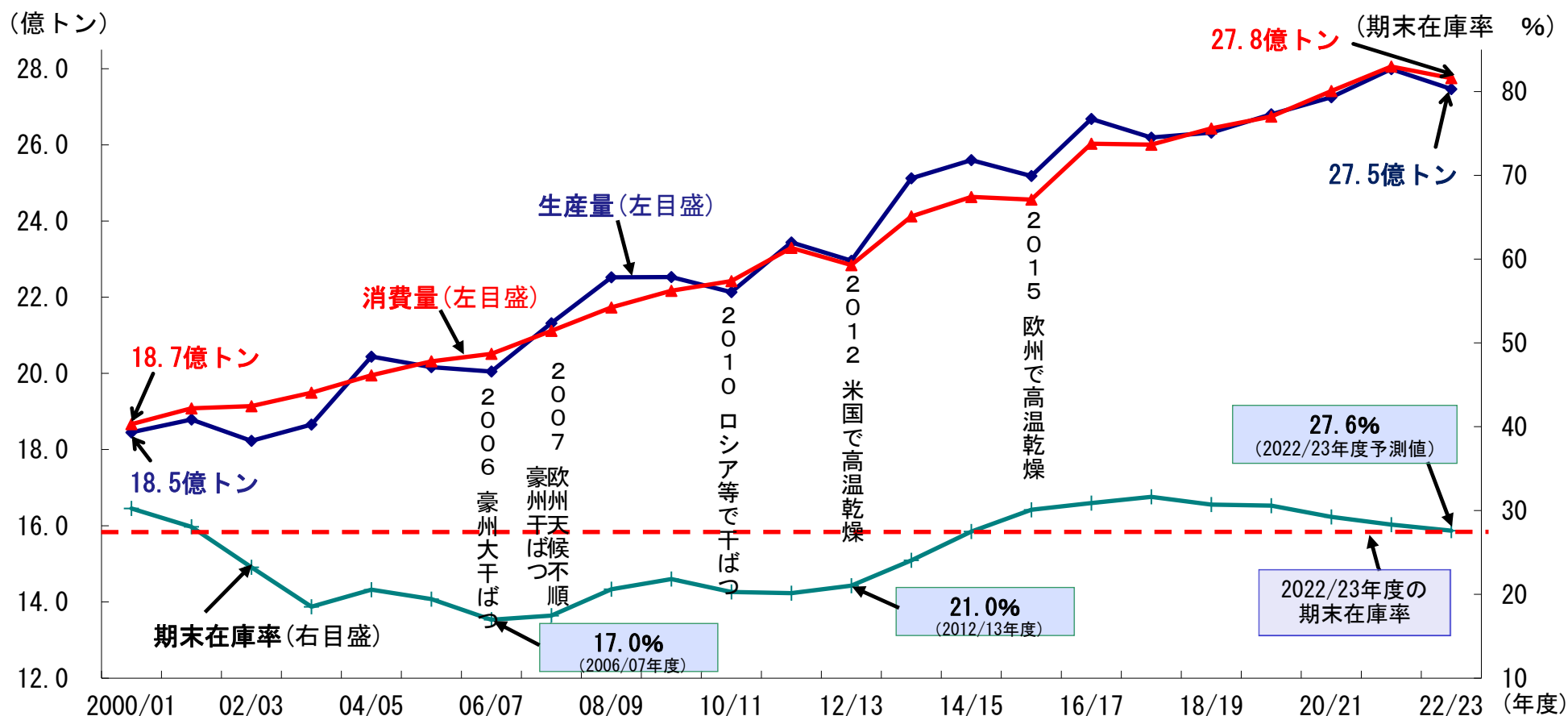
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.6%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

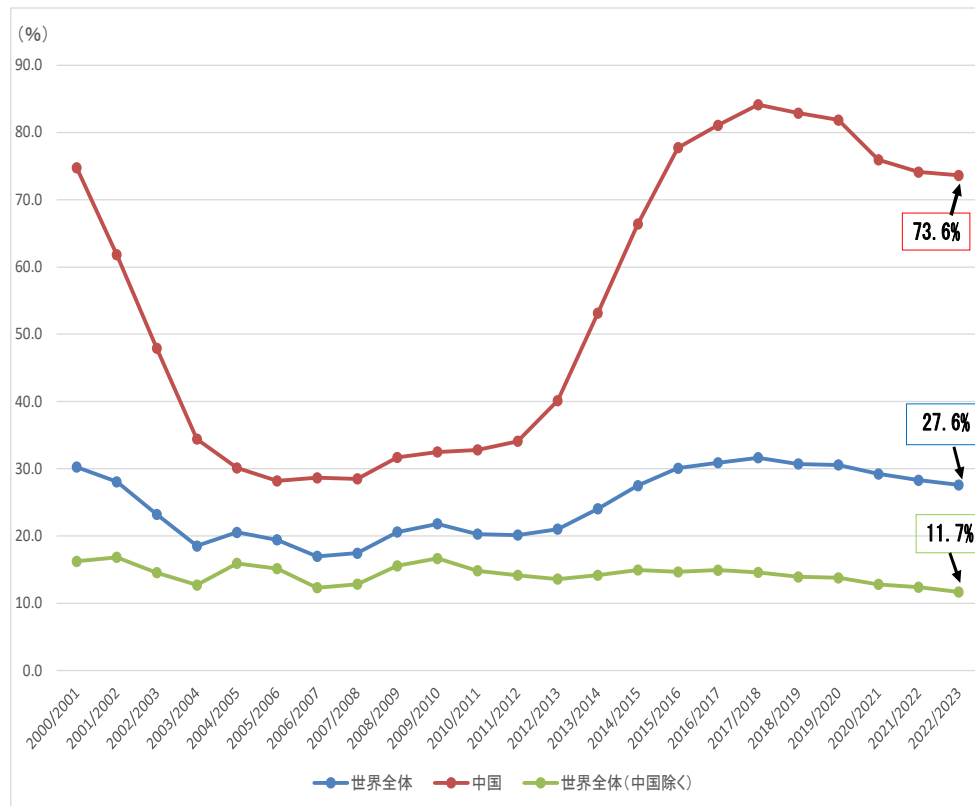


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (October 2022)、「PS&D」

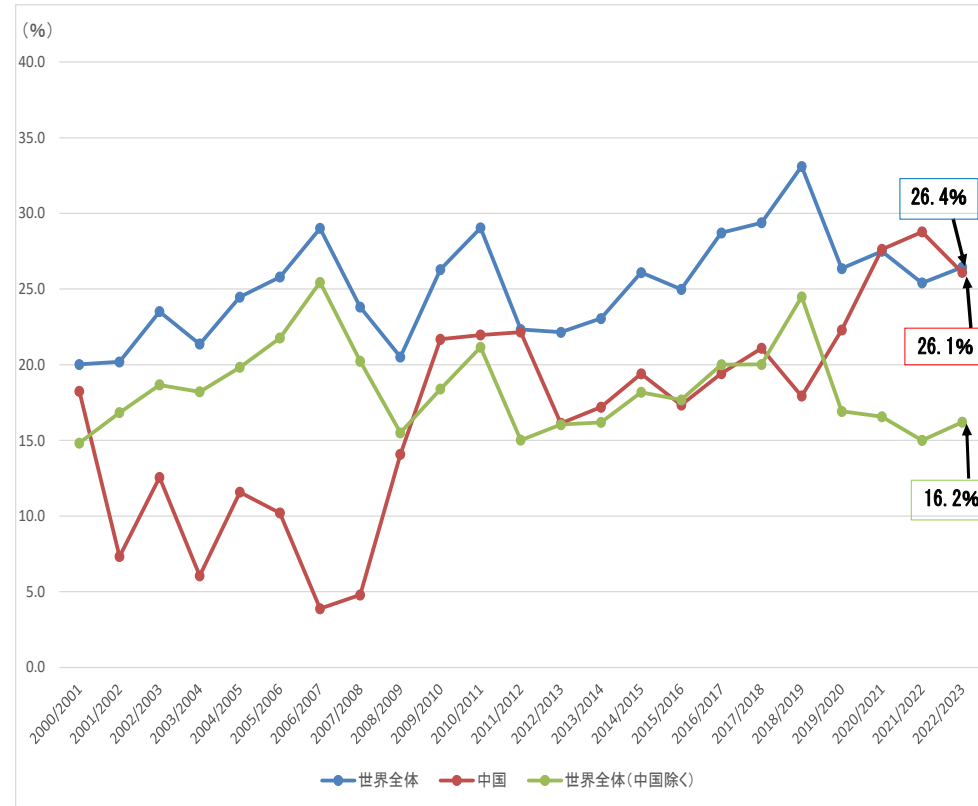
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

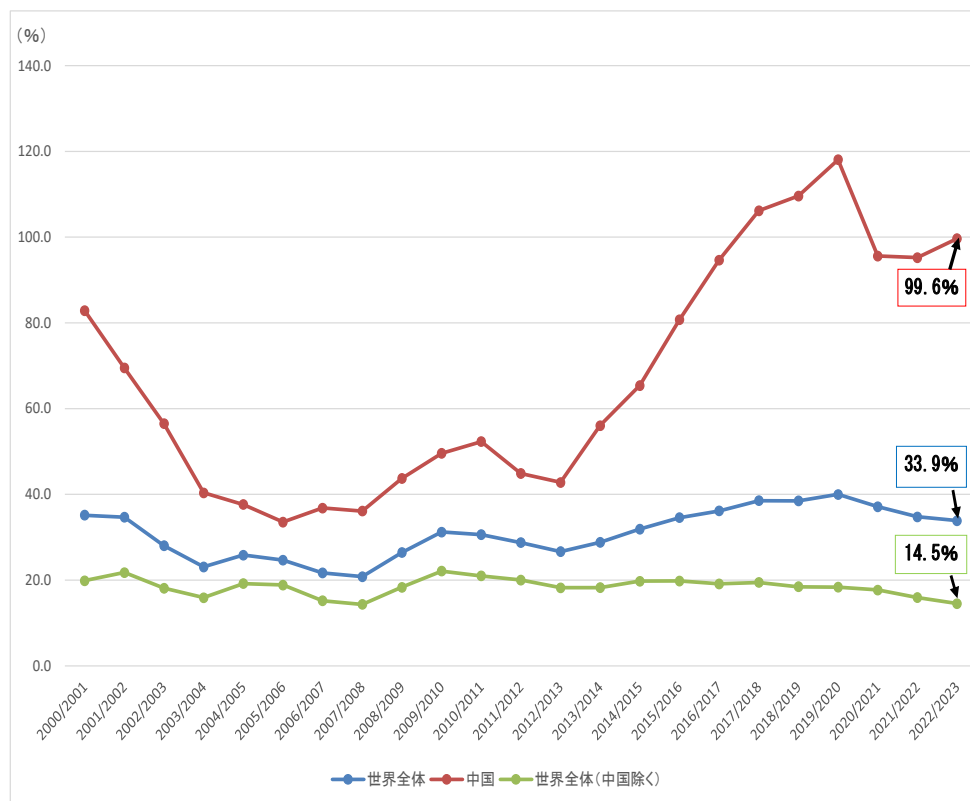
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

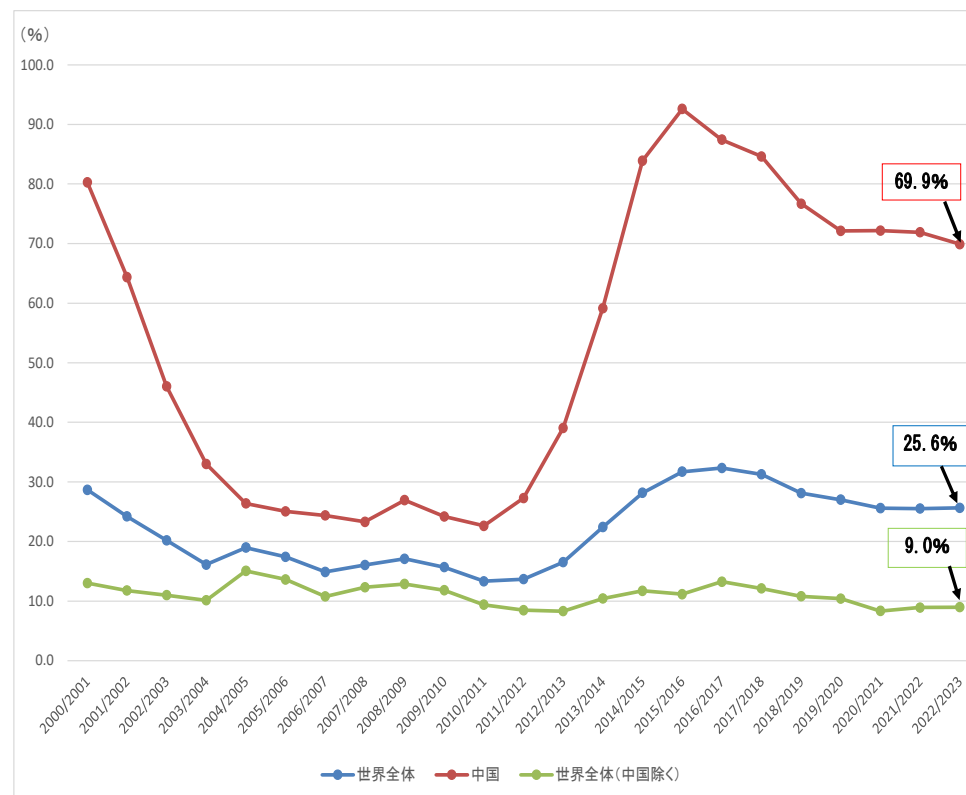
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

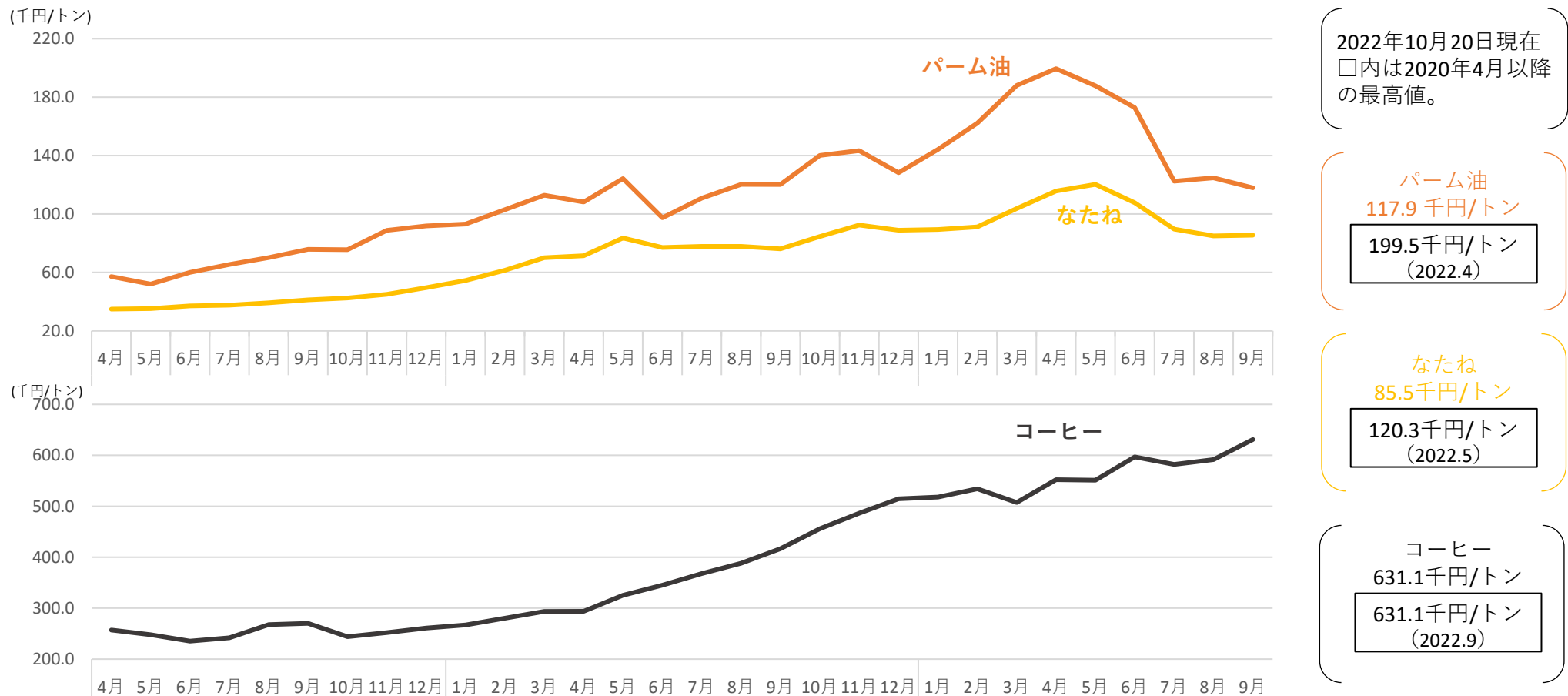
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

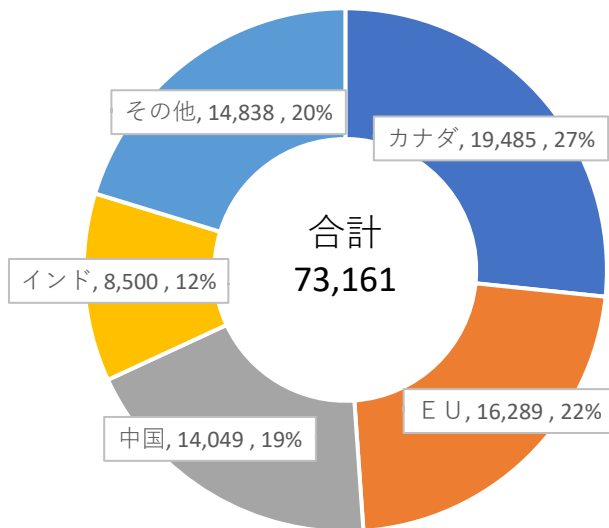


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

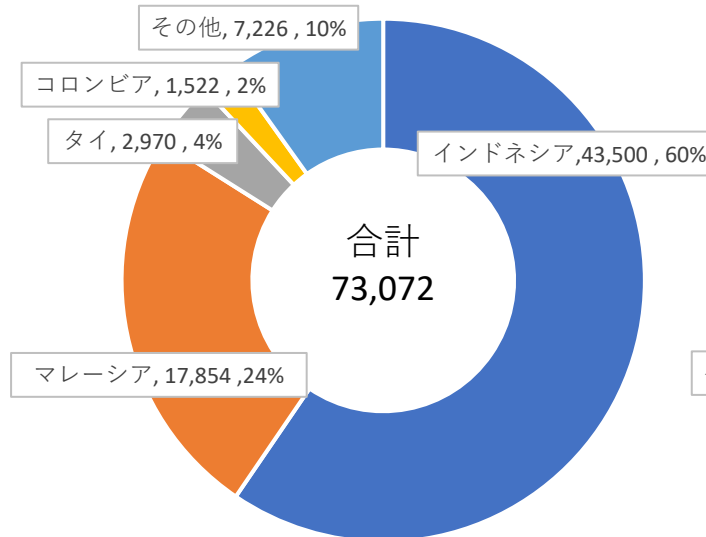
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



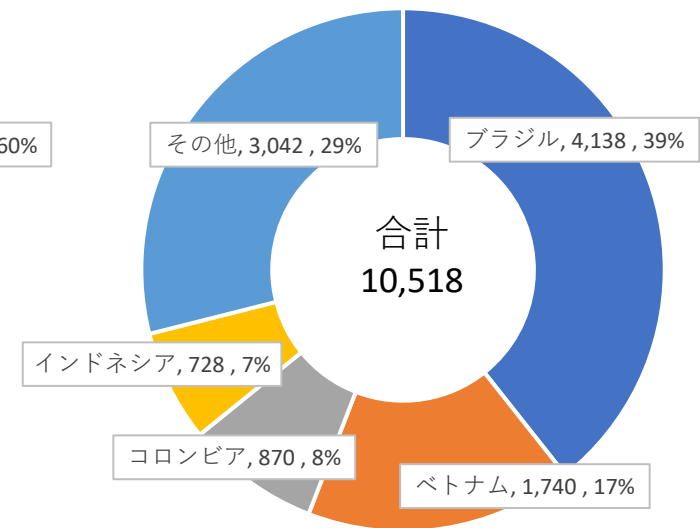
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年9月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.7～156.8（前年同月比で－1.3%～37.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年4月～令和4年9月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	108.0	107.5	107.9	111.9	114.4	113.8	14.6%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	12.8%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	103.1	104.0	104.7	104.9	105.1	106.7	5.0%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	134.8	135.4	139.2	145.8	150.4	156.8	37.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	100.7	101.0	99.8	99.9	100.1	103.4	3.4%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	123.9	126.1	125.0	125.2	126.5	127.0	14.2%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	103.0	105.3	104.0	106.2	106.6	113.2	12.5%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.1	99.5	99.3	99.1	99.4	98.7	－1.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	102.4	102.6	103.2	103.8	104.2	105.0	4.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年4月～令和4年10月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	0.2%	12.5%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	0.0%	11.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	2.9%	6.5%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	2.4%	42.4%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	0.8%	4.2%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	8.0%	18.4%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	5.9%	16.0%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	0.0%	-1.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年11月号（10月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）干ばつによりと畜頭数は増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002432.html

（豪州）ラニーニャ現象により肉牛取引価格は上昇傾向が継続

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002433.html

（ウルグアイ）22年の牛肉輸出量、堅調な需要を背景に増加傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002434.html

◆豚肉

（カナダ）豚総飼養頭数、4年ぶりに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002442.html

（EU）22年上半期の豚肉生産量は前年同期比で4.2%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002443.html

◆鶏肉

（タイ）22年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002444.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳牛飼養頭数は増加傾向も、大幅増は見込めず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002435.html

（EU）生乳取引価格は18カ月連続で前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002445.html

（NZ）生乳生産量は低迷も、乳製品輸出量は堅調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002446.html

（中国）主要乳製品輸入量の減少傾向続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002447.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度から微減の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002436.html

（世界）世界の大豆生産は前年増も、米国での減産見込で期末在庫は1億トン台割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002448.html

（米国）22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は8%台まで低下

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002449.html

（ブラジル）21/22年度トウモロコシ生産量、第2期作を中心に大幅増の見込み

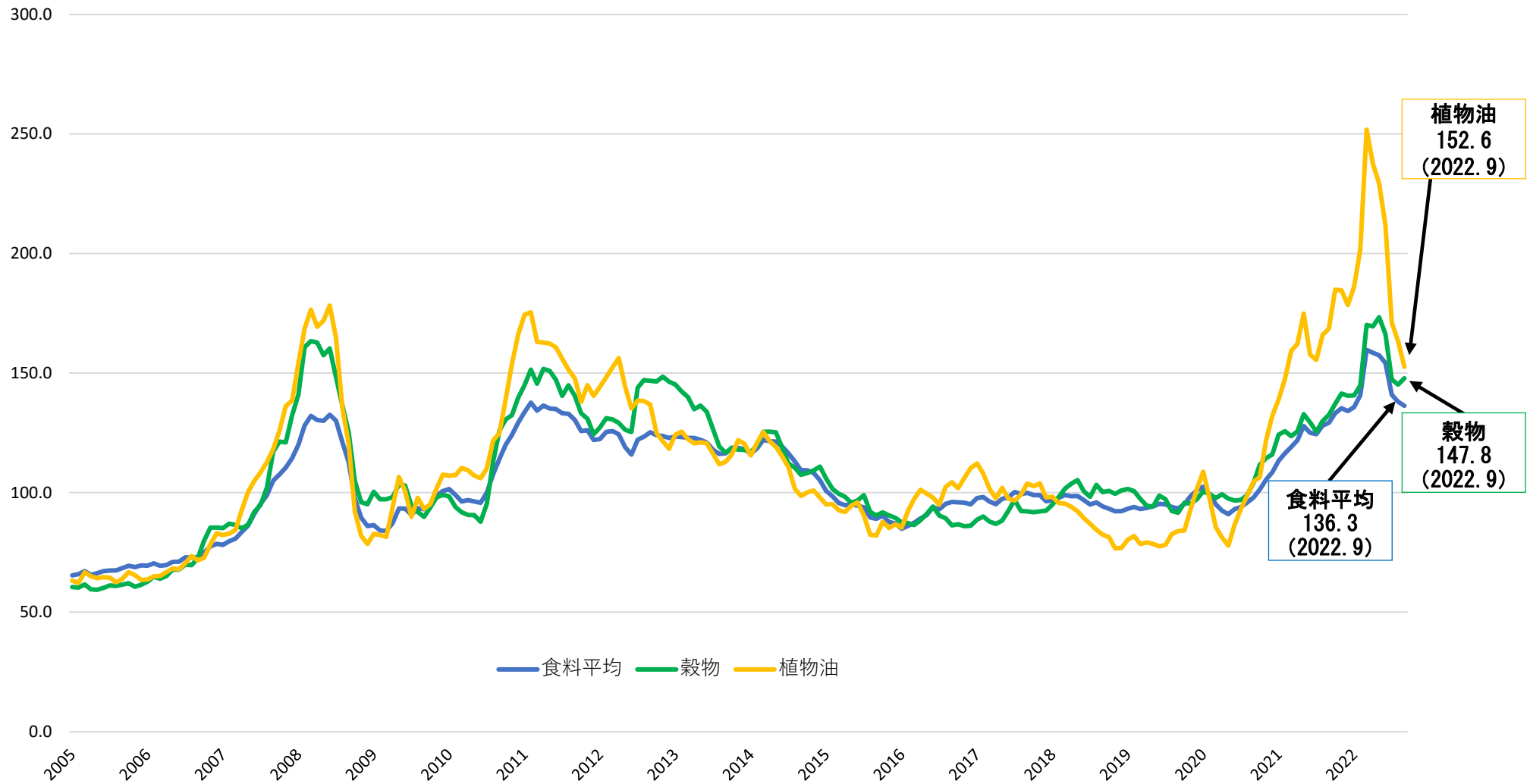
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002461.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002450.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.10)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・EU 等で上方修正されたものの、米国、アルゼンチンで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

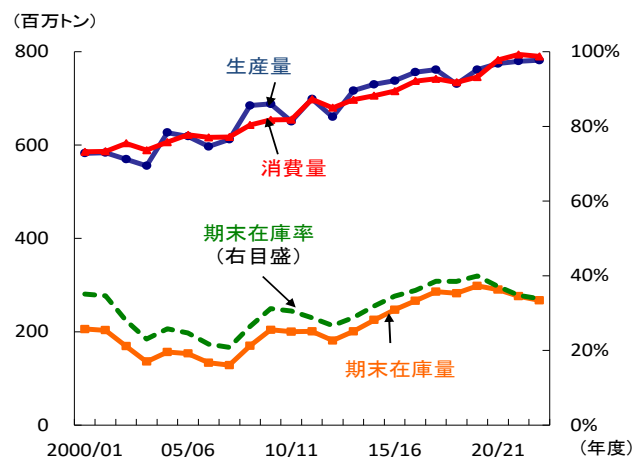
消費量 前年度比 前月比

- ・EU で上方修正されたものの、米国、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 前月比

- ・EU 等で上方修正されたものの、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料：USDA「PS&D」（2022. 10. 12）をもとに農林水産省にて作成

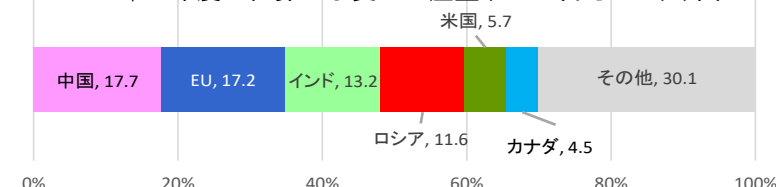
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

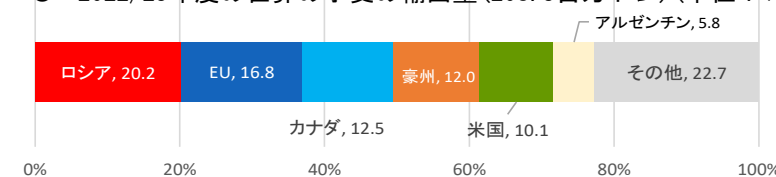
年 度	2020/21	2021/22 （見込み）	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.5	779.8	781.7	▲ 2.2	0.2
消 費 量	782.2	794.2	790.2	▲ 0.9	▲ 0.5
うち飼料用	158.1	161.0	155.5	0.3	▲ 3.4
輸 出 量	203.4	202.8	208.3	▲ 0.6	2.7
輸 入 量	195.4	197.9	203.9	▲ 0.3	3.0
期末在庫量	290.4	276.0	267.5	▲ 1.0	▲ 3.1
期末在庫率	37.1%	34.8%	33.9%	▲ 0.1	▲ 0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 （12 October 2022）

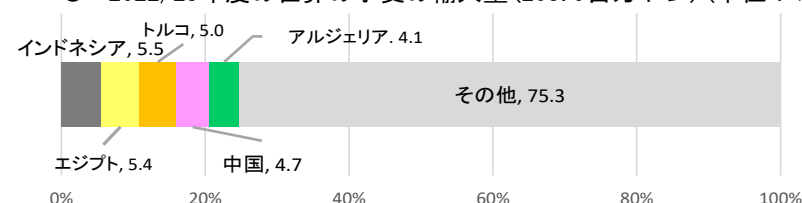
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量（781.7百万トン）（単位：％）



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量（208.3百万トン）（単位：％）



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量（203.9百万トン）（単位：％）



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は前月予測に比べ 3.6 百万トン下方修正の 44.9 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測から 3.6 百万トン下方修正され 44.9 百万トンと 2003/04 年度以降で 2 番目に少なく、前年度に比べ 0.2% 増加に留まった。

作期別には、冬小麦、春小麦とも収穫面積と単収が引き下げられたことから、冬小麦の実生産量は前月予測に比べ 2.6 百万トン下方修正され 30.0 百万トン、春小麦は前月予測に比べ 0.8 百万トン下方修正され 13.1 百万トン。デュラム小麦は、収穫面積の引き下げから、前月予測に比べ 0.2 百万トン下方修正され 1.7 百万トンの見込み。なお、前年度に比べると、2022/23 年度の冬小麦は 5 年平均(33.9 百万トン)を上回るものの、主要生産地の干ばつの影響で生産量が減少し、前年度を 13.6% 下回る。春小麦、デュラム小麦は降雨過多による播種遅延があったものの、前年度の乾燥により減少した生産量から回復。春小麦は 5 年平均(13.7 百万トン)を下回ったものの前年度を 45.7% 上回る。デュラム小麦は 5 年平均(1.6 百万トン)、前年度(69.9%)を上回っている。

「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、10 月 16 日時点の 2023/24 年度冬小麦の主要生産 18 州の作付進捗率は、69%と前年度(69%)並で、5 年平均(68%)を上回っている。HRW(ハード・レッド・ウインター)の主要生産州であるテキサス州では 70%と 5 年平均を 7 ポイント上回るものの、オクラホマ州で 53%、カンザス州で 64%と、それぞれ 5 年平均を 13 ポイント、2 ポイント下回っている。

国際価格の高さは播種面積拡大のインセンティブとなる一方、生産者は投入コスト上昇や干ばつに直面している。また、米国東部の SRW(ソフト・レッド・ウインター)の生産地であるイリノイ州、インディアナ州の作付進捗率も、それぞれ 39%、47%と 5 年平均の 51%、52%を下回っている。一部地域では大豆の収穫後に小麦を作付けしているため、大豆の収穫遅延が小麦の播種遅延要因となっている。なお、冬小麦の同日時点の発芽進捗率は 38%と前年度(42%)、5 年平均(44%)を下回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 1.4 百万トン下方修正され、21.1 百万トンとなる見込み。8 月の輸出量は 2.9 百万トンで、輸出先国は、中国(15.8%)、メキシコ(13.1%)、ナイジェリア(8.7%)、フィリピン(8.6%)の順。

期末在庫量は、前月に比べ 0.9 百万トン下方修正され、2008/09 年度以降で最低の 15.7 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 2014/15 年度以降最低の 30.9%(P 5 注目情報参照)。

小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

(単位：百万トン)

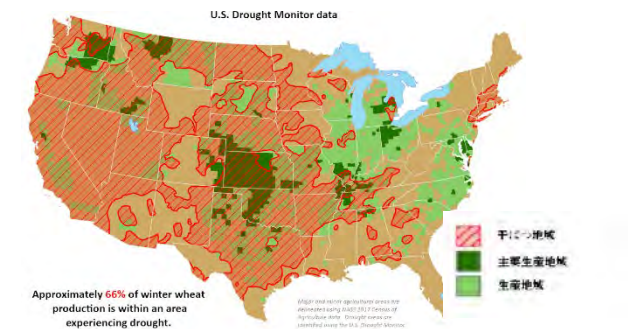
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	▲ 3.6	0.2
消費量	30.4	30.4	29.6	▲ 0.8	▲ 2.6
うち飼料用	2.5	2.3	1.4	▲ 0.8	▲ 41.6
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	▲ 1.4	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	0.3	26.3
期末在庫量	23.0	18.2	15.7	▲ 0.9	▲ 13.9
期末在庫率	40.0%	34.9%	30.9%	▲ 0.5	▲ 4.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	▲ 0.83	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	▲ 0.07	5.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図 米国の冬小麦生産地帯の干ばつ状況(2022. 10. 11)



資料：USDA 「Drought Monitor」(2022. 10. 11)

図 米国産小麦の輸出先国別輸出量

2022年8月			2022年1月～8月		
国名	検証高(万トン)	シェア(%)	国名	累積検証高(万トン)	シェア(%)
中国	45.1	15.8	メキシコ	311.9	19.0
メキシコ	37.4	13.1	フィリピン	194.8	11.9
ナイジェリア	24.9	8.7	日本	173.9	10.6
フィリピン	24.6	8.6	ナイジェリア	106.2	6.5
日本	20.7	7.3	韓国	89.8	5.5
その他	132.5	46.5	その他	762.8	46.5
合計	285.2	100.0	合計	1,639.4	100.0

注 1. 9 月の輸出検証高は、9 月 8、15、22、29 日の合計値

注 2. 2022 年累積輸出検証高は、2022 年 1 月 6 日～9 月 29 日の合計

資料：USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022 年 10 月 12 日)より作成。

< カナダ > 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.10.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、34.7 百万トンの見込み。生産量は、収穫面積と単収の引き上げから、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べ 55.6%増加する見込み(過去 5 年平均対比 13.3%増)。

このうち、普通小麦、デュラム小麦はともに、前月予測からの変更はなく、それぞれ 28.6 百万トン、6.1 百万トンの見込み。前年度に比べ、播種面積、単収の引き上げと改廃率の低下から、普通小麦は 48.4%増加し(過去 5 年平均対比 11.9%増)、デュラム小麦は 101.3%増加する見込み。(過去 5 年平均対比 20.6%増)。現時点では、普通小麦は含有タンパク質が 14.1%と前年度より低下するものの、5 年平均(13.5%)を上回り、大部分が 1～2 等に格付けされる見込み。また、デュラム小麦も含有タンパク質が 14.5%と前年度より低下するものの、5 年平均(14.3%)をわずかに上回り、大部分が 1～2 等に格付けされる見込み。

AAFC 及び主要生産各州の政府報告によれば、サスカチュワン州及びアルバータ州では収穫が終了した。また、マニトバ州では、10 月 18 日現在、春小麦の収穫進捗率が 98%である。なお、アルバータ州産小麦の品質は、春小麦が 5 年平均を上回るものの、デュラム小麦は下回った。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 54.0%増加の 23.3 百万トン。

そのうち、普通小麦は前月予測から 0.1 百万トン上方修正され 18.3 百万トンと、生産量の回復と主要輸出国の輸出減少から、前年度に比べ 47.4%の増加。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく 5.0 百万トンと、生産量の回復、高温・乾燥の影響を受けたイタリアや北アフリカ(特にモロッコ)等の需要増が見込まれることを受け、前年度に比べ 84.1%の増加。なお、デュラム小麦の輸出ペースは、在庫量が引き締まっているため低調であった。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23 年度(2022 年 8 月～2023 年 7 月)の 8 月の輸出量は普通小麦が 1.0 百万トン、デュラム小麦は 0.1 百万トンの計 1.1 百万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(21.4%)、日本(12.7%)、バングラデシュ(11.8%)、デュラム小麦は、イタリア(44.2%)、米国(19.6%)、モロッコ(16.4%)の順。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

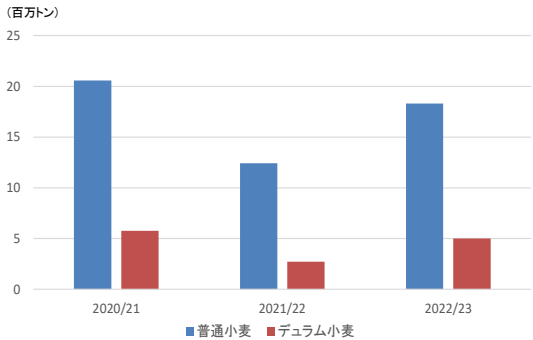
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、() は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	35.4	22.3	35.0 (34.7)	-	57.0
消 費 量	9.1	10.2	9.1 (9.0)	-	▲ 10.6
うち飼料用	4.2	5.2	4.0 (4.6)	-	▲ 22.8
輸 出 量	26.4	15.0	26.0 (23.3)	-	73.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	6.0	3.7	4.2 (6.2)	-	13.6
期末在庫率	16.7%	14.6%	11.9% (19.2%)	-	▲ 2.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.00 (34.70)	-	8.8
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.50 (34.70)	-	44.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 October 2022)

図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出量の推移



資料：カナダ農務農産食品省「AAFC」(2022. 10. 21)にデータをもとに農林水産省で作成

図 カナダ産小麦の輸出先国別輸出量

< 普通小麦 >

< デュラム小麦 >

2022年8月			2022年8月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
中国	21.5	21.4	イタリア	5.9	44.2
日本	12.8	12.7	米国	2.6	19.6
バングラデシュ	11.9	11.8	モロッコ	2.2	16.4
スペイン	9.0	9.0	スペイン	1.1	8.1
インドネシア	7.7	7.7	ペルー	0.9	6.7
その他	37.6	37.4	その他	0.7	5.0
計	100.5	100.0	計	13.4	100.0

注1: Canadian Grain Commission が認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。

注2 普通小麦の: 品種は NO.1-3 Canada Western Red Spring No.1 Canada Western Red Winter

No.2 Canada Eastern Red Spring No.2 Canada Eastern Oter, デュラムは Canada Western Amber Durum Others

資料: Canadian Grain Commission 「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」(2022.10.2)をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トン、輸出先国は中国が増加

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、33.0 百万トンと史上最高の前年度(36.4 百万トン)を 9.2%下回るものの、史上 2 番目となる見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.9.6)によれば、2022/23 年度の主要生産州別の生産量は、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、10.2 百万トンと前年度に比べ 20%減少するものの、過去 5 年平均を 50%上回る。作付期には天候に恵まれたものの、一部地域では 6 月に降雨過多となり、現地情報によれば、さらに最近の降雨の影響で小麦生産量の約半数の品質が低下し、飼料向け小麦が予想以上に発生する可能性がある。

西オーストラリア州(WA 州)では、史上最高であった前年度に比べ 14%減少の 11.0 百万トン。5 月、6 月の理想的な生育条件で作付けが順調に進み、その後の平年を上回る気温や、7 月後半と 8 月の降雨で単収は良好となる見込み。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.10.6)によれば、9 月の天候が生育に非常に適していたため、2022/23 年度の WA 州の実生産量は 12.1 百万トン(前月 10.8 百万トン、前年度 12.9 百万トン)の見込み。小麦の播種面積は、一部がなたねにシフトし減少したものの、降水量の少なかった地域でも予想以上の単収となる可能性があり、南部地域でも更に生産量が増加する可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、25.0 百万トン。前年度(27.5 百万トン)に比べ 9.1%減少するものの、前年度に次ぎ史上 2 番目となる。

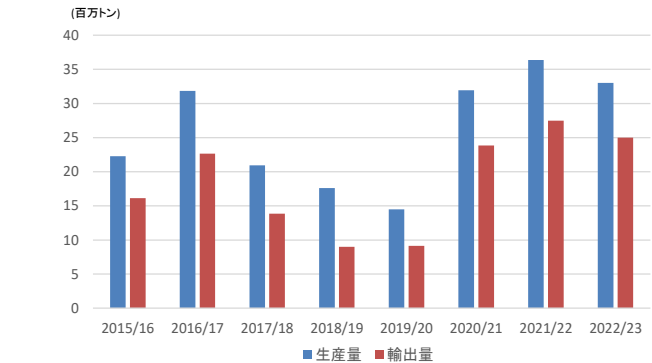
豪州統計局によれば、2022 年 8 月の輸出量は 2.5 百万トンと、前月(2.6 百万トン)に比べ減少。輸出先国は、インドネシア(17.6%)、フィリピン(16.7%)、ベトナム(12.8%)、中国(12.2%)の順。

また、2022 年 1 月から 8 月までの輸出量は 20.6 百万トンで、輸出先国は、中国(20.8%)、インドネシア(13.1%)の順。豪州は、これらのアジア諸国向けを中心に輸出をしているが、特に前年に 2.9 百万トンであった中国向けの輸出量は、すでに 8 月までに 4.3 百万トンまで増加している。現地情報会社によれば、中国は蒸しパン等に中国産と同程度のタンパク質含有量の豪州産を輸入している模様。

なお、3 年連続の豊作の見通しの豪州産穀物等への需要は高いが、ウクライナからの黒海経由の輸出が再開されたこと等から需給は緩和されているものの、穀物等輸出のサプライチェーンの状況や豪州産穀物等の作柄について引き続き注視が必要。

小麦一豪州		(冬小麦を主に栽培)			(単位:百万トン)	
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.4	33.0 (32.2)	-	▲ 9.2	
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.4)	-	0.6	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.8)	-	-	
輸 出 量	23.9	27.5	25.0 (25.0)	-	▲ 9.1	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	-	
期末在庫量	3.0	3.5	3.2 (3.7)	-	▲ 10.0	
期末在庫率	9.3%	9.7%	9.4% (11.2%)	-	▲ 0.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.10 (13.1)	-	0.5	
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.52 (2.47)	-	▲ 9.7	
資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 October 2022) IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)						

図 豪州産小麦の実生産量、輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.10.12)をもとに農林水産省で作成

表 豪州産小麦の輸出先国別輸出量

2022年8月			2022年1月～8月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
インドネシア	44.4	17.6	中国	427.8	20.8
フィリピン	42.0	16.7	インドネシア	270.5	13.1
ベトナム	32.2	12.8	フィリピン	241.4	11.7
中国	30.8	12.2	ベトナム	229.0	11.1
韓国	17.3	6.9	韓国	136.2	6.6
その他	85.1	33.8	その他	754.4	36.6
合計	251.8	100.0	合計	2,059.3	100.0

資料:豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞ 小麦の飼料用需要がとうもろこし等の代替で上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.9.30)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 1.3 百万トン上方修正されたものの、前年度に比べ 2.5%減少の 135.4 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ハンガリー等で下方修正されたものの、ポーランド等で上方修正されたことから、前月予測に比べ 1.1 百万トン上方修正の 128.0 百万トン。デュラム小麦は、イタリア等で上方修正されたことから、前月予測から 0.2 百万トン上方修正の 7.4 百万トン。

また、USDA によれば、EU27 の生産量は、前月予測から 2.7 百万トン上方修正され、134.8 百万トン、英国の生産量は前月予測からの変更はなく、14.6 百万トン。

フランスアグリメール(2022.10.12)によれば、2022/23 年度のフランス産普通小麦の品質は、タンパク質含有量が 12.4%(5 年平均に比べ 0.6 ポイント減)、容積重が 78.2 キログラム/ヘクトリットル(同 0.5 ポイント増)、水分含有量が 12.0%(同 0.9 ポイント減)となった。

9 月中旬から 10 月初旬にかけて、欧州の大部分で降雨があり土壌水分が供給された。フランスでは、10 月 10 日現在、2023/24 年度の普通小麦の播種は良好な天候に恵まれ、播種進捗率は 21%と前年度同時期 11%を上回っている。また、気温が高く発芽も順調に進んでいる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、干ばつによるとうもろこしの減産から、EU27 における小麦の飼料用需要は前月予測に比べ 1.0 百万トン上方修正され 45.0 百万トンの見込み。

なお、フランスアグリメール(2022.10.12)によれば、フランス飼料メーカの小麦、大麦、とうもろこしの使用量合計は、ここ 3 年間は減少傾向となっているが、2020/21 年度から 2022/23 年度の小麦の使用割合は、49.7%、53.7%、54.7%と増加傾向にある。USDA によれば、飼料用消費は、鳥インフルエンザの影響、エネルギーコストの高騰、環境負荷による飼育制限等から減少している。

EU27 の輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 35.0 百万トンと、7 月の高温乾燥で生産量は減少したものの、ウクライナの輸出減少分のシフトから前年度に比べ 9.7%増加の見込み。

欧州委員会によれば、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 7 月の輸出量は、普通小麦が 282.6 万トン(前年度同月 147.6 万トン)、デュラム小麦が 6.1 万トン(同 2.5 万トン)。

輸出先国は、普通小麦がモロッコ(28.2%)、アルジェリア(13.9%)、デュラム小麦がアルジェリア(50.8%)、リビア(18.0%)の順となっており、輸出先はアフリカ諸国が中心となっている。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

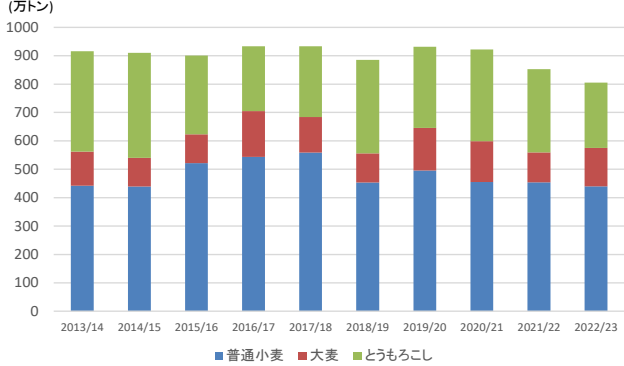
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.4	152.3	149.4 (147.9)	2.7	▲ 1.9
消 費 量	118.2	123.7	124.4 (121.5)	0.7	0.6
うち飼料用	48.5	52.4	52.6 (49.1)	1.0	0.4
輸 出 量	30.2	32.7	36.0 (37.2)	1.5	10.0
輸 入 量	8.6	7.2	7.5 (6.9)	-	3.6
期末在庫量	12.1	15.2	11.7 (14.4)	0.4	▲ 23.0
期末在庫率	8.2%	9.7%	7.3% (9.1%)	▲ 0.1	▲ 2.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.97	24.25	24.00 (25.78)	▲ 1.80	▲ 1.0
単収(t/ha)	5.94	6.28	6.22 (5.74)	0.06	▲ 0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)
表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 フランスの小麦、大麦、とうもろこしの飼料用途の推移



資料：FranceAgrimer (2022. 10. 12) をもとに農林水産省で作成

表 EU27 の普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

(普通小麦)			(デュラム小麦)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
モロッコ	79.7	28.2	アルジェリア	3.1	50.8
アルジェリア	39.4	13.9	リビア	1.1	18.0
パキスタン	21.7	7.7	コートジボワール	0.8	13.1
ヨルダン	17.9	6.3	サウジアラビア	0.3	4.9
エジプト	17.9	6.3	アイスランド	0.2	3.3
ナイジェリア	15.8	5.6	マリ	0.1	1.6
その他	90.2	31.9	その他	0.5	8.2
計	282.6	100.0	計	6.1	100.0

EC(欧州委員会)「Cereals exports and imports」(2022. 9. 25) をもとに農林水産省で作成。

< 中国 > 8月の小麦輸入先国のシェアは豪州が86.1%

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.10.9)によれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ1.1%増加の138.4百万トンの見込み。作期別には、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、生産量はそれぞれ131.9百万トン(対前年度0.4%増)、6.5百万トン(同17.7%増)の見込み。最近3年の冬小麦の作付面積は約22.0百万ヘクタールで安定しているが、市場で需要のある高品質小麦の作付面積が増加しており、2022/23年度は高品質小麦の冬小麦全体の作付面積に占める割合は前年度より1.2ポイント増加し、38.5%となった。

中央气象台によれば、10月13日現在、2023/24年度の冬小麦の播種進捗率は18.0%で、前年同期(11.4%)に比べ6.6ポイント進んでいる。2022/23年度は、冬小麦の播種時期の頻繁な降雨から、例年に比べ播種進捗率は遅れたが、2023/24年度は全国の冬小麦生産地で発芽に適した天候、土壌水分に恵まれている。中国糧油情報センターによれば、冬小麦の播種面積は前年度並みの見込み。

現地情報会社によれば、国内小麦価格の上昇で農家の収益が向上したため、栽培のコスト増による2023/24年度の播種面積への影響は少ないと見られる。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6百万トン)から18.4%減少の7.8百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022年8月の輸入量は、前年度同期(70.5万トン)を25.8%下回る52.3万トンで、輸入先国は、豪州が45.1万トン(86.1%)で大部分を占めている。なお、ロシアは560トン(0.1%)で、同国からの輸入実績は5月(58トン)以来となった。また、2022年1月～8月の輸入量は、前年度同期(693.0万トン)を10.5%下回る620.3万トンで、輸入先国は、豪州、フランス、カナダの順で、この3ヶ国で99.7%を占めた。現地情報会社によれば、豪州からの高い輸入シェアの要因は、豪州産の豊作と2年連続で好天に恵まれ品質が安定していることとみられる。

国家发展改革委員会(2022.9.30)によれば、2023年の輸入関税割当は、963.3万トンで、輸入割当内の関税は1%、輸入割当外の関税は65%。また、割当数量の内、90%が国営企業枠となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2022年8月号」によれば、8月は、国内市場においては、大部分の備蓄倉庫の入れ替え作業が終了し、小麦粉加工企業の需要が主であるが、小麦価格がとうもろこしより高いことから飼料用需要が減少し、需給に余裕があり、国内小麦価格は概ね安定した。

小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	138.0 (138.0)	-	0.8
消 費 量	150.0	148.0	144.0 (141.1)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5 (8.4)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4 (137.5)	-	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6% (96.7%)	-	4.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60 (23.6)	-	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85 (5.84)	-	0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図 中国の小麦需給の推移

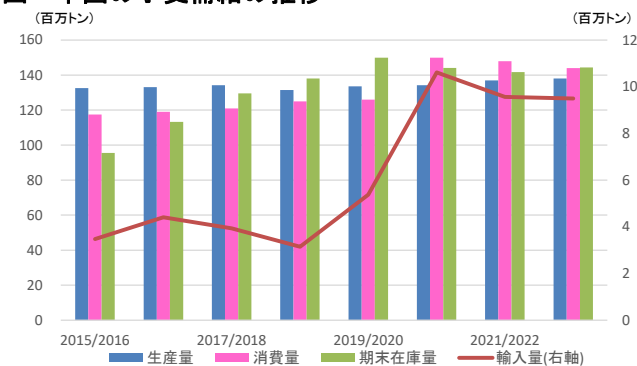


表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

(輸出货量: 万トン、シェア%)

2022年8月			2022年1月～2022年8月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	45.1	86.1	豪州	420.6	67.8	豪州	273.4	28.1
カナダ	7.2	13.8	フランス	144.5	23.3	米国	272.6	28.1
ロシア	0.1	0.1	カナダ	53.3	8.6	カナダ	254.0	26.1
-	-	-	カザフスタン	1.7	0.3	フランス	141.6	14.6
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	カザフスタン	18.7	1.9
-	-	-	米国	0.0	0.0	リビア	6.6	0.7
その他	-	-	その他	0.0	0.0	その他	2.9	0.3
計	52.3	100	計	620.3	100	計	971.8	100

資料: 中国海関統計(2022. 9. 20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量は史上最高の 91.0 百万トン、期末在庫量も高水準

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度（クリミア地域分を含まず）は、前月予測からの変更はなく 91.0 百万トンと、前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。

作期別の生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン、23.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、冬小麦の生産量は 30.3%増加。冬期の枯死も少なく生育状況が良好であったことから収穫面積、単収が増加した。一方、春小麦は 0.2%の増加。

現地情報会社によれば、10 月初旬に春小麦の産地であるシベリアで収穫作業がおおむね終了。同地域の生産量（重量調整後）は、単収の減少から前年度（11.1 百万トン）に比べ 18.9%減少の 9.0 百万トン。

ロシア農業省の速報値によれば、10 月 7 日時点で、収穫済み面積は 28.6 百万ヘクタール、収穫進捗率は 97.0%となり、重量調整前の収穫量は 103.0 百万トン（前年度同時期 36.1%増）である。

一方、同省によれば、10 月 7 日時点で、2023/24 年度の冬穀物の播種済み面積は対前年度同期 4.8%減の 12.0 百万ヘクタールと、天候不順により遅れているが現在のところ大きな問題はない。また、同省は、穀物生産のコスト上昇は、国際価格水準が高いため、生産者にとって危機的な状況ではないとの見方を示している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく前年度に比べ 27.3%増加の 42.0 百万トンの見込み。同年度に入り、当初は輸出ペースが比較的低調であったものの、価格競争力が高いことから、今後の輸出量は増加すると見られている。

現地情報会社によれば、9 月の輸出量は 3.9 百万トンで前年度同月（4.7 百万トン）を 17.2%下回る。また、2022/23 年度の 2022 年 7 月から同年 9 月の輸出量は 9.6 百万トンで過去 3 年の同時期平均（11.6 百万トン）を 16.8%下回った。輸出先国は、エジプト（22.4%）、イラン（12.7%）、トルコ（11.6%）。

USDA によれば、2022/23 年度のロシアの期末在庫量は、当初低調であった輸出量が増加すると見られるものの、2021/22 年度の輸出枠や、継続する輸出関税賦課により期首在庫が豊富なことや、生産量の増加により、期末在庫量は 1994/95 年度以降で最高の 15.4 百万トンに積み上がる見込み。

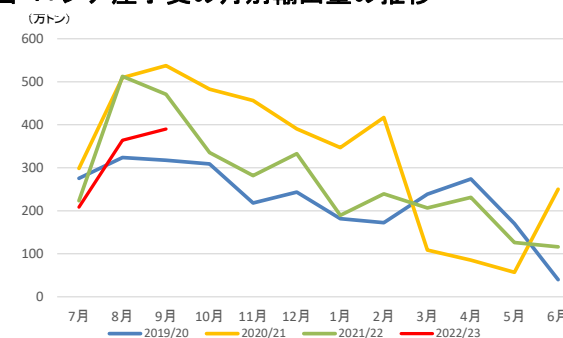
ウクライナからの穀物海上輸出に関する合意の期限を 11 月 19 日に迎えるが、この延長に関し、ロシア側は、国連との間で署名されたロシアからの食品と肥料の輸出に関する合意の履行に進展がないと主張。履行の条件が整わない場合、ウクライナ側の 4 者合意の更新を認めない可能性がある。

小麦一口ロシア（主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培） （単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (93.4)	-	21.1
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.8)	-	5.3
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.5)	-	7.7
輸 出 量	39.1	33.0	42.0 (36.6)	-	27.3
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	15.4 (22.5)	-	38.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	17.7% (27.3%)	-	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.7)	-	3.9
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.25)	-	16.5

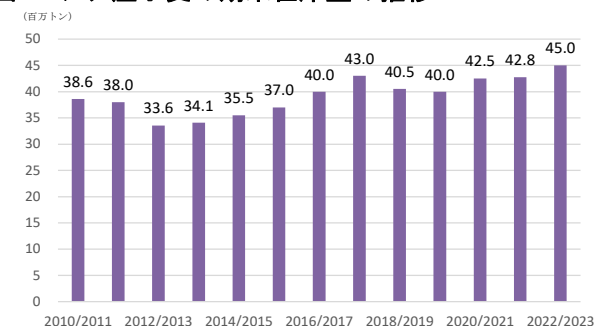
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

図：ロシア産小麦の期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022. 10. 12) をもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 生産量は過去5年平均を26.6%下回る20.5百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、20.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積が29.1%、単収が12.4%減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ37.9%減少、過去5年平均に比べ26.6%減少する見込み。

ウクライナ農業政策食料省(2022.10.21)によれば、2022/23年度の冬小麦、春小麦の収穫は終了。小麦全体の収穫面積は4.70百万ヘクタール、収穫量は19.4百万トン、単収は4.12トン/ヘクタール。

また、同省によれば、10月18日時点で、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は2.5百万ヘクタールで播種進捗率は61%である。なお、10月3日時点の播種予定面積は3.99百万ヘクタール。

ウクライナ東部では、オデッサ州の一部を除き、降雨により土壌水分が十分となり播種が進んだ。一方、北部、西部、中央部の大部分では、土壌水分過多によるヒマワリの収穫遅延から、その後に播種をする冬小麦の①播種の遅延、②播種面積の減少、③播種遅延に伴う越冬前の生育不足による冬枯れの懸念がある。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ41.6%減少の11.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、9月の小麦輸出量は前月に比べ100万トン増加したものの、前年度同月比では57%減の191万トン。同月の小麦輸出量は、主な穀物、油糧種子の輸出量686.8万トンの27.8%を占める。また、2022/23年度(2022年7月から2023年6月)の輸出量は321.7万トン。8月以降、黒海の港湾からの輸出再開で輸送効率が改善し、輸出量が増加した。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.10.21)によれば、9月30日現在、合意に基づく輸出量は548.7万トンで、そのうち小麦の輸出量は148.3万トンと全体の27.0%を占めている。輸出先国は、スペイン(24.5%)、トルコ(21.3%)、バングラデシュ(14.2%)の順。地域別には欧州諸国(33%)、アフリカ諸国(27%)、中東諸国(26%)、アジア諸国(14%)。

なお、黒海からの穀物輸送に遅れが生じている模様であるが、穀物輸送を行う船舶の急増等が要因とみられている。また、11月19日には、ウクライナからの穀物海上輸出に関する合意の期限を迎えるため協議が進められており、注視が必要。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	25.4	33.0	20.5 (21.5)	-	▲ 37.9
消 費 量	8.7	10.0	10.7 (8.2)	-	7.0
うち飼料用	2.6	4.0	5.5 (2.9)	-	37.5
輸 出 量	16.9	18.8	11.0 (13.0)	-	▲ 41.6
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6
期末在庫量	1.5	5.8	4.7 (7.6)	-	▲ 18.9
期末在庫率	5.9%	20.1%	21.7% (35.7%)	-	1.6

(参考)

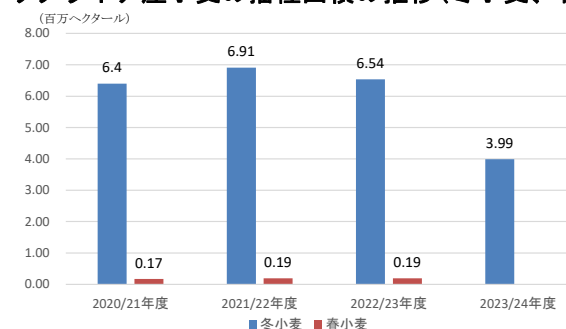
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.5)	-	▲ 29.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.90 (3.90)	-	▲ 12.4

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 October 2022)

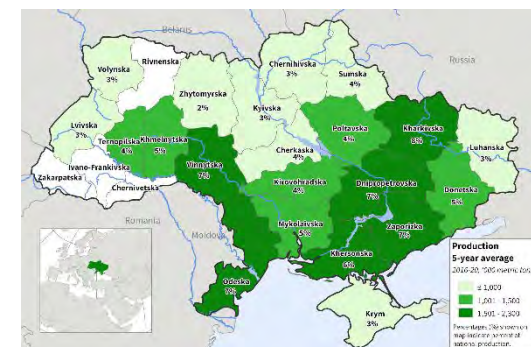
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：ウクライナ産小麦の播種面積の推移(冬小麦、春小麦)



資料：ウクライナ国家統計庁、農業政策食料省、現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2023/24年度の春小麦の播種は、2023年春に播種予定。

図：ウクライナの小麦生産地域と生産量



資料：USDA Global Crop Production maps

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

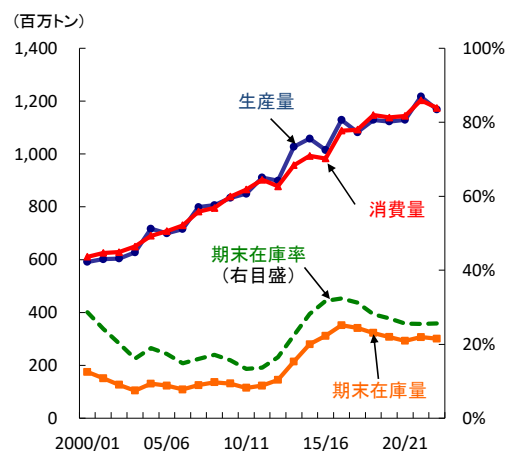
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ ウクライナ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ ウクライナ等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省にて作成

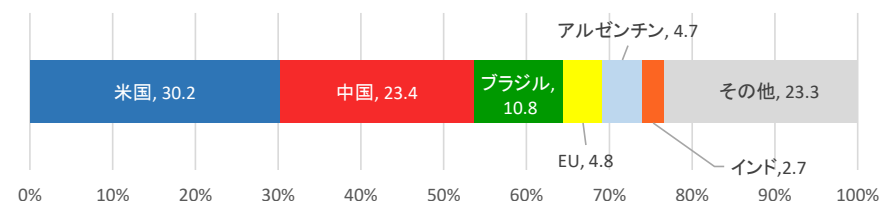
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

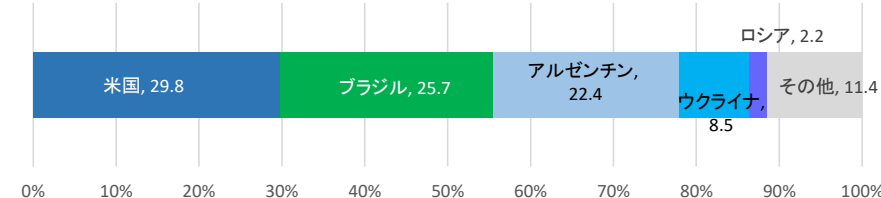
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.3	1,217.3	1,168.7	▲ 3.8	▲ 4.0
消 費 量	1,144.0	1,203.1	1,174.6	▲ 5.6	▲ 2.4
うち飼料用	723.9	752.0	740.2	▲ 2.8	▲ 1.6
輸 出 量	182.6	202.9	183.0	▲ 0.5	▲ 9.8
輸 入 量	185.0	183.9	179.0	0.7	▲ 2.7
期末在庫量	292.8	307.0	301.2	▲ 3.3	▲ 1.9
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.6%	▲ 0.2	0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

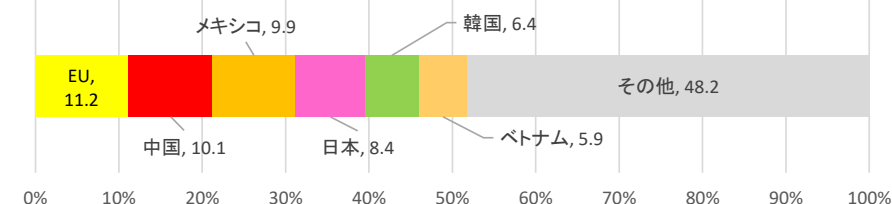
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,168.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(183.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(179.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、ネブラスカ州、カンザス州等のコーンベルト西部で８月から９月にかけての広範囲な干ばつの影響による単収の下方修正により前月予測から 1.2 百万トン下方修正され、前年度より 7.8%減の 353.0 百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2015/16 年度以来の低水準の見込み。

USDA「Crop Progress」（2022.10.17）によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要 18 州における成熟進捗率は 94%と前年度同期（97%）より遅れているものの、過去 5 年平均（92%）より進んでいる。収穫進捗率は 45%と前年度同期（50%）より遅れているものの、過去 5 年平均（40%）より進んでいる。作柄評価は、生育期の干ばつの影響により、良からやや良が 53%と前年度同期（60%）を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.9%減の 304.8 百万トンの見込み。なお、消費量のうち、飼料用消費が前月予測から 1.3 百万トン上方修正される一方、エタノール用消費が同量下方修正された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正と最近の米国産の輸出需要の低迷に伴い、前月予測から 3.2 百万トン下方修正され、前年度より 13.0%減の 54.6 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高（2022 年 1 月 6 日～9 月 29 日）は、44.1 百万トンであり、内訳は中国（13.2 百万トン）、メキシコ（11.3 百万トン）、日本（8.2 百万トン）、コロンビア（2.8 百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、期首在庫量及び生産量の下方修正により前月予測から 1.2 百万トン下方修正され、前年度より 14.9%減の 29.8 百万トンで 2012/13 年度以来最低の見込み。期末在庫率は 8.3%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

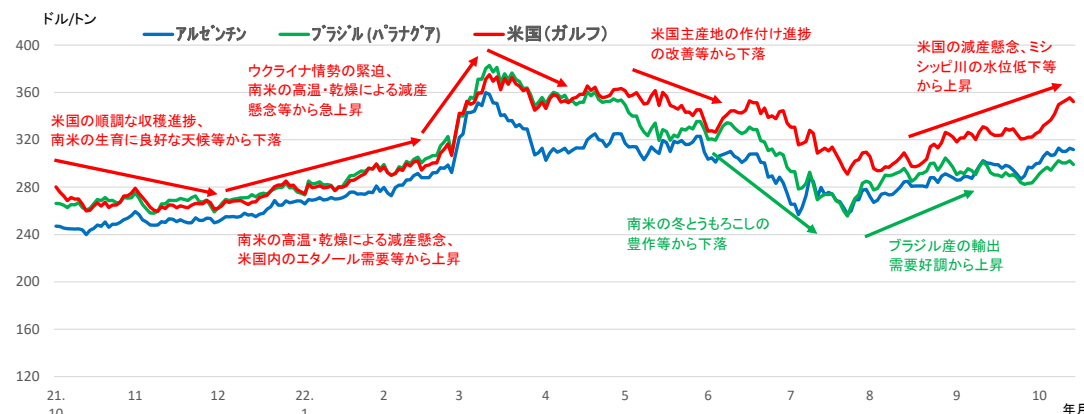
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	353.0	▲ 1.2	▲ 7.8
消 費 量	306.7	317.1	304.8	－	▲ 3.9
うち飼料用	142.3	145.2	134.0	1.3	▲ 7.7
エタノール用等	127.8	135.3	134.0	▲ 1.3	▲ 1.0
輸 出 量	69.8	62.8	54.6	▲ 3.2	▲ 13.0
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	0.6	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	29.8	▲ 1.2	▲ 14.9
期末在庫率	8.3%	9.2%	8.3%	▲ 0.3	▲ 0.9

（参考）

収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.72	－	▲ 5.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.79	▲ 0.04	▲ 2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 October 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より8.6%増の126.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2022.10.6)によれば、現在作付け中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、単収の増加により、前年度比14.6%増の28.7百万トンの見込み。一方、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.9%増の98.2百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比12.5%増の126.9百万トンで史上最高の見込み。(P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照)。

南部のパラナ州で10月17日現在、2022/23年度の夏とうもろこしの作付進捗率は78%と前年度同期(88%)より遅れている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で10月20日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は70%と前年度同期(70%)並みとなっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.5%増の77.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より5.6%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～9月の輸出量は24.7百万トンで、前年同期(12.8百万トン)と比べ1.9倍となっている。内訳は、1位がイラン4.7百万トン、2位がスペイン3.0百万トン、3位がエジプト2.9百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東・EU向け輸出が大幅に増加した。

とうもろこし－ブラジル

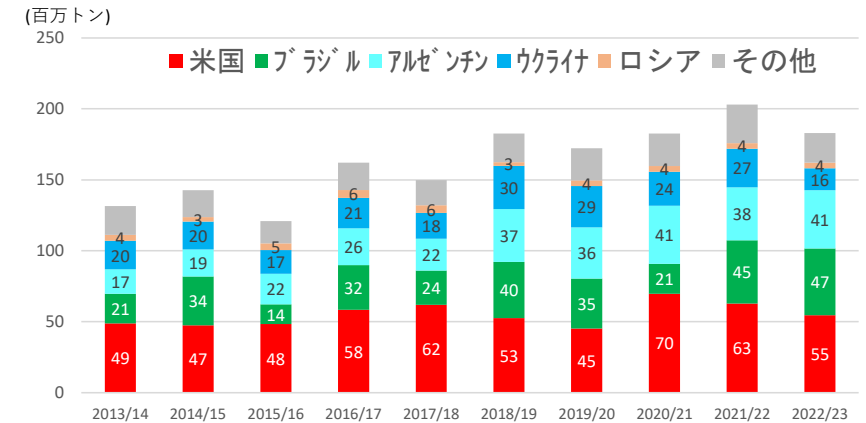
(大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	-	8.6	
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (78.7)	-	5.5	
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	-	5.6	
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	-	5.6	
輸 入 量	2.9	2.3	1.3 (0.5)	-	▲ 43.5	
期末在庫量	4.2	5.0	8.3 (7.5)	0.3	66.7	
期末在庫率	4.6%	4.2%	6.7% (6.2%)	0.2	2.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	-	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.65)	-	4.3	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.10.12)のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 6.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.10.20）によれば、降雨不足により 2022/23 年度の作付進捗率は 17%で、過去 5 年平均（31%）より 14 ポイント遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 9.3%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 27.4 百万トンで、前年同期（27.1 百万トン）より 0.9%増。内訳は、1 位がベトナム 4.0 百万トン、2 位が韓国 3.7 百万トン、3 位がエジプト 2.2 百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてアルゼンチン産のアジア向け輸出が増加した。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。10 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 10 百万トンと設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	51.5	55.0 (60.6)	-	6.8	
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (20.7)	-	2.2	
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (15.8)	-	2.0	
輸 出 量	40.9	37.5	41.0 (41.0)	-	9.3	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.5)	-	-	
期末在庫率	2.2%	2.9%	2.7% (4.1%)	-	▲ 0.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.40	7.00 (8.20)	-	▲ 5.4	
単収(t/ha)	7.94	6.96	7.86 (7.40)	-	12.9	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの貯蔵施設風景
（10月1日撮影）1961年稼働開始、容量1万トン



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より0.5%増の274.0百万トンで史上最高の見込み。なお、政府補助金による大豆生産奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積は減少する見込み。

国家糧油情報センター（2022.10.9）によれば、9月は東北地区の天候はおおむね良好で、土壌水分量も十分にあり、成熟に有利となった。中国中央气象台（2022.10.3）によれば、10月上旬現在、東北地区の春とうもろこしは乳熟期から収穫期にある。一方、河南省等の夏とうもろこしも、乳熟期から成熟期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より18.2%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～8月の輸入量は16.9百万トンで、前年同期比で20.9%減。内訳は、米国産11.7百万トン（69%）、ウクライナ産4.9百万トン（29%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年8月号」によると、8月の国内流通価格は、2,800 元/トンと前月（2,800 元/トン）から横ばいで推移。主な要因は、8月はとうもろこし市場の消費需要が弱く、とうもろこし加工は赤字となるため、多くの加工企業は集中的なメンテナンス期間に入ったほか、飼料企業の購入意欲も予想を下回ったためである。また、8月の輸入価格は、黒海からの穀物輸出再開に伴う国際相場の下落により2,860 元/トンと前月（3,020 元/トン）から下落した。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

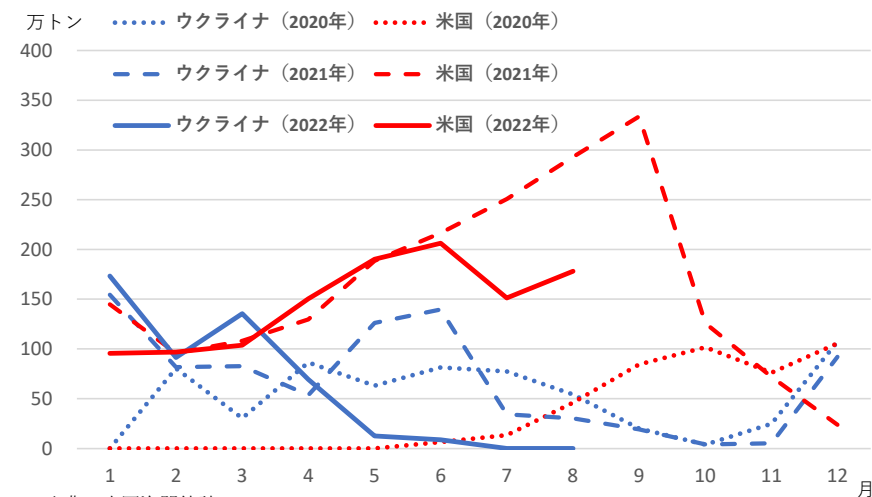
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	260.7	272.6	274.0	(273.0)	-	0.5
消 費 量	285.0	291.0	295.0	(305.2)	-	1.4
うち飼料用	203.0	209.0	214.0	(203.0)	-	2.4
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	22.0	18.0	(19.0)	-	▲ 18.2
期末在庫量	205.7	209.2	206.2	(175.0)	▲ 1.0	▲ 1.4
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.9%	(57.3%)	▲ 0.3	▲ 2.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00	(42.50)	-	▲ 0.7
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.37	(6.42)	-	1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より4割減

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、収穫面積及び単収の減少から、史上最高の生産量となった前年度より25.2%減の31.5百万トンの見込み。

ウクライナ気象センターによれば、9月は寒冷で、平年以下の気温が続き、中旬以降は南部を除いて国内全域でかなりの降雨があり、9月10日頃から収穫が開始された。ウクライナ農業政策食料省によれば、10月21日時点で、収穫済面積は52.8万ヘクタール、収穫進捗率は12%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸出量の上方修正に伴い、飼料用消費が前月予測から2.0百万トン下方修正され、前年度より6.1%減の10.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、干ばつで減産となったEU向け輸出の増加が見込まれることなどから、前月予測から2.5百万トン上方修正されたものの、前年度より42.6%減の15.5百万トンの見込み。また、2021/22年度の輸出量は、ウクライナからの穀物輸出に関する4者合意に基づく黒海の3港湾からの輸出再開を受け、前月予測から1.0百万トン上方修正され、2020/21年度より13.2%増の27.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省発表によれば、9月の輸出量は226万トンで、前月(185万トン)に比べ22%増。2021/22年度(2021年10月～2022年9月)の累計輸出量は、25.9百万トンで、2020/21年度(23.9百万トン)に比べ8%増。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.10.21)によれば、9月30日現在、輸出が再開された8月1日以降、黒海港湾からのとうもろこし輸出量は250万トン、輸出先国は、スペイン、トルコ、イタリア等である。

また、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から1.5百万トン下方修正され、前年度より2.2倍の9.9百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

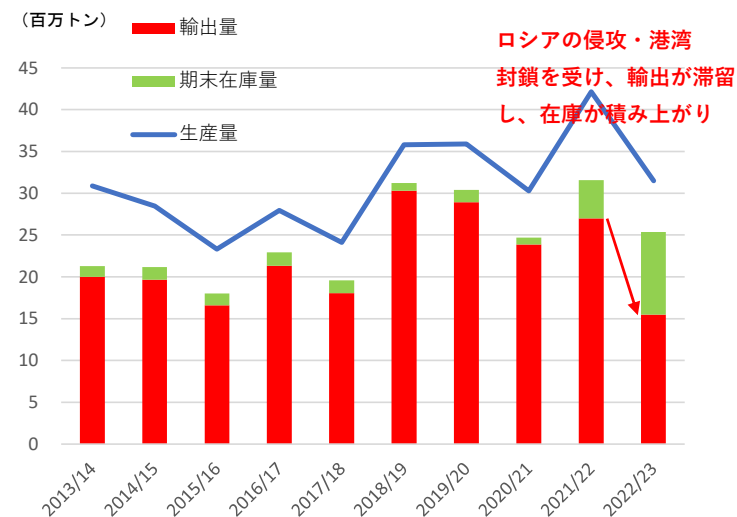
とうもろこしーウクライナ

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.3	42.1	31.5 (29.9)	-	▲ 25.2	
消 費 量	7.1	11.4	10.7 (10.9)	▲ 2.0	▲ 6.1	
うち飼料用	5.9	10.2	9.5 (5.5)	▲ 2.0	▲ 6.9	
輸 出 量	23.9	27.0	15.5 (17.0)	2.5	▲ 42.6	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	4.6	9.9 (8.9)	▲ 1.5	116.0	
期末在庫率	2.7%	11.9%	37.7% (32.1%)	▲ 6.6	25.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0	
単収(t/ha)	5.62	7.68	7.00 (6.52)	-	▲ 8.9	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

図: とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2022. 10. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・インド、パキスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。

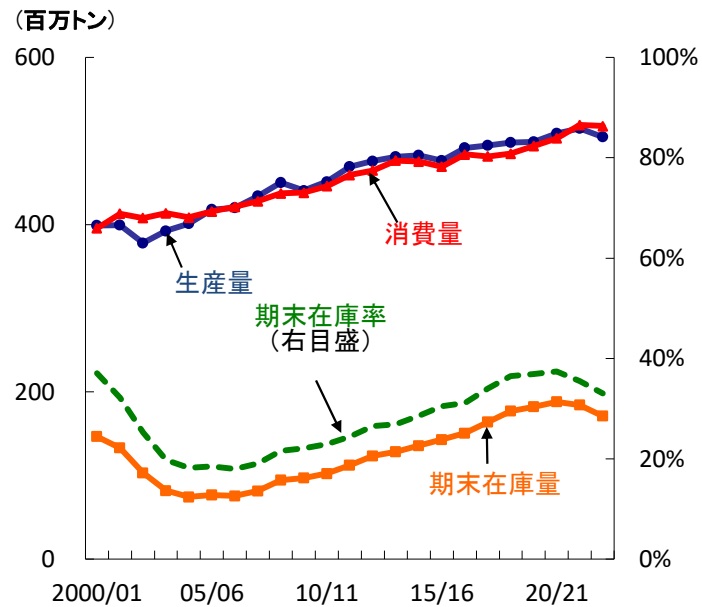
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・中国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ベトナム等で上方修正されたものの、インド、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022. 10. 12）をもとに農林水産省にて作成

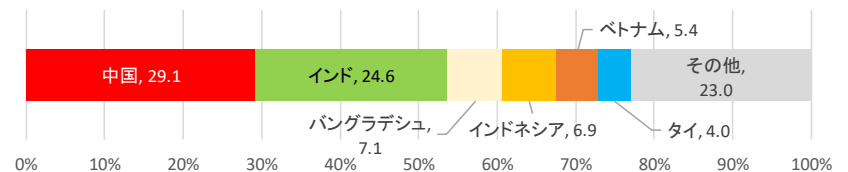
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

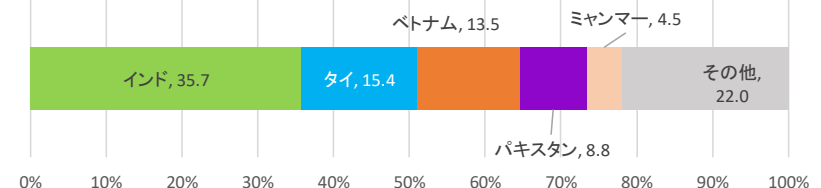
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.3	505.0	▲ 3.0	▲ 2.0
消 費 量	503.4	519.2	518.1	▲ 1.2	▲ 0.2
輸 出 量	50.9	55.5	53.2	▲ 0.4	▲ 4.1
輸 入 量	46.5	54.2	51.5	▲ 0.7	▲ 5.0
期末在庫量	188.2	184.3	171.2	▲ 2.4	▲ 7.1
期末在庫率	37.4%	35.5%	33.0%	▲ 0.4	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

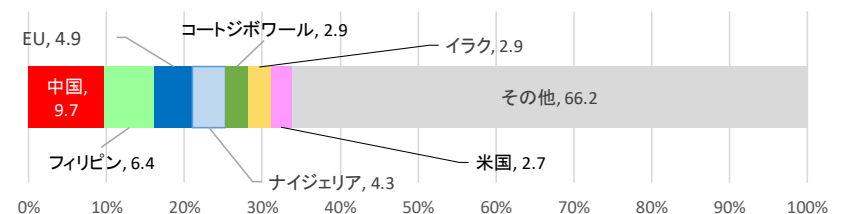
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(505.0百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(53.2百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(51.5百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により価格が高騰

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収の上方修正により、前月予測からわずかに上方修正されたものの、対前年度比13.8%減の5.3百万トンと、1993/94年度以来の低水準の見込み。収穫面積は、対前年度比で12.9%減少し、1983/84年度以来の低水準。このうちミシシッピ川下流域（長粒種の主産地）では、農業資材の高騰、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いこと、作付期の降雨過多による作付減少により、主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少する見通し。また中・短粒種の国内生産の75%を占めるカリフォルニア州では、長引く厳しい干ばつによる灌漑用水不足や取水制限により、2年連続で減少し、1958/59年度以来の低水準の見込み。

同「Crop Progress」(2022.10.17)によると、主要6州における収穫進捗率は89%と、前年度同期、過去5年平均とともに1ポイント下回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少により対前年度比6.9%減の4.5百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比16.7%増の1.4百万トンと史上最高の見込み。アジアからの香り米の輸入が大半を占めている。

2022/23年度の輸出量は、輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込みから、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比8.8%減の2.4百万トンと、1991/92年度以来の低水準の見込み。

同「Rice Outlook」(2022.10.14)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間上昇しており、10月11日までの週のイラク向け長粒種（2等、碎米4%混入）は725ドル/トンと、2008年10月初旬以来の高値となった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。また、中・短粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1等、碎米4%混入）で1,625ドル/トンと、過去最高を更新した。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

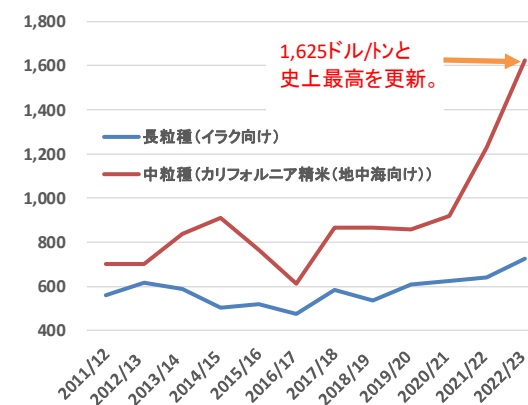
(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.3	0.0	▲ 13.8
消費量	4.9	4.8	4.5	-	▲ 6.9
輸出量	3.0	2.6	2.4	▲ 0.1	▲ 8.8
輸入量	1.1	1.2	1.4	-	16.7
期末在庫量	1.4	1.3	1.1	0.1	▲ 16.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	15.3%	1.2	▲ 1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.52	0.02	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図：米国の長粒種と中・単粒種の輸出価格の推移

(単位：ドル/トン)



資料：USDA「Rice Outlook」(2022.10.14)より。価格は年度内の平均価格。

なお、2022/23年度は2022年10月の価格。

< インド > 生産量、輸出量ともに下方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、インド政府が公表した第1回推計に基づき、前月予測から2.5百万トン下方修正され、対前年度4.8%減の124.0百万トンとなる見込み。これは、モンスーン期の降雨不足による作付減少が背景にある。

乾燥が続いていた主産地のウッタル・プラデーシュ州等北東部では、9月初旬までの降雨が不十分だったため、カリフ米（インドのコメ生産量の85%を占める）の収穫面積が対前年度比で1.9%減少する見込み。なお、例年より南西モンスーンの終了が遅れ、9月中旬以降、インドの主産地では降雨が続いているため、コメの収穫作業への影響が懸念されている。モンスーンの完全な終了は10月中旬の見込み。

インド農業農民福祉省（2022.9.30）の最終公表値によると、カリフ米作付済面積は、9月30日時点で40.29百万ヘクタールと、前年度同期（42.30百万ヘクタール）に比べて2.02百万ヘクタール減となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少から、対前年度比1.4%減の109.3百万トンの見込み。

2021/22年度の消費量は、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等によるコメの追加供給で、前月予測から1.3百万トン上方修正され、対2020/21年度比9.6%増の110.8百万トンと、史上最高となった。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正により、前月予測から1.0百万トン下方修正され、対前年度比11.6%減の19.0百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰防止のため、9月9日に輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動した。ただし、依然として世界の輸出量の36%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

インド食料公社（FCI）によると、2022年9月の備蓄量（粳を含む）は40.6百万トンと、前年同期（44.4百万トン）を下回るが、過去5年平均（31.0百万トン）を9.6百万トン上回る。

同「Grain: World Markets and Trade」（2022.10.12）によれば、インド産米（碎米5%混入）の10月11日までの価格は、390ドル/トンと前月から上昇したものの、依然、アジア主要輸出国の中で最も低い価格水準となっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

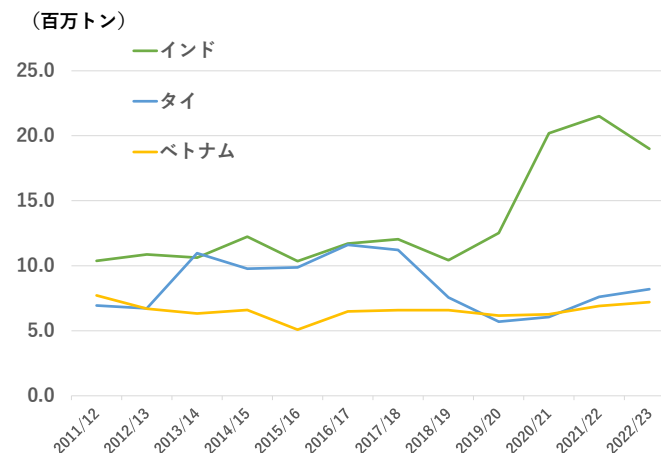
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	124.4	130.3	124.0 (125.9)	▲ 2.5	▲ 4.8
消 費 量	101.1	110.8	109.3 (109.5)	-	▲ 1.4
輸 出 量	20.2	21.5	19.0 (15.5)	▲ 1.0	▲ 11.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	35.0	30.8 (36.3)	▲ 3.0	▲ 12.1
期末在庫率	30.5%	26.5%	24.0% (29.1%)	▲ 2.1	▲ 2.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50 (45.00)	-	▲ 1.9
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.09 (2.80)	▲ 0.08	▲ 2.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2022.10.12）をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 中国の飼料用米需要が下方修正

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.3%減の147.0百万トンの見込み。

国家糧油情報センター（2022.10.9）によれば、9月、一期作稲の大部分が成熟後期にある黒竜江省等東北部は天候に恵まれた。また、長江の中・下流及びその南部のほとんどの地域も、気温が高く、降水量が少なかったため、多くの地域で一期作稲の成熟や収穫に好ましい天候となった。なお、9月下旬に収穫・販売された一期作稲の品質は、前年度に比べて良くなっているが、精米歩留まり等は例年に比べて低下していると見られる。

また、長江の中・下流及びその南部のほとんどの地域では、良好な天候の下、二期作晩稲の出穂と開花も進んだ。ただ、安徽省、江西省中北部、湖南省西部等の一部地域は干ばつ気味で、二期作晩稲の成長と発育にやや影響があった。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、飼料用米の消費量の引下げから、前月予測から1.1百万トン下方修正され、対前年度比0.9%減の155.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、碎米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通し及びインドのコメ輸出規制により、前月予測から0.5百万トン下方修正され、対前年度比16.0%減の5.0百万トンの見込み。中国は、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入していた。

中国海関統計によれば、2022年1～8月の輸入量は、対前年同期の3.2百万トンから約43%増加し、4.5百万トンとなった。輸入先はインドが1.8百万トンと最も多く、次いでパキスタンが1.1百万トンとなっている。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、対前年度比4.6%減の107.8百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約6割を占める見通し。

コメー中国

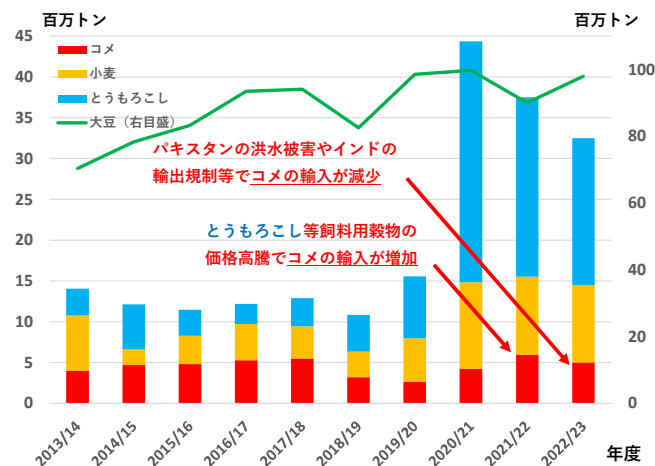
北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位: 百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	148.3	149.0	147.0 (146.3)	-	▲ 1.3	
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.4)	▲ 1.1	▲ 0.9	
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.3)	-	5.8	
輸 入 量	4.2	6.0	5.0 (3.0)	▲ 0.5	▲ 16.0	
期末在庫量	116.5	113.0	107.8 (103.5)	0.6	▲ 4.6	
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.6% (67.4%)	0.9	▲ 2.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	-	0.3	
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.00 (4.87)	-	▲ 1.5	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.10.12)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22 年度の実産量は、良好な天候と十分な降雨により、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 5.4% 増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量も、同様の気象条件を前提とすれば、雨季作及び乾季作の作付けが増え、収穫面積が拡大すると予測されることから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、対前年度比 1.1% 増の 20.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、豊作とインドの輸出規制による輸出量減少の見込みから、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対前年度比 7.9% 増の 8.2 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、イラクの予想以上の輸入需要増大により、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 25.4% 増の 7.6 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は、対前年同期の 2.7 百万トンから約 54% 増加し、4.1 百万トンとなった。輸出先はイラクが 0.8 百万トン（対前年度比 6.3 倍）、米国が 0.4 百万トン（対前年度比 1.4 倍）、南アフリカが 0.4 百万トン（対前年度比 1.1 倍）、中国が 0.3 百万トン（対前年度比 1.7 倍）。

USDA「Rice Outlook」（2022.10.14）によれば、10 月 11 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、バーツ安にも関わらず、主に中央アジアと中東からの需要増大により、9 月 6 日までの週の価格から 3 ドル上昇し、430 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

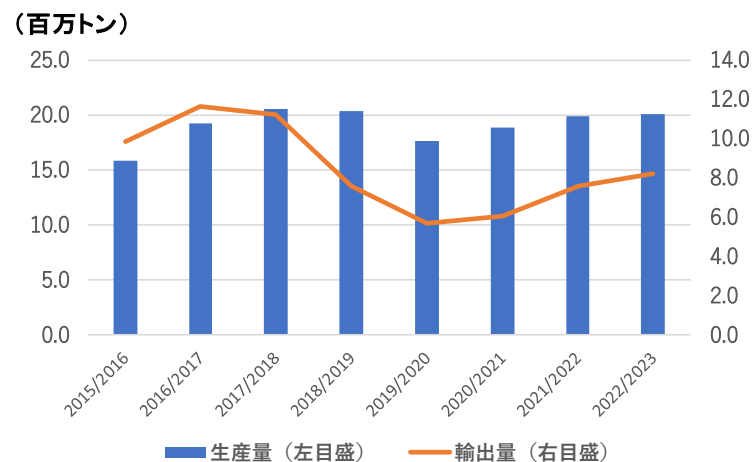
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.9	19.9	20.1 (20.1)	0.3	1.1	
消 費 量	12.7	12.8	12.9 (12.3)	▲ 0.1	0.8	
輸 出 量	6.1	7.6	8.2 (8.3)	0.2	7.9	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	4.3	4.0	3.2 (6.4)	0.3	▲ 20.2	
期末在庫率	22.8%	19.4%	15.0% (31.0%)	1.5	▲ 4.4	

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.70)	0.15	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.81 (1.88)	0.01	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)（単収は精米t/ha）

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が上昇

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 1.2%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高収益作物（野菜等）への転作等により冬春作の収穫面積が減少したこと等から、対 2020/21 年度比 1.1%減の 27.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、予想以上の需要増加が継続する見込みや、インドの輸出規制による輸出減少見込みから、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、対前年度比 4.3%増の 7.2 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量も、同様の理由から、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 10.0%増の 6.9 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 4.8 百万トンで、上位からフィリピン（2.3 百万トン）、中国（0.5 百万トン）、コートジボワール（0.5 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 0.2 百万トン。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、ベトナム国内で飼料向け等に利用されていたインドの碎米の輸出禁止措置により、対前年度比 50.0%減の 0.7 百万トンの見込み。

なお 2021/22 年度の輸入量は、カンボジアからの輸入増加（主として粳）等により、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され 1.4 百万トンの見込み。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2022.10.12) によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 10 月 11 日までの週の価格は、インドの輸出規制、インド産米の主要輸入国であったバングラデシュからの代替需要増大により、9 月 6 日までの週の価格から上昇して、429 ドル/トンとなった。



写真：ベトナム北部ハノイ市の圃場（10 月 7 日撮影）

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

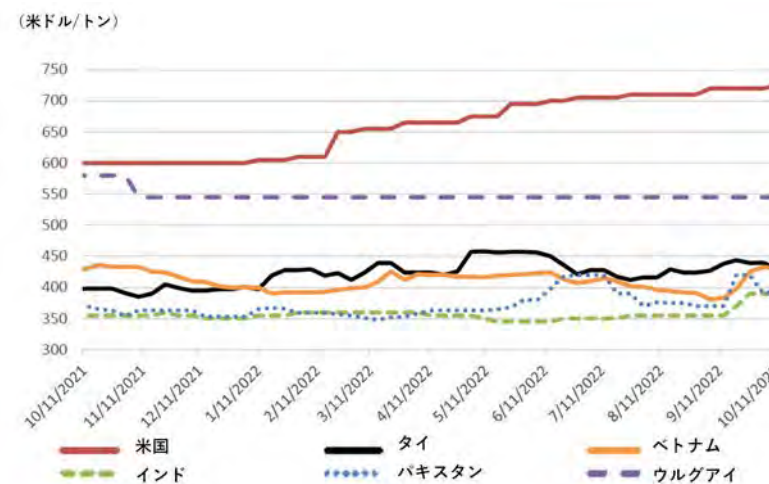
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	27.1	27.4 (28.5)	-	1.2	
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.5)	-	-	
輸 出 量	6.3	6.9	7.2 (6.8)	0.4	4.3	
輸 入 量	1.8	1.4	0.7 (0.6)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	2.6	2.7	2.1 (2.8)	▲ 0.3	▲ 22.1	
期末在庫率	9.5%	9.5%	7.4% (9.4%)	▲ 1.0	▲ 2.2	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.29	7.29 (7.23)	-	-
単収(もみt/ha)	6.00	5.95	6.01 (3.95)	-	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)（単収は精米t/ha）

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2022.10.12)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

＜米国農務省（USDA）の見通し＞ 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国等で下方修正も、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

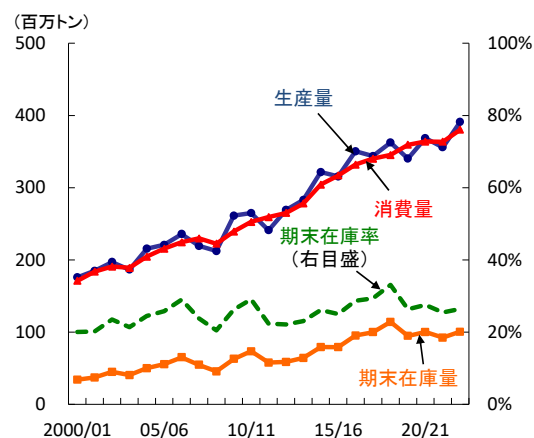
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン等で下方修正も、ブラジル、中国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、パラグアイで下方修正も、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2022. 10. 12)をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

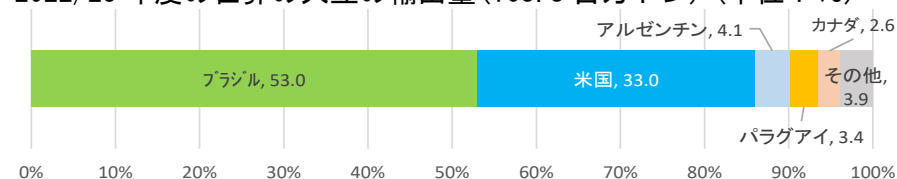
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.4	355.7	391.0	1.2	9.9
消 費 量	363.8	363.6	380.2	2.6	4.6
うち搾油用	315.4	314.7	329.4	2.4	4.7
輸 出 量	164.9	154.2	168.8	1.0	9.5
輸 入 量	165.5	154.4	166.2	1.2	7.7
期末在庫量	100.1	92.4	100.5	1.6	8.8
期末在庫率	27.5%	25.4%	26.4%	0.2	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2022)

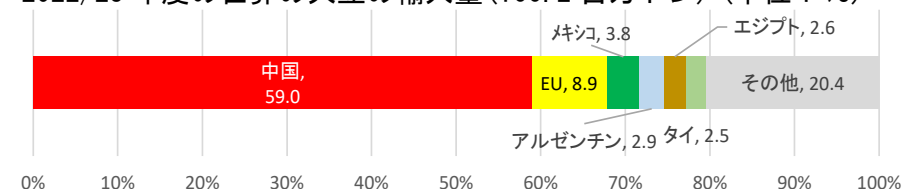
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (391.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出货量 (168.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.2 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、アイオワ州、インディアナ州、カンザス州、ネブラスカ州等の単収が下方修正されたことで、前月予測から1.8百万トン下方修正され、対前年度比3.4%減の117.4百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2022.10.17)によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要18州における落葉進捗率は96%と前年度同期及び過去5年平均(ともに94%)より進んでいる。収穫進捗率は63%と前年度同期(58%)及び過去5年平均(52%)より進んでいる。作柄評価は良からやや良が57%と前年度同期(59%)を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、大豆製品需要の高まりと搾油マージンの改善により搾油用消費量が上方修正されたことなどから前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度より2.2%増の64.2百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、ブラジル、アルゼンチンとの輸出競争の高まりや生産量の下方修正に伴い、前月予測から1.1百万トン下方修正され、前年度より5.2%減の55.7百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～9月29日)は、27.9百万トンであり、内訳は中国(10.9百万トン)、メキシコ(3.8百万トン)、エジプト(2.5百万トン)、ドイツ(1.7百万トン)、日本(1.7百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より27.0%減の5.4百万トンの見込み。なお、期末在庫率は4.5%で、前年度を下回り、2013/14年度以来の低水準の見込み。

大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	114.8	121.5	117.4	▲ 1.8	▲ 3.4
消費量	60.9	62.8	64.2	0.2	2.2
うち搾油用	58.3	60.0	60.8	0.3	1.4
輸出量	61.7	58.7	55.7	▲ 1.1	▲ 5.2
輸入量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.4	－	▲ 27.0
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.5%	0.0	▲ 1.6

(参考)
収穫面積(百万ha) 33.43 34.93 35.06
単収(t/ha) 3.43 3.48 3.35
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、単収は下方修正も、主産地での史上最高の大豆価格に後押しされた収穫面積の上方修正により前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、前年度より 19.7%増の 152.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマト・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2022.10.6）によれば、2022/23年度の実産量は、ラニーニャ現象から南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より 21.3%増の 152.4 百万トンで史上最高の見込み。

作付進捗率は、中西部のマト・グロッソ州で 10 月 14 日現在、41%で過去 5 年平均(24%)より進み、南部のパラナ州で 10 月 17 日現在、33%で前年度同期（38%）より遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から 1.3 百万トン上方修正され、前年度より 1.6%増の 55.1 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度より 12.5%増の 89.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1 ～ 9 月の輸出量は 70.8 百万トンで、前年同期（77.5 百万トン）に比べ 8.7%減となっている。内訳は、1 位が中国 47.4 百万トン、2 位がスペイン 3.1 百万トン、3 位がタイ 2.2 百万トンとなっている。なお、9 月の輸出量は 4.3 百万トンで前年同月（4.8 百万トン）と比べ、11.0%減となっている。

大豆ーブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	127.0	152.0 (146.0)	3.0	19.7	
消 費 量	49.9	54.3	55.1 (52.2)	1.3	1.6	
うち搾油用	46.7	51.0	51.5 (49.4)	1.0	1.0	
輸 出 量	81.7	79.6	89.5 (90.7)	0.5	12.5	
輸 入 量	1.0	0.6	0.8 (0.4)	-	36.4	
期末在庫量	29.4	23.2	31.3 (5.1)	2.0	35.2	
期末在庫率	22.4%	17.3%	21.7% (3.5%)	1.1	4.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	42.90 (42.00)	0.90	3.4
単収(t/ha)	3.53	3.06	3.54 (3.48)	▲ 0.01	15.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2022. 10. 6）

＜ アルゼンチン ＞ 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より 15.9%増の 51.0 百万トンと史上最高の見込み。11 月以降に作付けが本格的に開始される。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、搾油用消費量の下方修正により前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加に伴い、前年度より 1.7%増の 47.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、9 月末までの為替優遇措置による農家売渡しの急増に伴い、前月予測から 2.3 百万トン上方修正され、前年度より 2.5 倍の 7.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 128.5 万トンで、前年同期 (414.4 万トン) より 69.0%減。内訳は、1 位が中国 94.8 万トン、2 位が米国 8.7 万トン、3 位がチリ 3.4 万トンとなっている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%に設定。さらに、2022 年 3 月 19 日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げ、大豆と横並びの 33%に変更した。

また、2022 年 9 月 4 日にアルゼンチン政府は、足元の公式為替レートの 139 ペソ/ドルから 9 月末まで丸大豆輸出のみに適用される為替優遇措置（200 ペソ/ドル）を大豆農家に対して発表したことにより、これまで滞留していた農家の大豆売渡が加速した。なお、ブエノスアイレス穀物取引所によれば、農家は 2021/22 年度の実生産量の 37%に相当する 16 百万トン以上を 9 月に販売したとみられる。

大豆－アルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	44.0	51.0 (48.0)	-	15.9	
消 費 量	47.4	47.0	47.8 (48.2)	▲ 0.5	1.7	
うち搾油用	40.2	39.8	40.5 (42.2)	▲ 0.5	1.9	
輸 出 量	5.2	2.8	7.0 (4.6)	2.3	150.0	
輸 入 量	4.8	3.9	4.8 (4.7)	-	24.7	
期末在庫量	25.1	23.2	24.2 (3.9)	▲ 1.2	4.5	
期末在庫率	47.6%	46.5%	44.2% (7.3%)	▲ 3.8	▲ 2.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.65)	-	6.3	
単収(t/ha)	2.81	2.75	3.00 (2.88)	-	9.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC 「Grain Market Report」(22 September 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の作付け前のほ場風景 (10月6日撮影)



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より12.2%増の18.4百万トンの見込み。

中国農業農村部によれば、9月26日現在、大豆の収穫進捗率は16.5%となっている。中国中央气象台(2022.10.3)によれば、10月上旬現在、黒竜江省等東北地区はおおむね成熟期後半から収穫期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸入量の上方修正に伴い、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度低迷していた畜産向け国内大豆粕需要の回復により、前年度より9.2%増の116.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、南米の輸出量の増加に伴い、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より8.9%増の98.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～8月の輸入量は61.3百万トンと、前年同期比で8.6%減。内訳は、ブラジル産40.9百万トン(67%)、米国産18.2百万トン(30%)。今後は、米国の収穫開始に伴い、輸入先が徐々に米国産に切り替わるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年8月号」によると、8月は、季節的に大豆需要が低調となる時期にあり、国内価格(山東省の国産大豆工場渡し価格)は、前月(6,520 元/トン)から横ばいの6,520 元/トンとなったものの、依然として高水準で推移している。大豆需要は好転しつつあり、今後、新穀大豆が市場に出荷されるまで、国内価格は高値で推移するとみられる。8月の輸入価格(山東省の輸入大豆価格)は、8月末の米国大豆産地の高温・乾燥の影響等で5,040 元/トンと前月(4,920 元/トン)から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

大豆—中国

(単位: 百万トン)

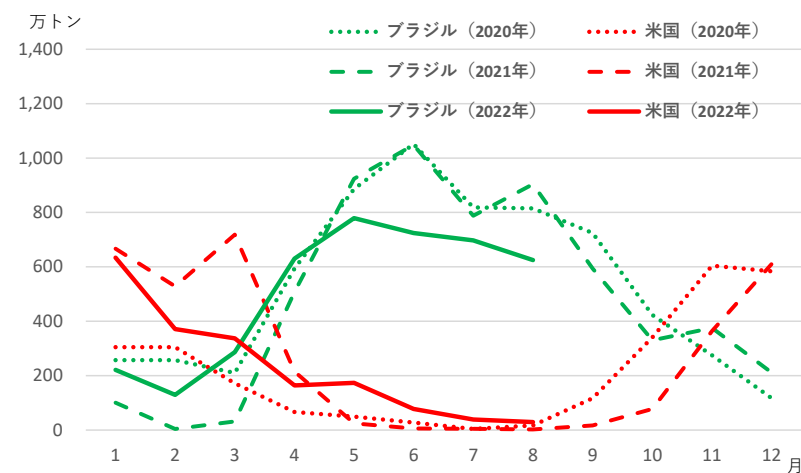
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	19.6	16.4	18.4 (19.5)	-	12.2	
消費量	112.7	106.7	116.6 (114.2)	1.0	9.2	
うち搾油用	93.0	87.0	96.0 (95.5)	1.0	10.3	
輸出量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸入量	99.8	90.0	98.0 (96.3)	1.0	8.9	
期末在庫量	31.2	30.7	30.5 (31.4)	-	▲ 0.9	
期末在庫率	27.6%	28.8%	26.1% (27.5%)	▲ 0.2	▲ 2.7	

(参考)

収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35 (9.90)	-	11.3
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	-	1.0

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2022)
IGC「Grain Market Report」(22 September 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、単収の上方修正により前月予測から0.1百万トン上方修正され、収穫面積は減少するものの、前年度より3.6%増の6.5百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.9.20～10.12）によれば、主産地のカナダ南東部では、9月中旬から9月末にかけて温暖な天候と降雨があり、大豆の生育・成熟に好ましい状況となった。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.10.21)によれば、主産地のオンタリオ州などカナダ南東部で収穫はほぼ終了している。2022/23年度の収穫面積は前年度より1.7%減の一方、単収は西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、前年度高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より44.3%増と増加し、カナダ全体の単収が5.4%増となることから、生産量は前年度より3.7%増の6.5百万トンの見込み。

産地のマニトバ州クロップレポート（2022.10.18）によれば、収穫進捗率は83%となっている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.8%増の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.9%増の4.4百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23年度（2022年8月～2023年7月）のうち、2022年8月の輸出量は2.1万トンで、国別では、主にベルギー（2.1万トン）向け。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.5 (6.5)	0.1	3.6
消費量	2.5	2.4	2.5 (2.5)	-	2.8
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸出量	4.7	4.3	4.4 (4.4)	-	2.9
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.6 (0.3)	0.1	30.4
期末在庫率	4.1%	6.4%	8.1% (4.3%)	1.5	1.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.10)	-	▲ 1.4
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.10 (3.10)	0.05	5.4

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 October 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 October 2022)

写真：カナダ南東部オンタリオ州の収穫直前の大豆風景 (10月13日撮影)



(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	

1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等
-------------	----------	---------	----	-----

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国

1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
------------	-----	-----	-----

1斤	500g	重量	中国
----	------	----	----

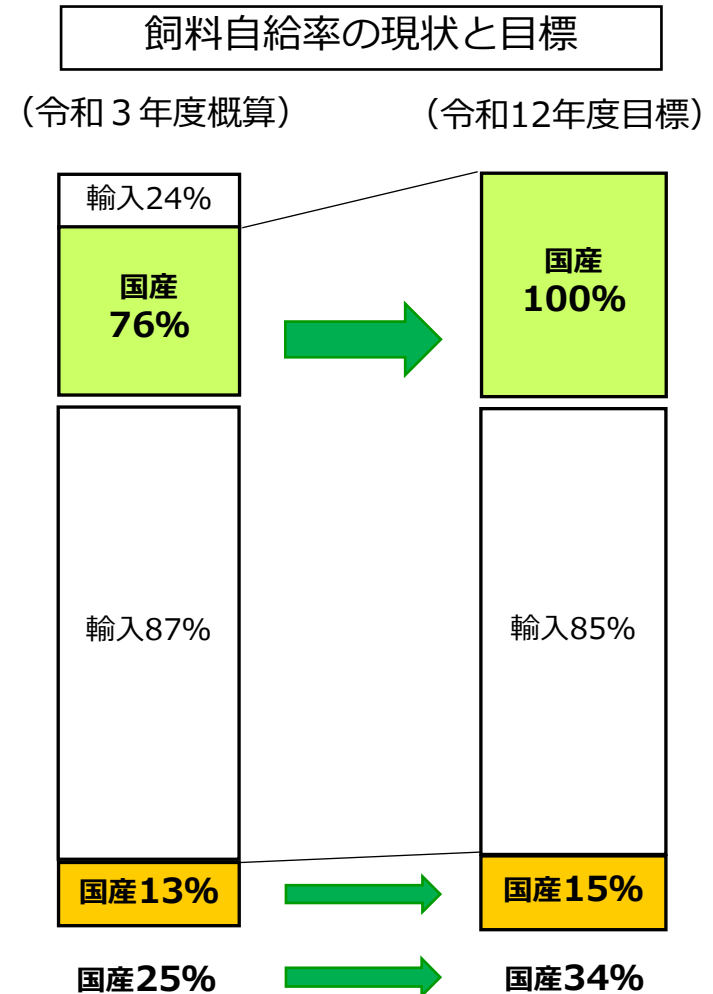
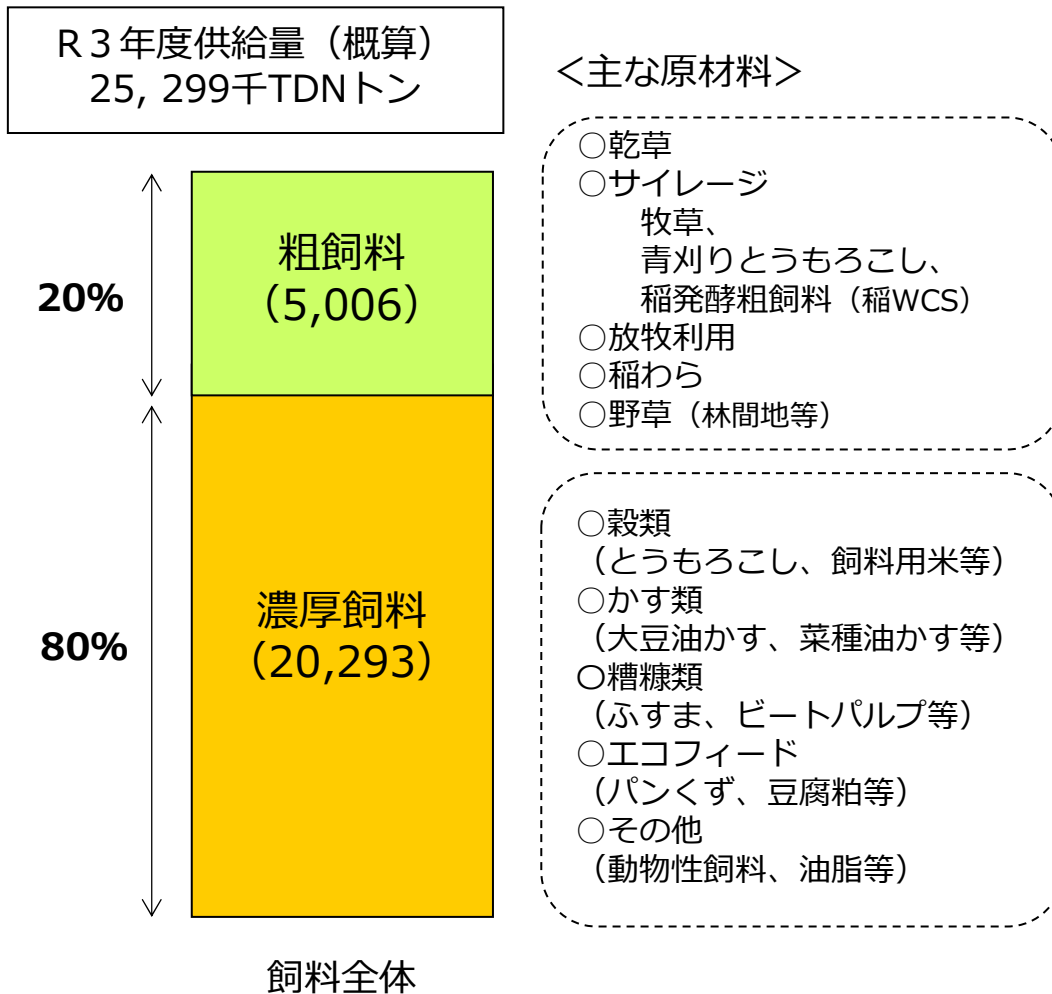
華氏→摂氏：℃=(° F-32)÷1.8			
----------------------	--	--	--

第16号特別分析トピック：我が国と世界の飼料をめぐる動向

国内編（基礎）

飼料について①

- 我が国の令和3年度(概算)の畜産における飼料供給割合は、粗飼料が20%(主に国産原材料)、濃厚飼料が80%(主に輸入原材料)となっている(TDNベース)。
- 令和3年度(概算)の飼料自給率(全体)は25%。このうち、粗飼料自給率は76%、濃厚飼料自給率は13%。



資料：農林水産省「飼料需給表」

※TDN(可消化養分総量)とは、エネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

飼料について②

- 粗飼料は、茎葉を乾草（干した草）やサイレージ（乳酸発酵させたエサ）に調整することで貯蔵できる。また、濃厚飼料に比べると粗繊維質量が高く、エネルギーやたんぱく質が少ないが、草食動物である牛にとっては栄養源となるだけでなく、消化機能を安定させるため、生理的に必須の飼料。
- 濃厚飼料は、穀類（とうもろこし、飼料用米等）、大豆油かす、糖糠類（ふすま、ビートパルプ等）等がある。エネルギーやたんぱく質が豊富で、これらの供給源として重要な飼料。

粗飼料

青刈りとうもろこし



牧草



細断

密封・発酵

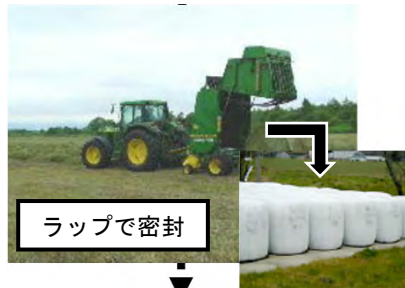
給餌



サイロ詰め



サイレージ



ラップで密封



給餌

濃厚飼料

原材料

給与



とうもろこし



飼料用米



大豆油かす



ふすま



大麦



こうりゃん



食品残さ等
等々



濃厚飼料（配合飼料）



濃厚飼料
（エコフィード）

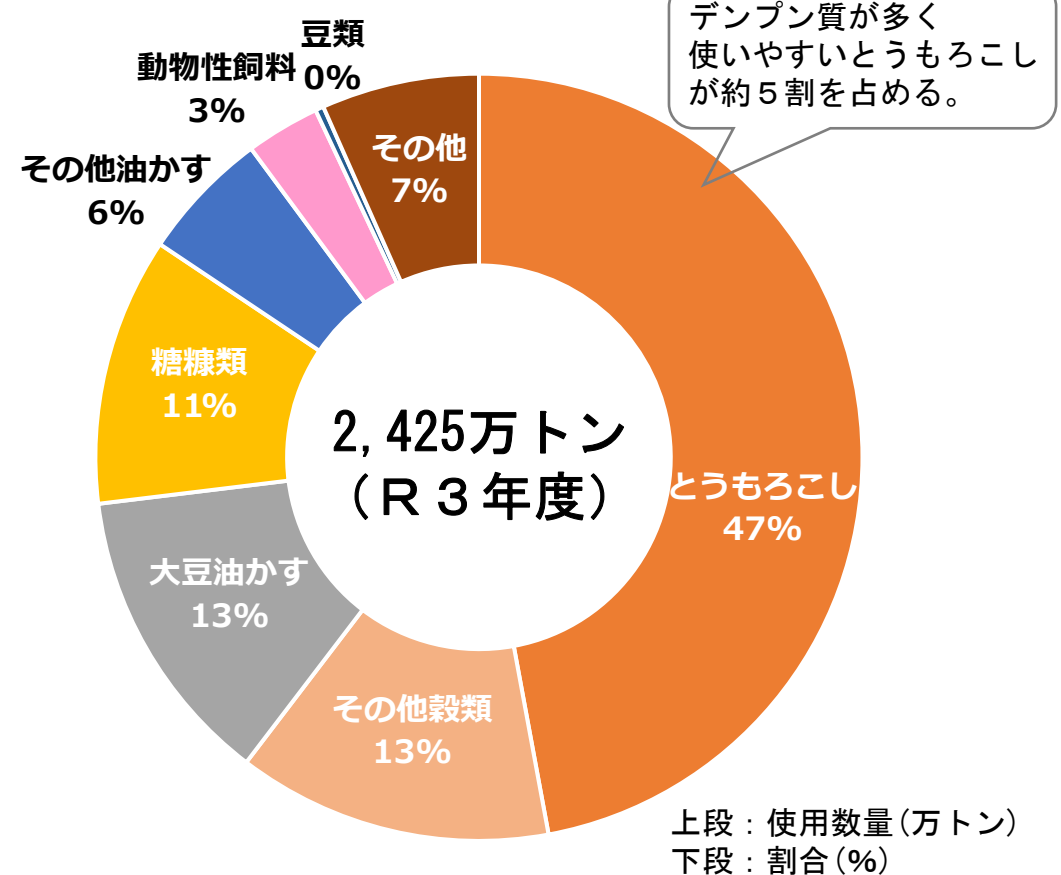
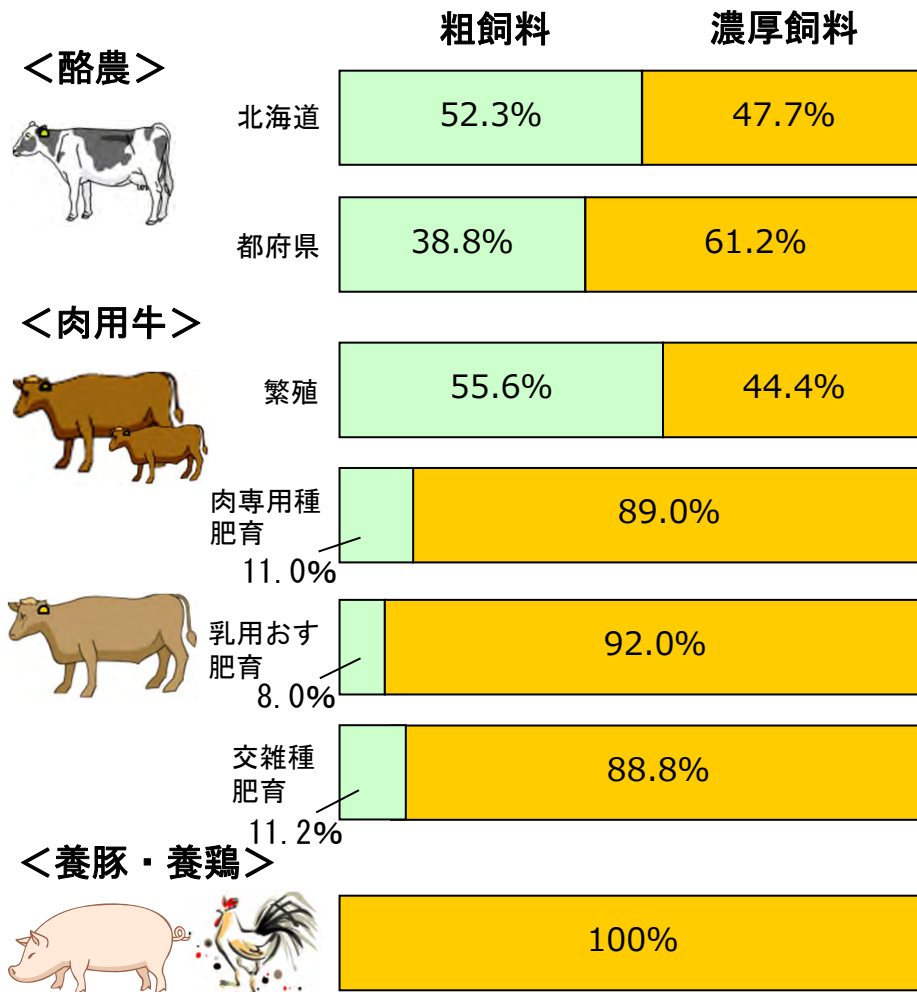
※稲発酵粗飼料（稲WCS）は粗飼料、飼料用米は濃厚飼料である。

飼料の種類①

- 粗飼料は主に酪農経営、肉用牛繁殖経営で利用され、養豚・養鶏ではほとんど濃厚飼料のみ給与される。
- 配合・混合飼料は主にとうもろこし等の穀類、大豆油かす等で構成されている。

畜種別の飼料の構成（R2年）（TDNベース）

配合・混合飼料に使用される原料の割合



資料：（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」

注：配合飼料は、家畜種とその成長ステージに応じた栄養素の要求量を満たすように、とうもろこし、大豆油かす等を混合した飼料。混合飼料は、とうもろこし、大豆かす等数種類の原料を混ぜた飼料

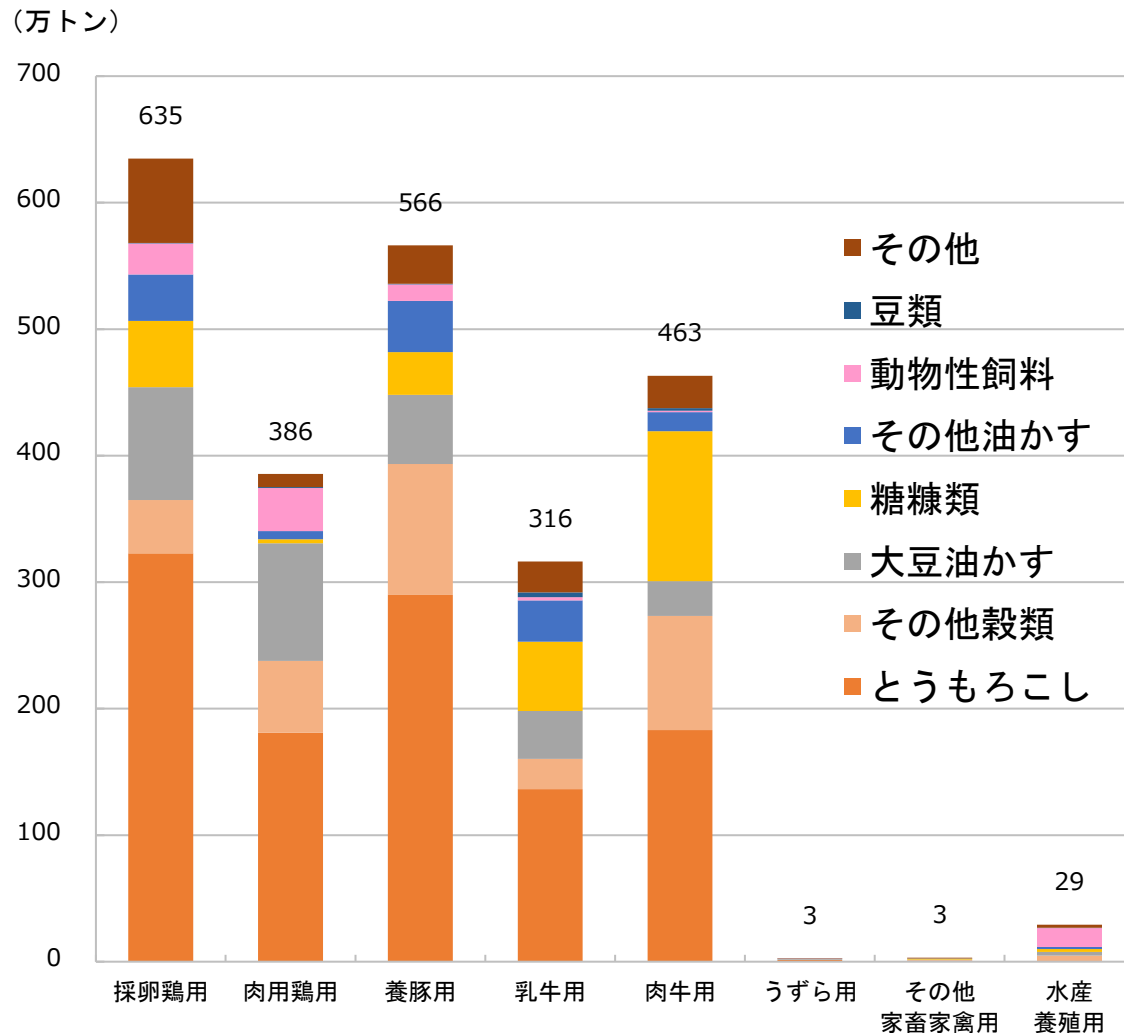
資料：農林水産省「畜産物生産費統計」より試算

注：令和元年調査から調査期間を調査年4月から翌年3月までの期間から、調査年1月から12月までの期間に変更した。

飼料の種類②

- 配合・混合飼料は畜種によって原料の割合が異なり、栄養素の要求量を満たすよう設計されている。
- この他にも稲発酵粗飼料(WCS)、飼料用米、稲わら等が飼料として利用されている。

畜種別の配合・混合飼料に使用される原料の使用量（R3年度）



他にも様々な飼料が利用されている

稲発酵粗飼料（WCS）

稲の実が完熟する前に、実と茎葉を一体的に収穫し、乳酸発酵させた飼料。



飼料用米

飼料用の米。近年、多収品種の導入や区分管理での取組による本作化が進展している。



稲わら

主に肥育牛に利用される飼料。その他に敷料、堆肥、すき込み等としても利用される。

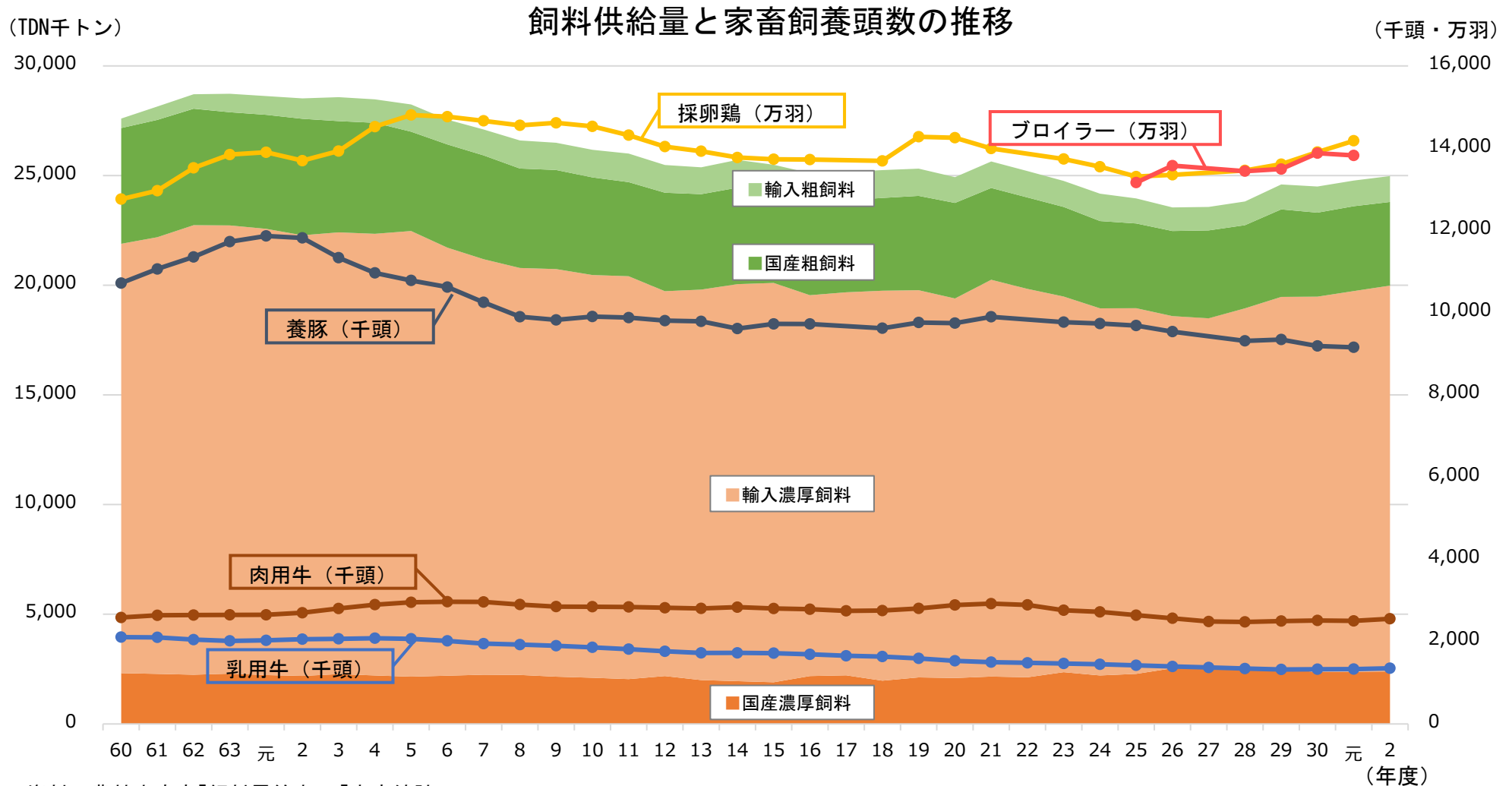


資料：（公社）配合飼料供給安定機構「飼料月報」

国内編（供給）

我が国における飼料供給量の推移

○ 我が国の飼料供給量は、昭和63年度をピークに減少傾向で推移していたが、近年は上昇傾向で推移。



資料：農林水産省「飼料需給表」、「畜産統計」

注：TDN(可消化養分総量)とは、エネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

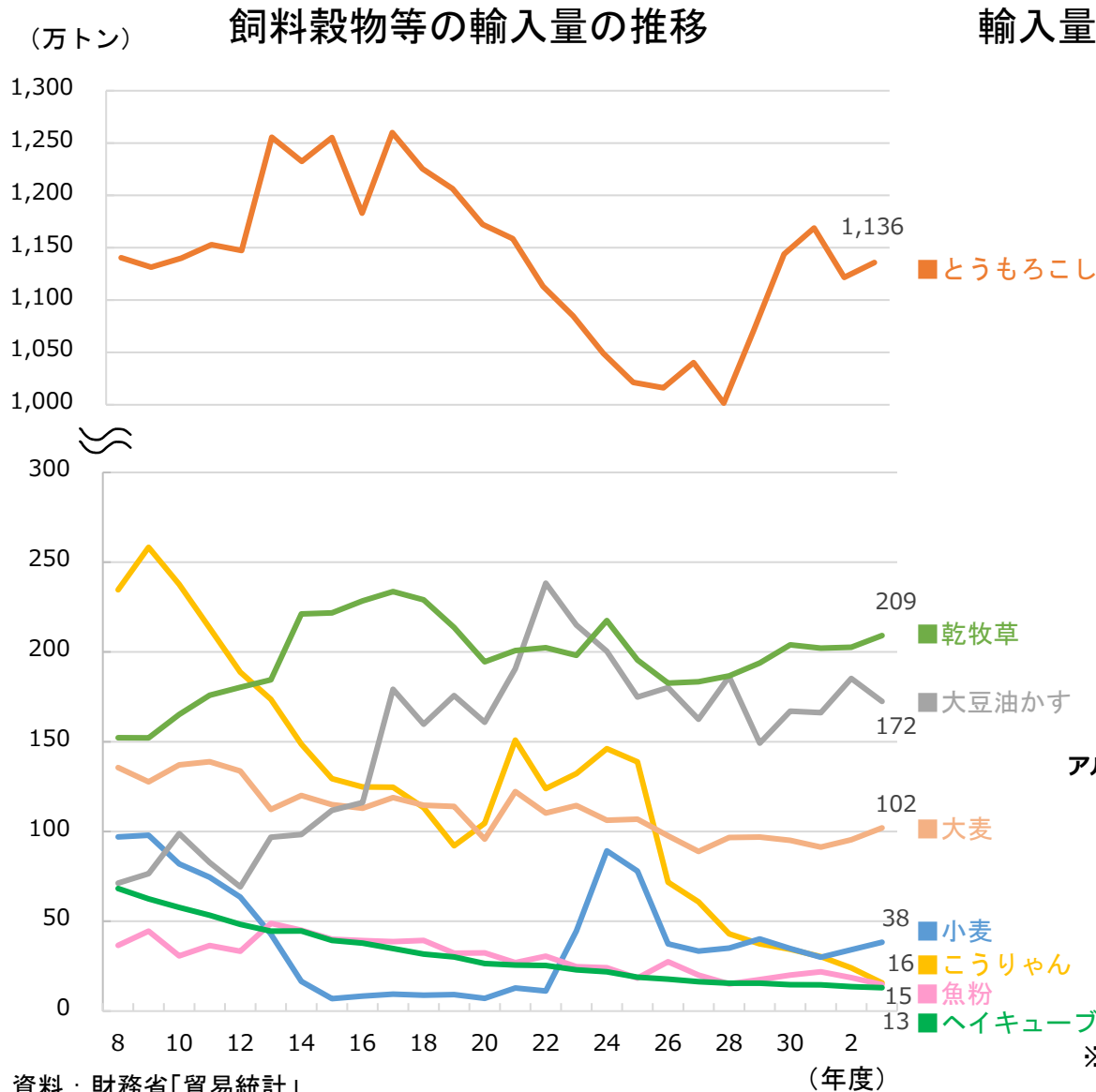
輸入濃厚飼料には輸入原料由来の国内生産された国産濃厚飼料が含まれる。

注：採卵鶏の羽数は成鶏めす羽数で、飼養羽数1,000羽未満の飼養者は除くデータ。ブロイラーの羽数は出荷羽数3,000羽未満の飼養者は除くデータ。

養豚、採卵鶏は平成17年、22年、27年、ブロイラーは平成27年のデータがないため、グラフ上は前後のデータを線で結んでいる。

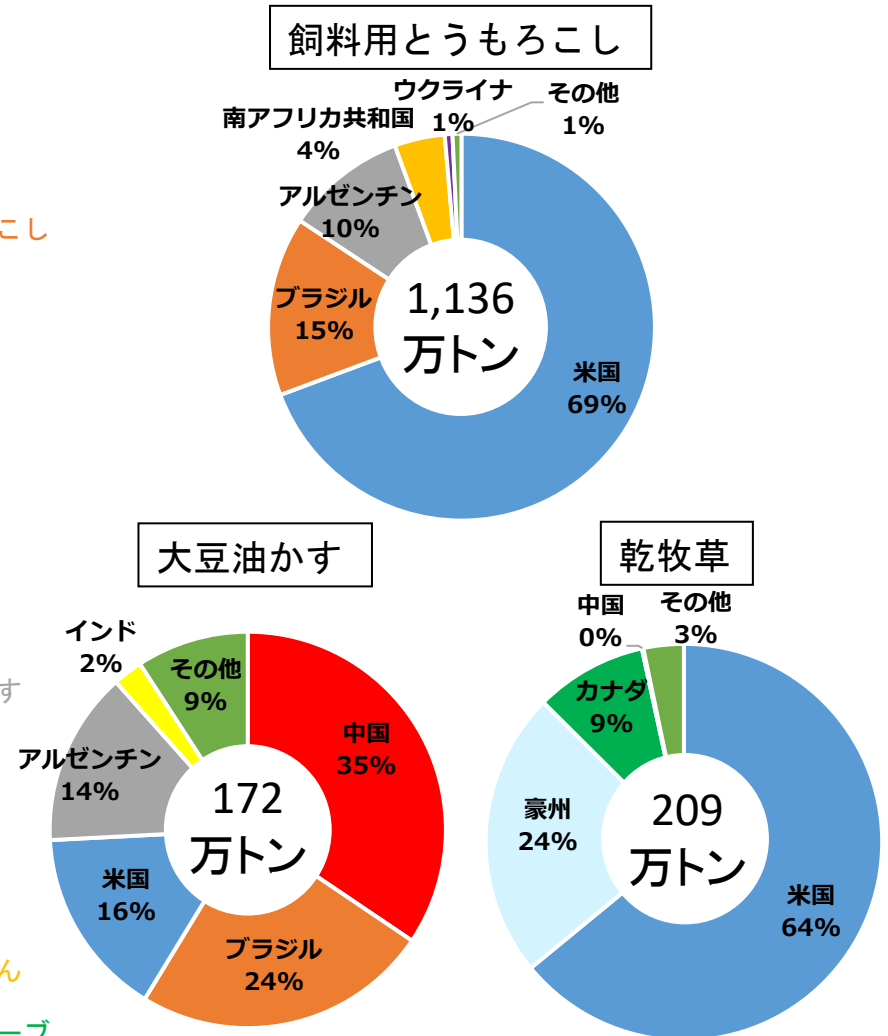
我が国における飼料の輸入動向

- 飼料用とうもろこしの輸入量は、近年約1,100万トン程度で推移。主な輸入先国は、米国、ブラジルなど。
- 大豆油かすは中国、ブラジル、米国など、乾牧草は米国、豪州などから輸入。



資料：財務省「貿易統計」

輸入量の割合（R3年度）

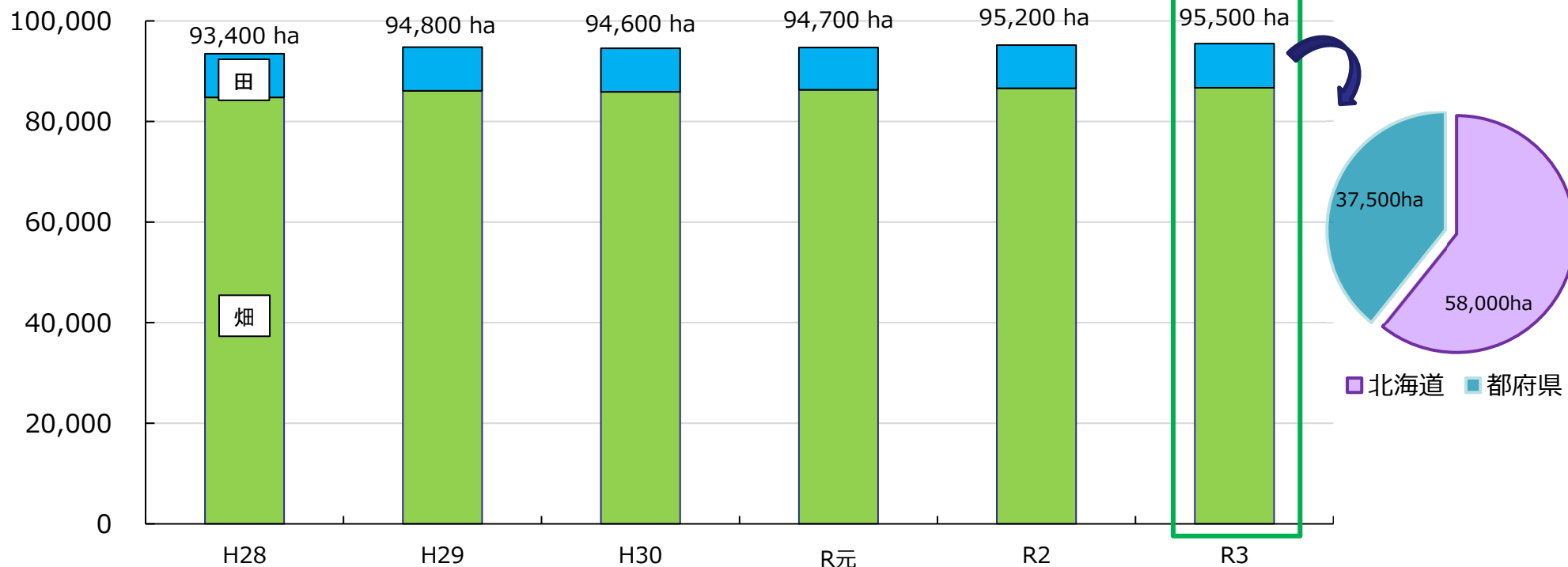


※：輸入大豆由来の国内で生成された大豆油かすの供給量は約180万トン（R3年）と推定され、輸入量とほぼ同等

青刈りとうもろこし（デントコーン）の生産・利用の状況

○ 青刈りとうもろこしは、高栄養価な粗飼料であり、濃厚飼料の低減にも寄与することから、酪農経営において極めて重要な飼料作物。令和3年産の作付面積は、約9.6万ha（うち田0.9万ha、畑8.7万ha）。

青刈りとうもろこしの栽培面積の推移



青刈りとうもろこしとは

飼料用とうもろこし（デントコーン）を、完熟前（糊熟期）に収穫して、茎、葉、実の全てを利用。ロール形態（主に本州）又はバンカー（主に北海道）にてサイレージ化する。主に乳用牛に給与。



稲発酵粗飼料・飼料用米の生産・利用状況

- 稲発酵粗飼料(稲WCS)は、水田で生産できる良質な粗飼料として、耕種農家・畜産農家の双方にメリットがあり、令和3年産の作付面積は、約4.4万haとなっている。
- 飼料用米は、とうもろこしとほぼ同等の栄養価を有しており、水田で生産できる飼料用穀物として、畜産農家での利用が広がっており、令和3年産の作付面積は、約11.6万haとなっている。

稲WCSの作付面積の推移(ha)

	H28	H29	H30	R元	R 2	R 3
稲WCS	41,366	42,893	42,545	42,450	42,791	44,248
飼料用米	91,169	91,510	79,535	72,509	70,883	115,744

稲WCSのメリットと課題

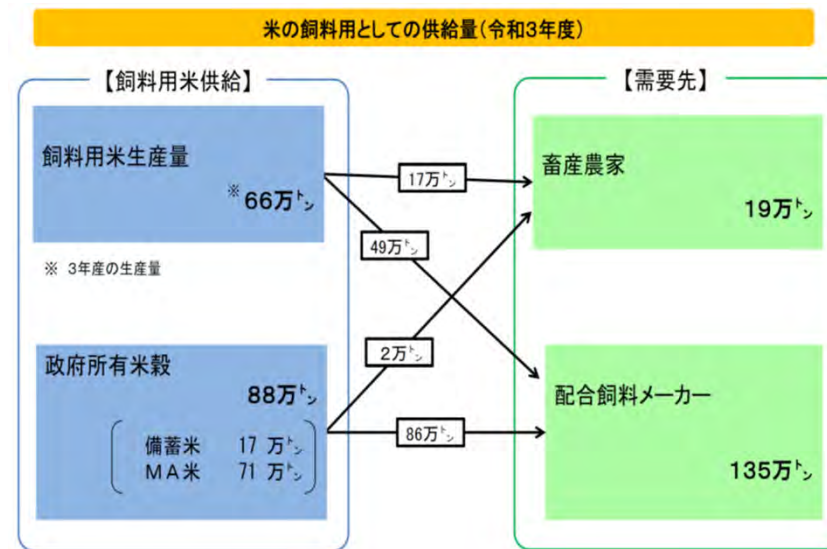
	メリット	課題
稲WCS	・連作障害がない ・良好な栄養価を有し、牛の嗜好性も高い ・長期保存が可能。	・低コスト栽培技術の導入や多収品種の開発によるコスト低減 ・安定した供給 ・効率的な保管・流通体制の確立 ・品質の向上・安定化が必要

畜種別の飼料用米利用可能量(試算)

(家畜の生理や畜産物に影響を与えることなく給与可能と見込まれる量)

区分	採卵鶏	ブロイラー	養豚	乳牛	肉牛	合計
配合飼料生産量	635万トン	385万トン	566万トン	316万トン	463万トン	
配合可能割合	20%	50%	15%	10%	3%	
利用可能量	127万トン	192万トン	85万トン	32万トン	14万トン	450万トン

飼料用米の供給状況



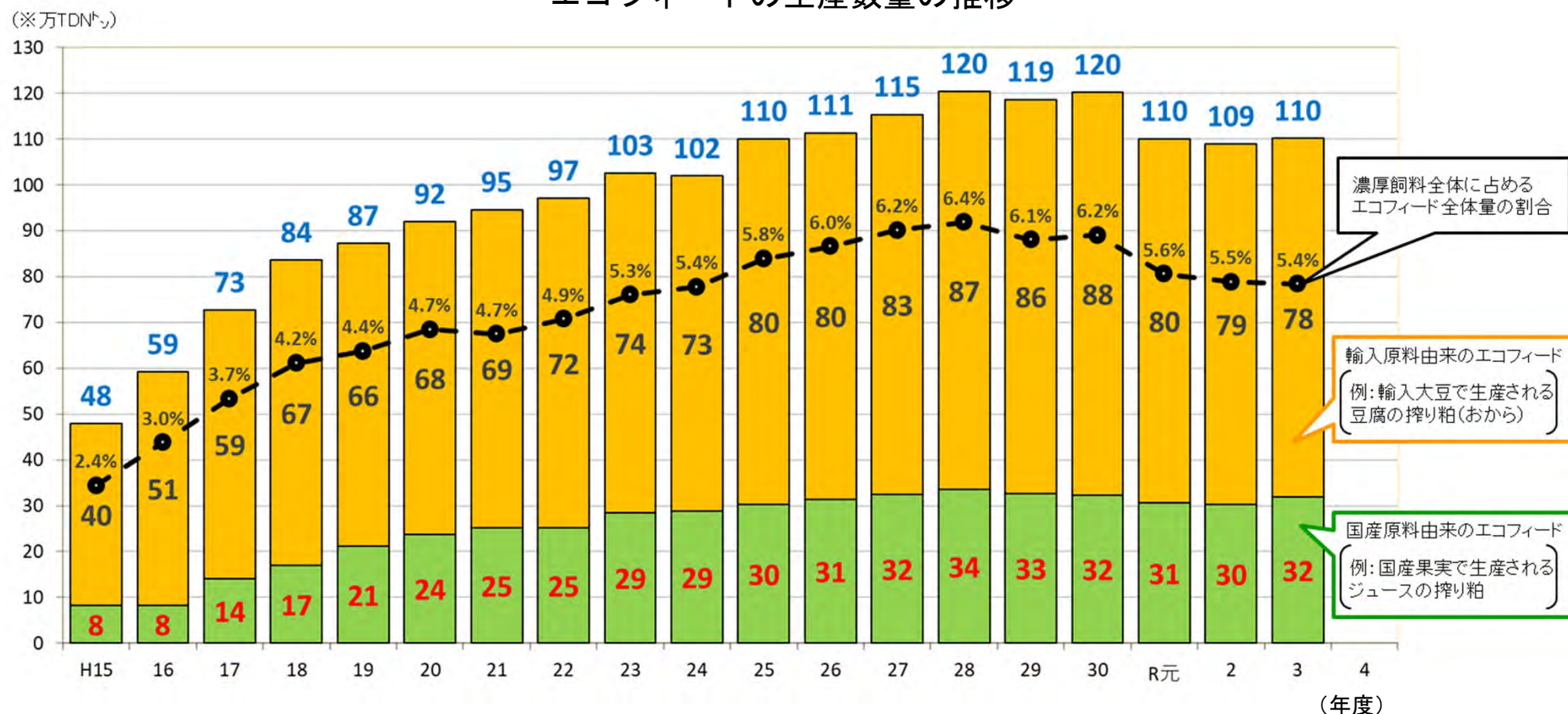
資料: 農林水産省「新規需要米の都道府県別の取組計画認定状況」、農産局穀物課調べ、(公社)配合飼料供給安定機構「飼料月報」

注: 稲WCSとは、稲の穂と茎葉を丸ごと乳酸発酵させた粗飼料(ホールクロップサイレージ: Whole Crop Silage)のことをいう。

未利用資源の飼料としての生産・利用状況

- 飼料の自給率向上のため、エコフィード(食品残さ利用飼料)を推進。エコフィードの製造数量は一部の原材料の使用の減少により、やや減少傾向で推移。令和3年度のエコフィード製造数量は110万TDN^ト(概算)であり、濃厚飼料全体の約5%に当たる。

エコフィードの生産数量の推移



資料：農林水産省畜産局飼料課調べ

注：TDN(可消化養分総量)とは、エネルギー含量を示す単位であり、飼料の実量とは異なる。

注：平成29年度の集計から調査対象品目が減少したため28年度以前と連続しない。

国内編（流通）

配合飼料工場の立地状況

- 我が国には、配合飼料工場が59社106工場あり(令和2年度)、その立地は原料の輸入に有利、かつ、畜産主産地が存在する太平洋側に一定の集約が進展。

配合飼料工場の立地状況 (注1)

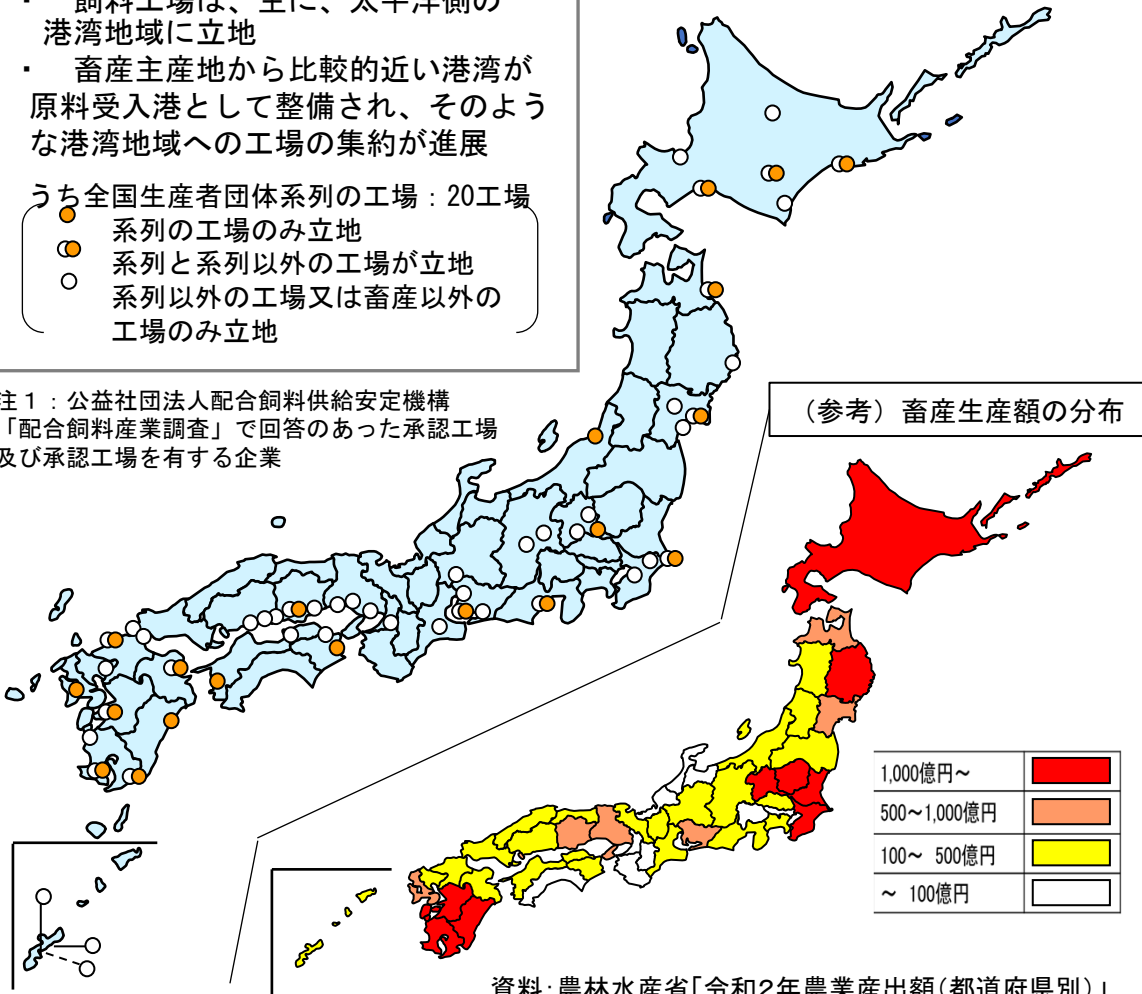
企業数：59社
工場数：106工場

- ・ 飼料工場は、主に、太平洋側の港湾地域に立地
- ・ 畜産主産地から比較的近い港湾が原料受入港として整備され、そのような港湾地域への工場の集約が進展

うち全国生産者団体系列の工場：20工場

- 系列の工場のみ立地
- 系列と系列以外の工場が立地
- 系列以外の工場又は畜産以外の工場のみ立地

注1：公益社団法人配合飼料供給安定機構「配合飼料産業調査」で回答のあった承認工場及び承認工場を有する企業



資料：農林水産省「令和2年農業産出額(都道府県別)」

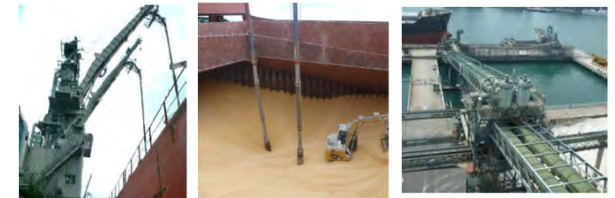
配合飼料工場までの原料搬入経路 ※とうもろこしの場合

港湾の施設
(大規模港)

※大型の外航船が入港できない港湾には内航船で搬送



荷揚げ・搬送設備



荷揚げサイロ
(港湾と隣接して設置)



トラック搬送



コンベア
(工場直結)



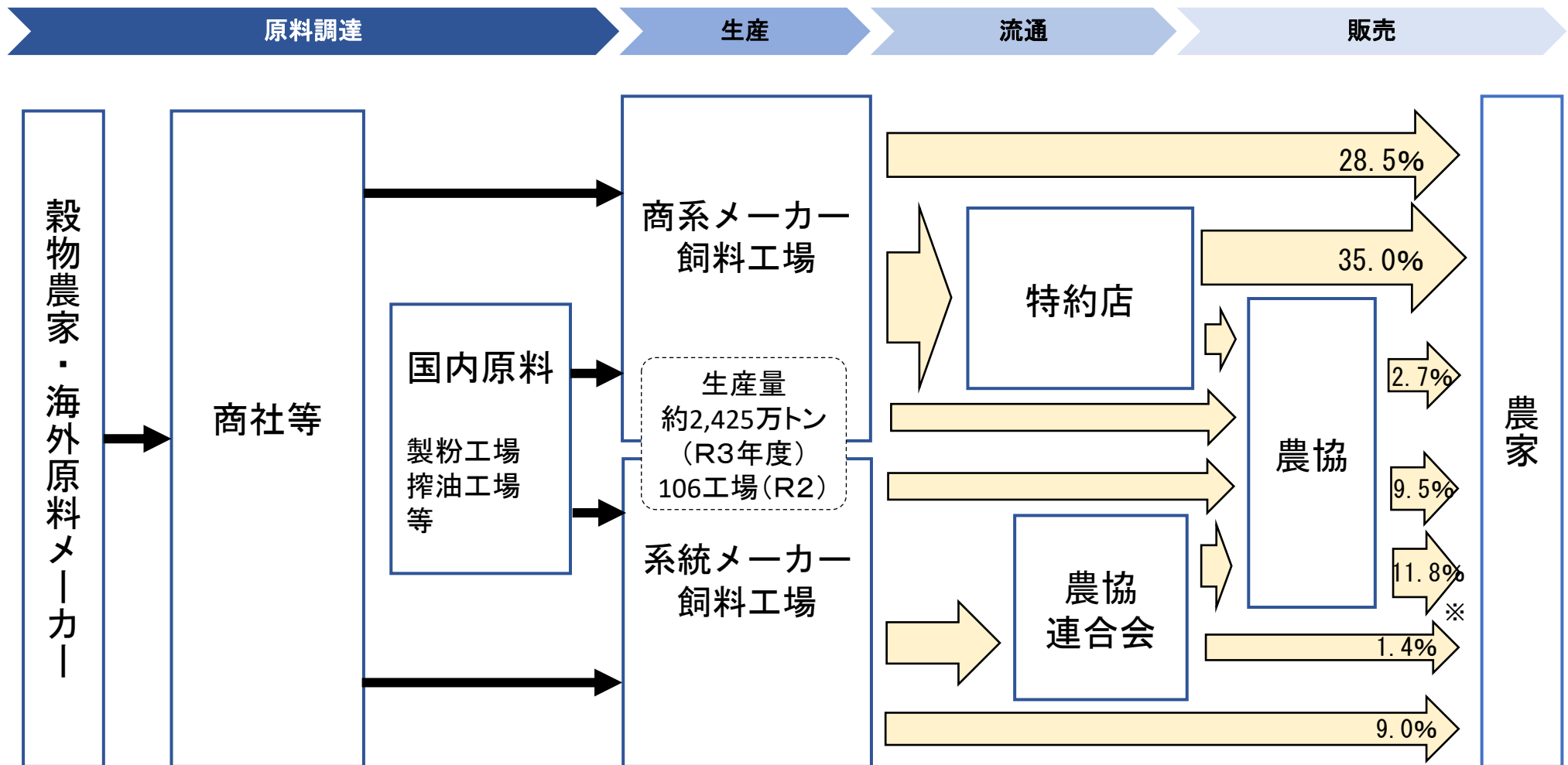
港湾部の小規模な飼料工場や内陸部の飼料工場

港湾部の大規模な飼料工場

資料：農林水産省「飼料用トウモロコシの流通・加工実態調査(H26.3)」 13

配合飼料の流通形態

- 配合飼料工場は海外の飼料穀物・原料を商社等を通じて調達するとともに、国内の食品工場等から製造粕等の原料を調達している。農家までの流通は、「工場直送」、「特約店経由」、「農協経由」等が存在する。



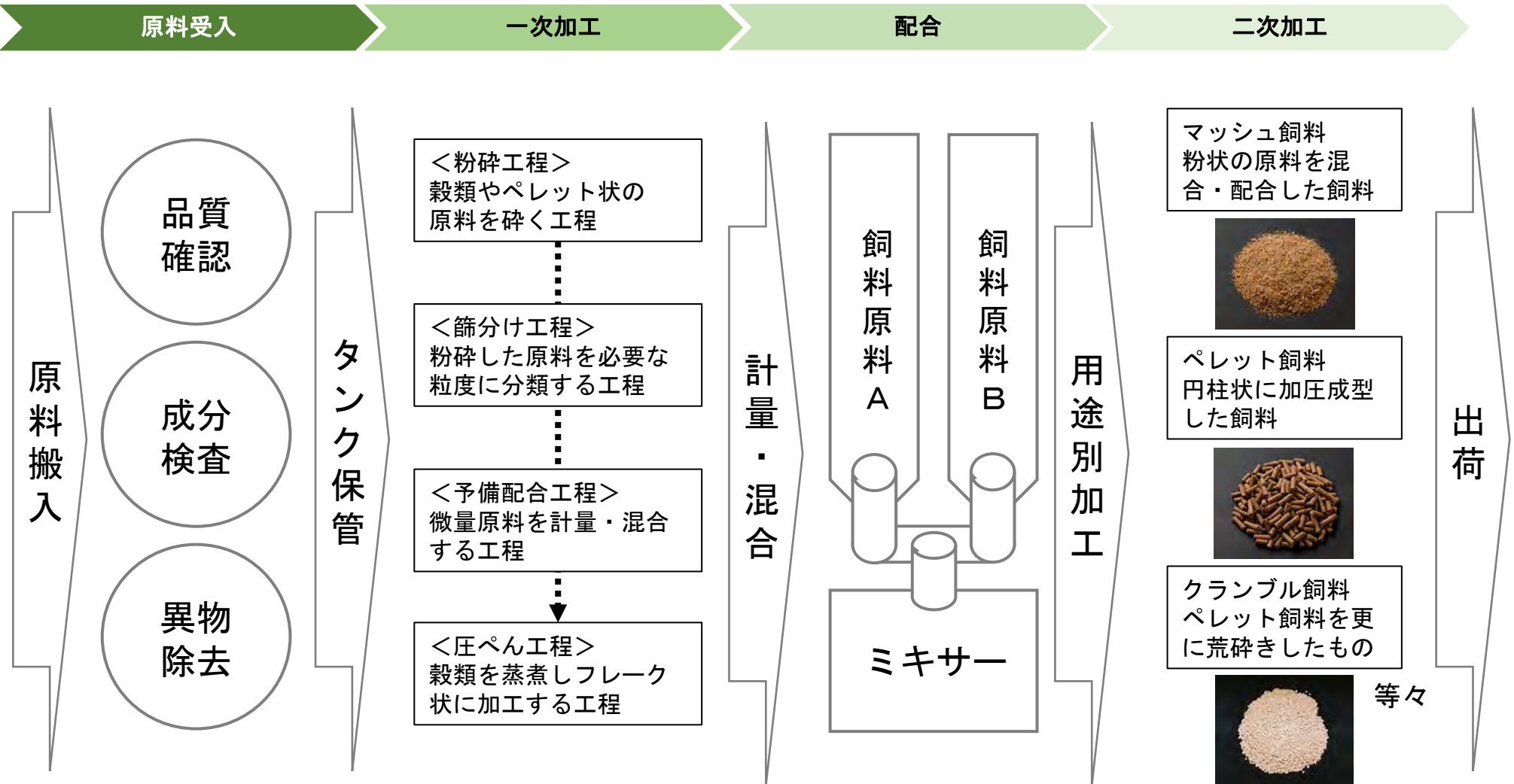
資料：(公社)配合飼料供給安定機構「飼料月報」、「配合飼料産業調査」

※：一部商系メーカーからの流通を含む。

注：その他、試験場、農業高校等又は同業他社等への販売が2.2%ある。

配合飼料の製造工程

- 配合飼料は、家畜種とその成長ステージに応じた栄養素の要求量を満たすように、とうもろこし、大豆油かす等を原料として製造される。

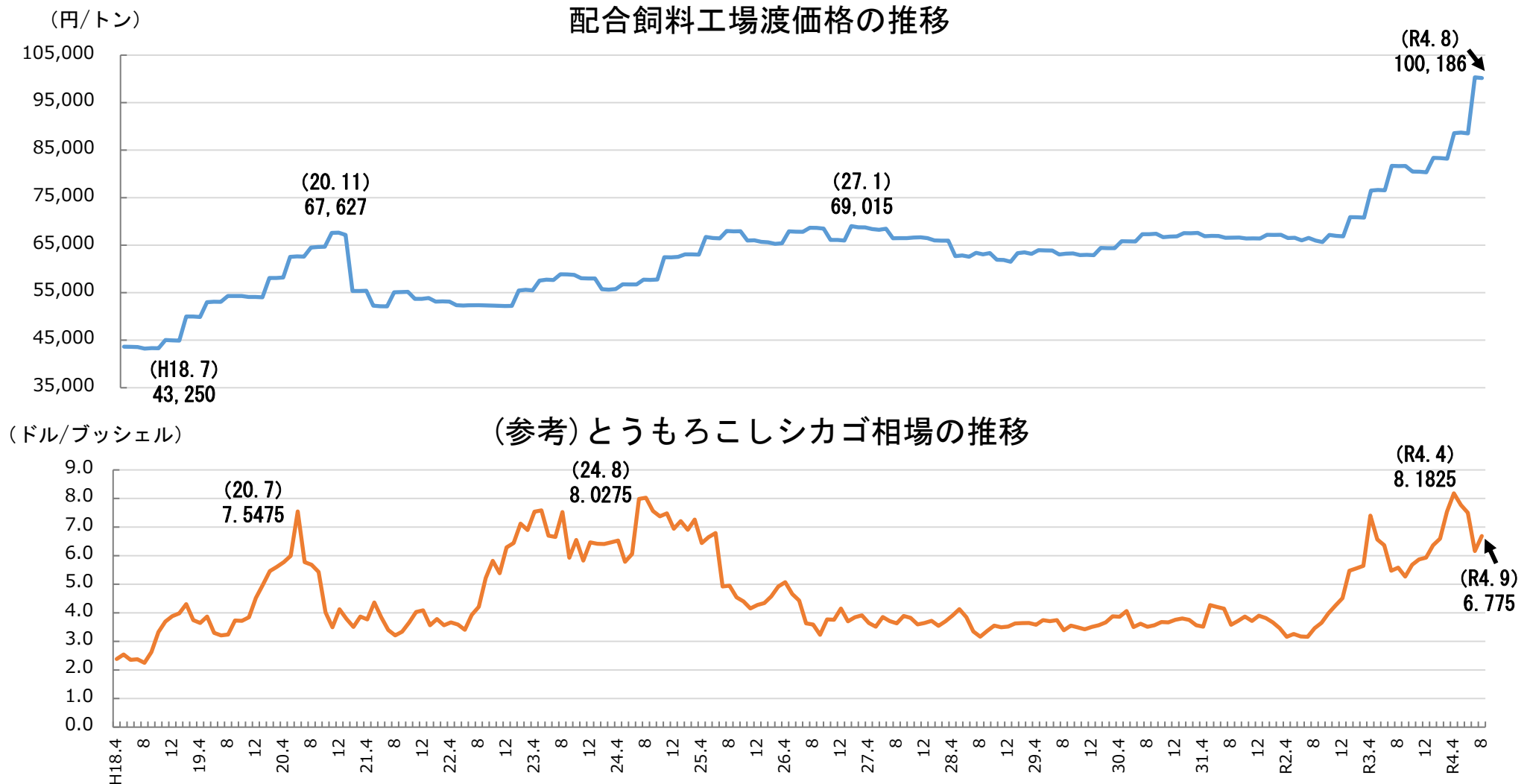


注：配合飼料の製造工程の一例を示したものであり、この他の製造工程を否定するものではない。

国内編（価格・コスト等）

配合飼料の価格動向

- 配合飼料価格は、配合飼料の主な原料であるとうもろこしの国際価格がウクライナ情勢等を受けて上昇していることに加えて、他の原料や為替相場等の影響により、上昇傾向で推移。



資料：(公社) 配合飼料供給安定機構「飼料月報」

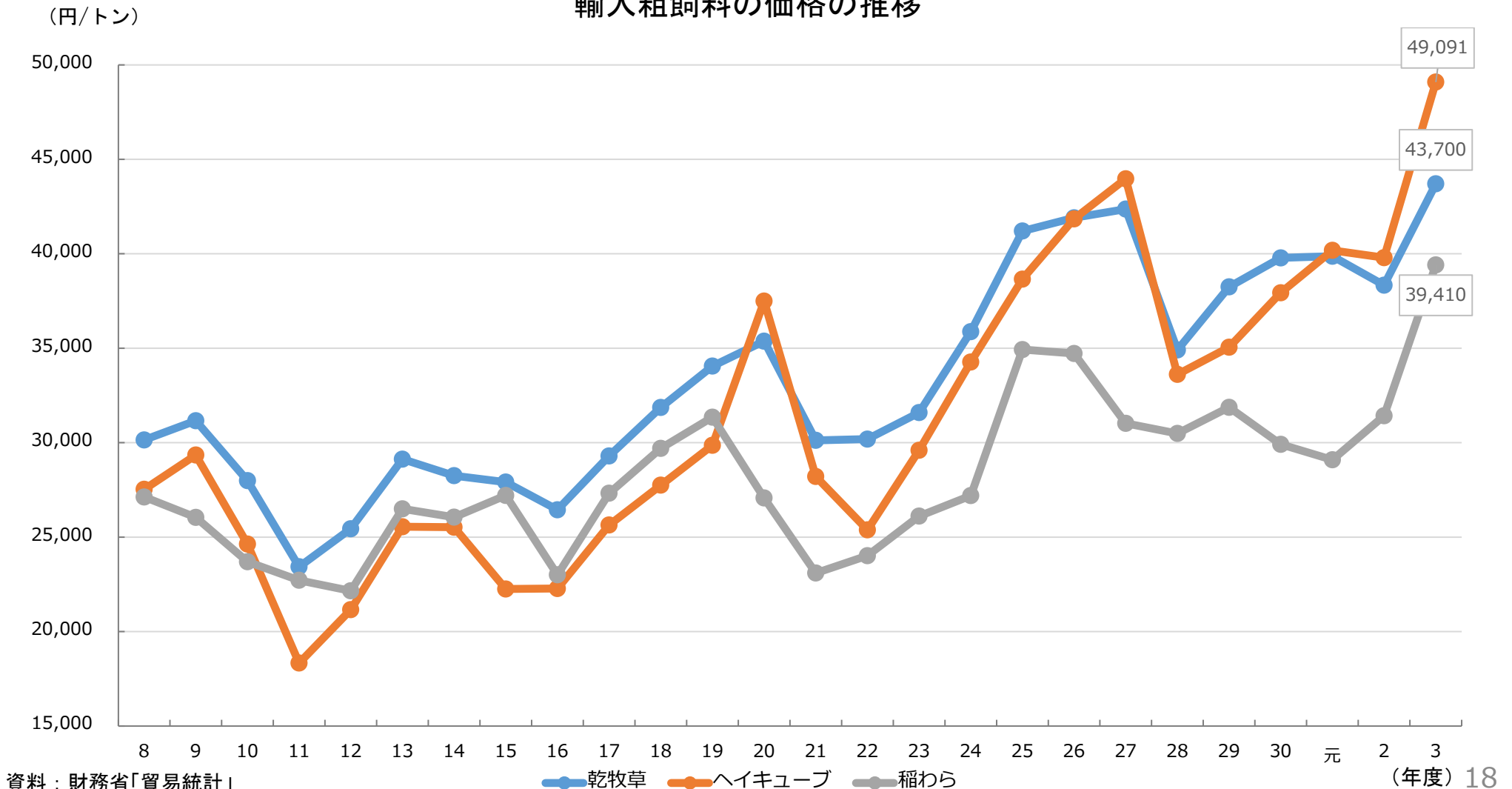
注：配合飼料価格は、全畜種の加重平均価格である（令和4年8月は速報値）。

シカゴ相場はシカゴ商品取引所の各月最終週末の期近価格（セツルメント）である。

粗飼料の価格動向

- 粗飼料は、自給率が約8割と多くを国内で生産しているが、一部を輸入。
- 近年、主産地（米国、カナダ、豪州、中国等）における国内需要及び新興国である中東諸国や中国、韓国等の需要が堅調である中、天候不順や円安により変動。直近では物流コストの上昇等により、上昇傾向で推移。

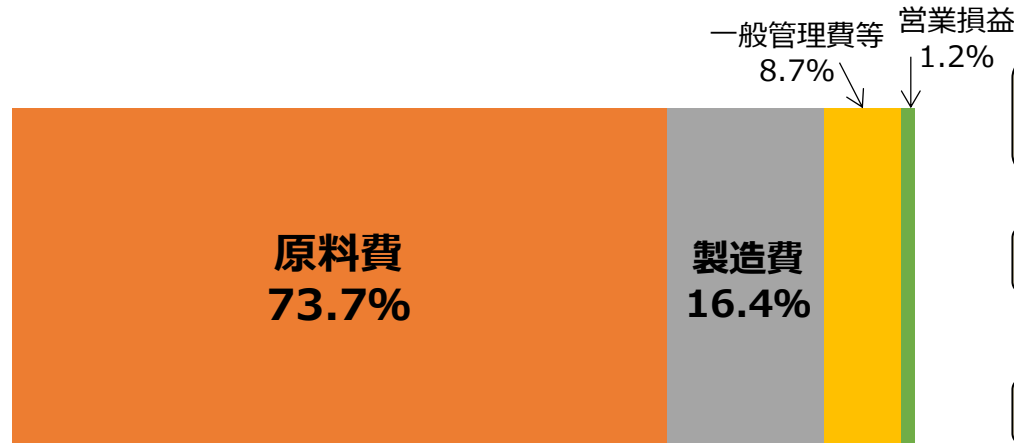
輸入粗飼料の価格の推移



配合飼料価格の構成及び経営コストに占める飼料費

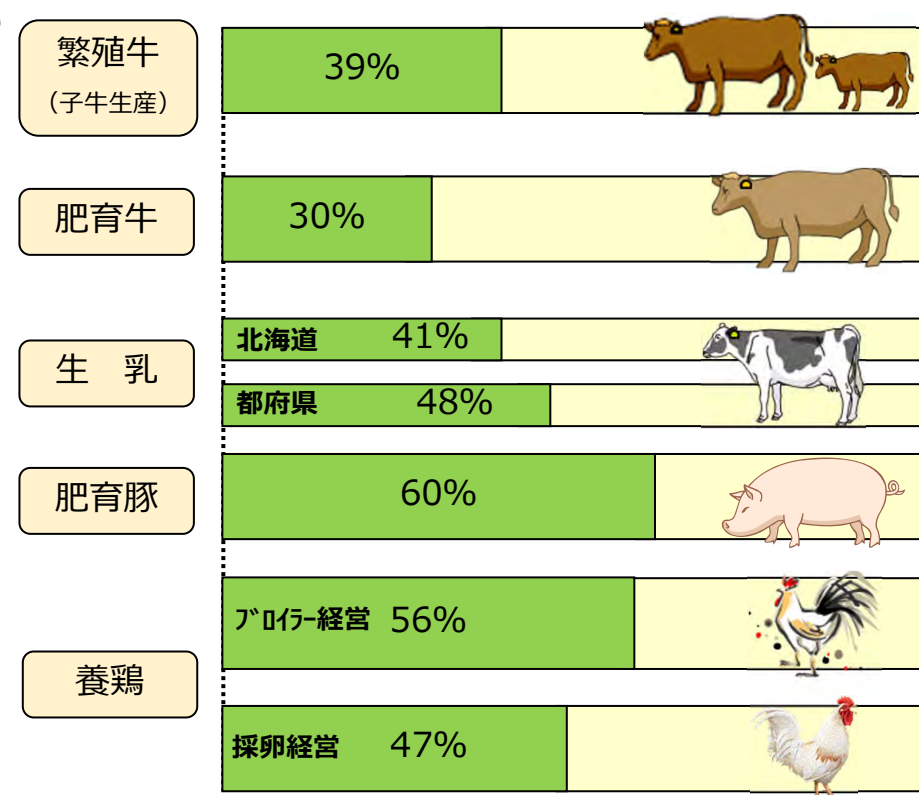
- 配合飼料価格のうち、とうもろこしを中心に海外からの輸入に依存している原料費が全体の約7割を占めている。製造費は販売価格の16.4%であり、農業競争力強化支援法に基づく工場の集約等、低減に向けた取組が行われている。
- 飼料費が経営コストに占める割合は高く、粗飼料の給与が多い牛で3～5割、濃厚飼料中心の豚・鶏で5～6割。

配合飼料販売価格の構成比（平成30年度）



経営コストに占める飼料費の割合（R2年）

※飼料費には粗飼料、濃厚飼料が含まれる



最近の事業再編事例

<農業競争力強化支援法に基づく認定事業再編計画>

- ①フィード・ワン(株)（平成31年3月認定）
工場が老朽化した子会社から自社新工場へ製造移管
- ②明治飼糧(株)・日清丸紅飼料(株)（令和元年7月認定）
【関東】子会社を新設し、牛用飼料の製造を移管
- ③ホクレンくみあい飼料(株)・雪印種苗(株)
（令和元年7月認定）
合併会社を設立し、飼料製造を移管

資料：農林水産省「畜産物生産費統計」および「営農類型別経営統計」

注1：繁殖牛（子牛生産）は子牛1頭当たり、肥育牛および肥育豚は1頭当たり
生乳は実搾乳量100kg当たり、養鶏は1経営体当たり

注2：畜産物生産費調査は、令和元年調査から調査期間を調査年4月から
翌年3月までの期間から、調査年1月から12月までの期間に変更した

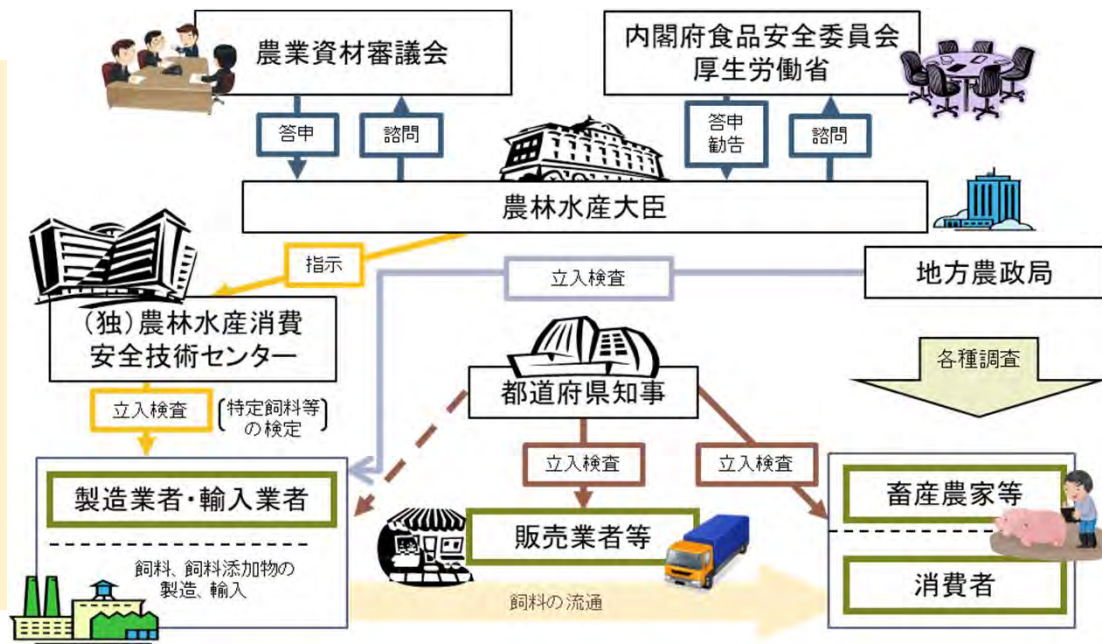
飼料の安全と品質確保の取組

- 農林水産省は、国内で生産される、あるいは海外から輸入される飼料の安全を確保するため、飼料安全法に基づき、各種の規制を実施。

飼料安全法の概要

- (1) 法の目的 公共の安全の確保と畜産物等の生産の安定
- (2) 法規制の対象・・・32種（牛、馬、豚、めん羊、山羊、鹿、鶏、うずら、蜜蜂 まだい等魚類23種）
- (3) 安全性の確保に関する規制
 - ・ 国が定めた基準及び規格に合致しない飼料等の製造・輸入・販売・使用の禁止、有害物質を含む飼料等の製造・輸入・販売・使用の禁止及び廃棄命令
 - ・ 製造・輸入・販売業者の届出、報告の聴取、立入検査等
- (4) 品質の改善
 - ・ 公定規格の設定、栄養成分量、原材料名等の表示基準の設定
 - ・ 表示事項の表示等の指示

飼料等の安全確保体制



○ 安全性を確認した組換えDNA技術応用飼料

なたね	19品種
とうもろこし	32品種
大豆	19品種
わた	21品種
てんさい	3品種
アルファルファ	3品種
じゃがいも	4品種
計101品種	

○ 安全性を確認した組換えDNA技術応用

飼料添加物	14品目
-------	------

○ 届出されたゲノム編集飼料

3品目

○ 有害物質の残留基準

【農薬】

- ・ 輸入原料を中心に穀類及び牧草に使用される農薬 61種類（省令）
- ・ 稲わら等に使用される農薬 94種類（通知）

【重金属等】 4種類（通知）

【かび毒】 4種類（通知）

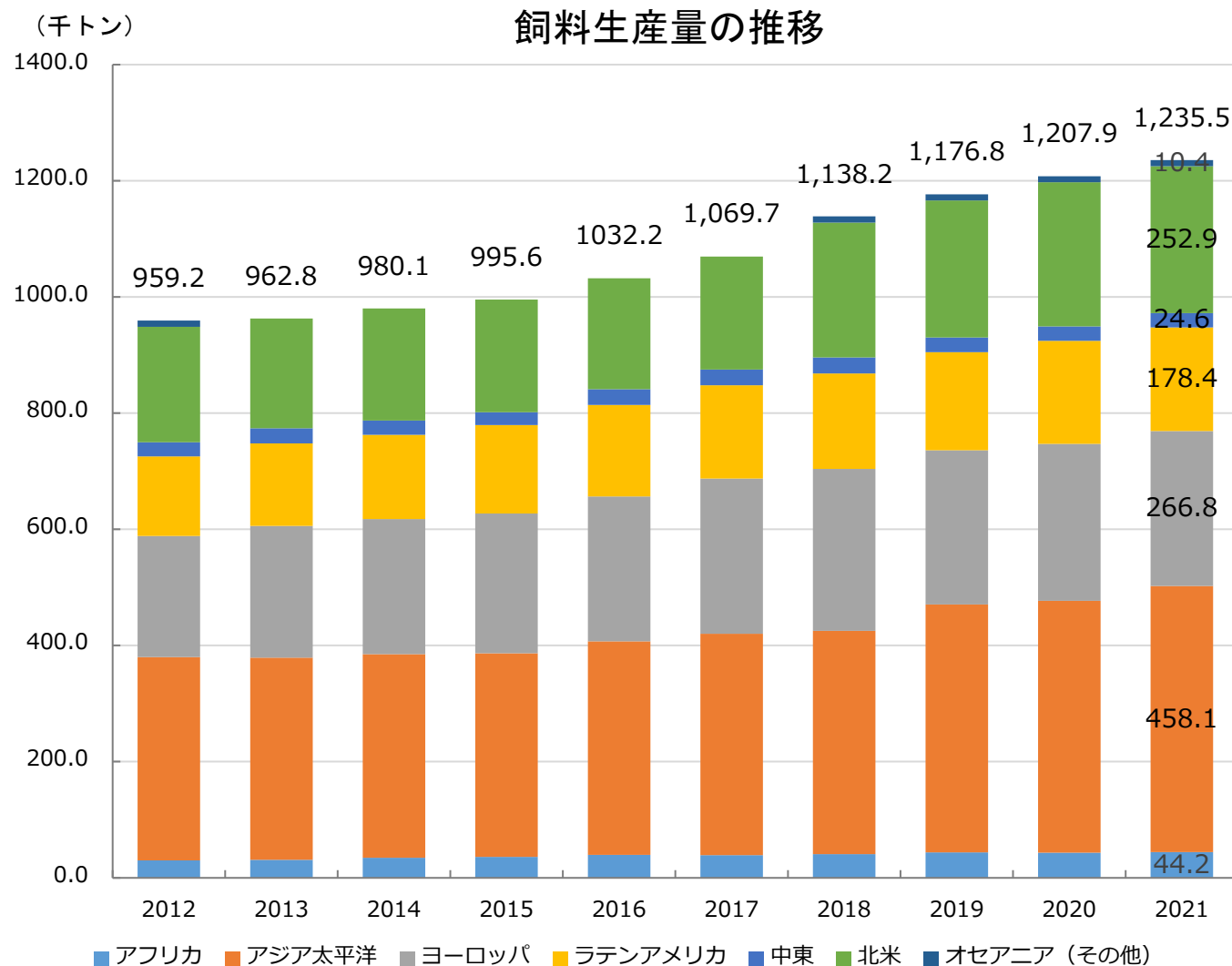
【放射性物質（放射性セシウム）】 1種類（通知）

【その他（メラミン及びシアラ酸）】 1種類（通知）

国際編

世界の飼料生産の概況

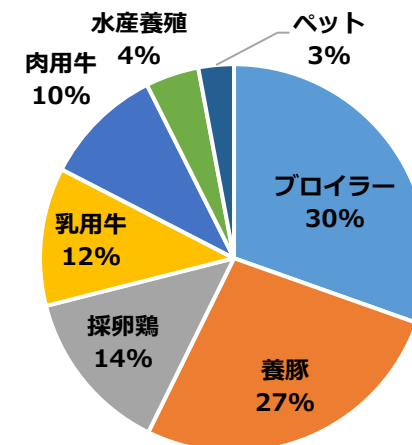
○ 世界の飼料生産量は、食肉重要の増加に伴い上昇傾向で推移。地域別にみると、中国、インド等が牽引する形でアジア太平洋が最大の生産地域。畜種別ではブロイラー、養豚用の飼料が約6割を占めている。



飼料生産上位10カ国（2021年）

国名	飼料生産量（千トン）
中国	261,424
アメリカ	231,538
ブラジル	80,094
インド	44,059
メキシコ	38,857
スペイン	35,580
ロシア	33,000
トルコ	25,300
日本	24,797
ドイツ	24,506

畜種別の飼料生産量（2021年）

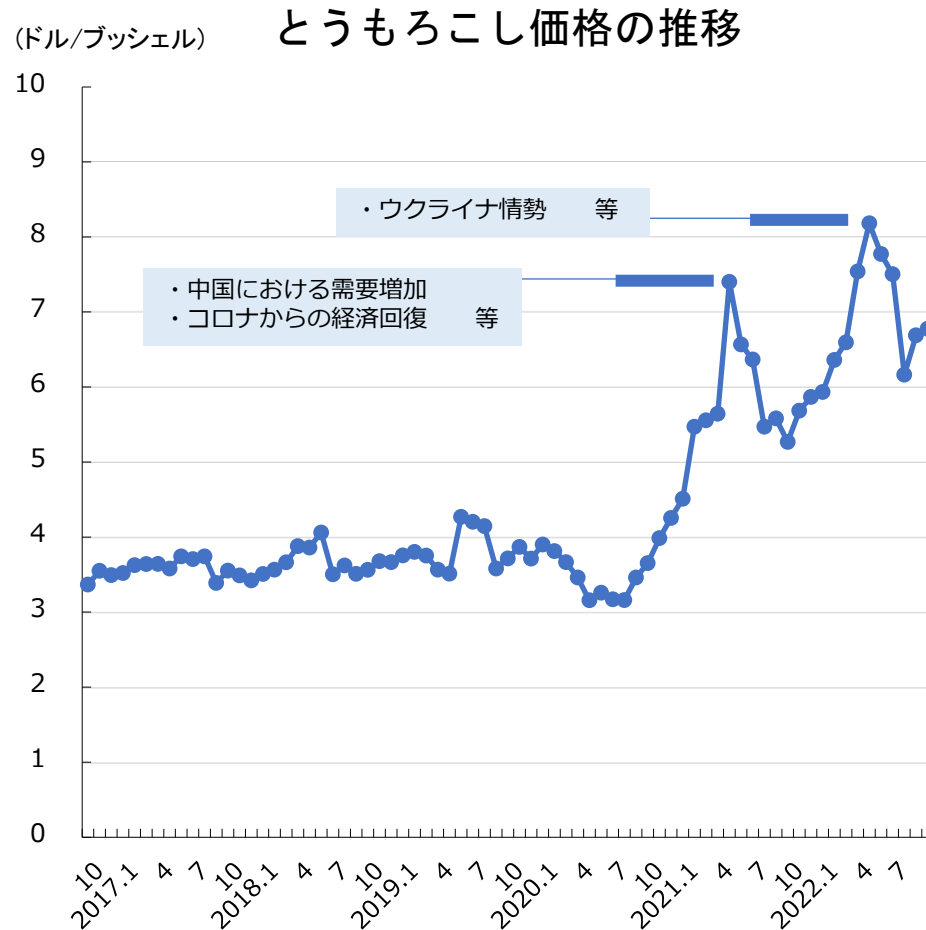


資料：Alltech社の資料を基に農林水産省作成

注：配合飼料の生産量。2013年～2017年はオセアニア（その他）の項目はない。

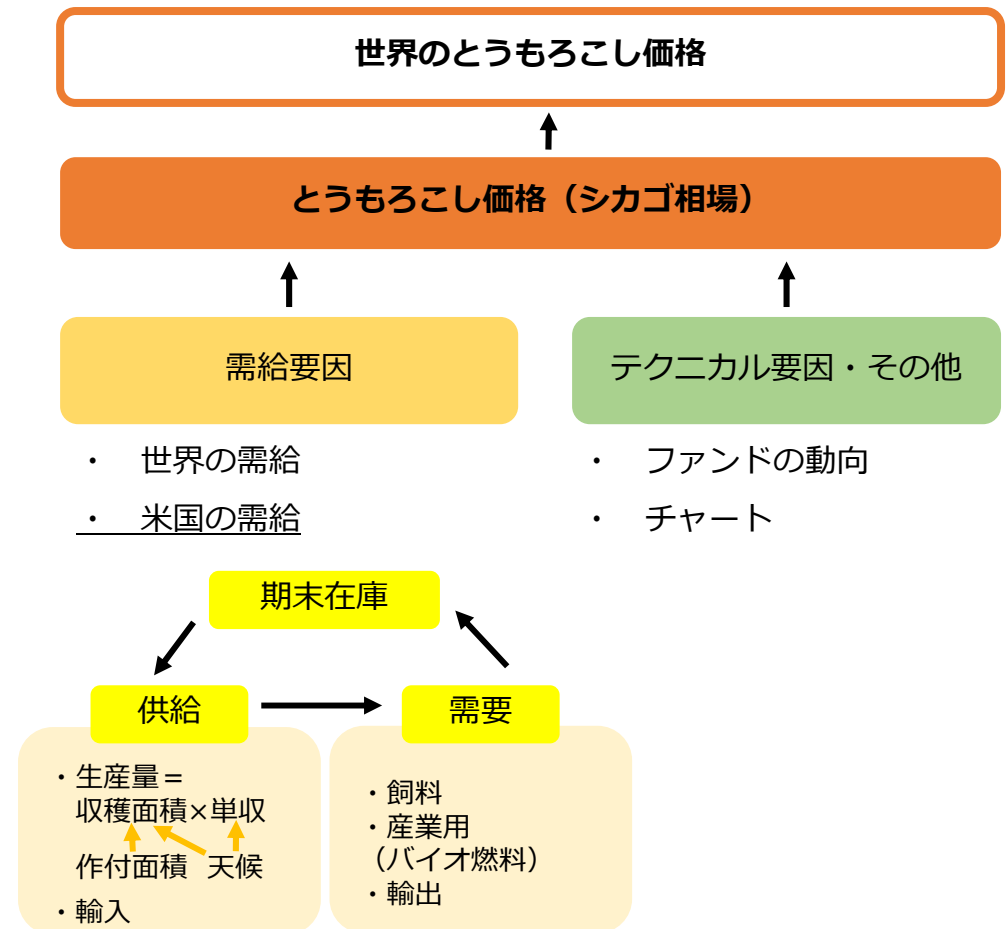
国際価格（とうもろこし）

- とうもろこしの国際価格は世界の需給状況に応じて変動。4月にはウクライナ情勢を受けて上昇し8ドル/ブッシェルを突破。その後需給ひっ迫の懸念が後退し一時下降したものの、米国の収量が下方修正されたこと等を受け、9月時点では6ドル/ブッシェル台後半付近で推移。
- とうもろこし先物価格は、需給要因、天候要因、テクニカル要因などにより変動する。



注：シカゴ相場。2016年9月～2022年9月までの各月最終週末の期近価格（セツルメント）である。1ブッシェル＝25.4kg

とうもろこしの価格変動要因

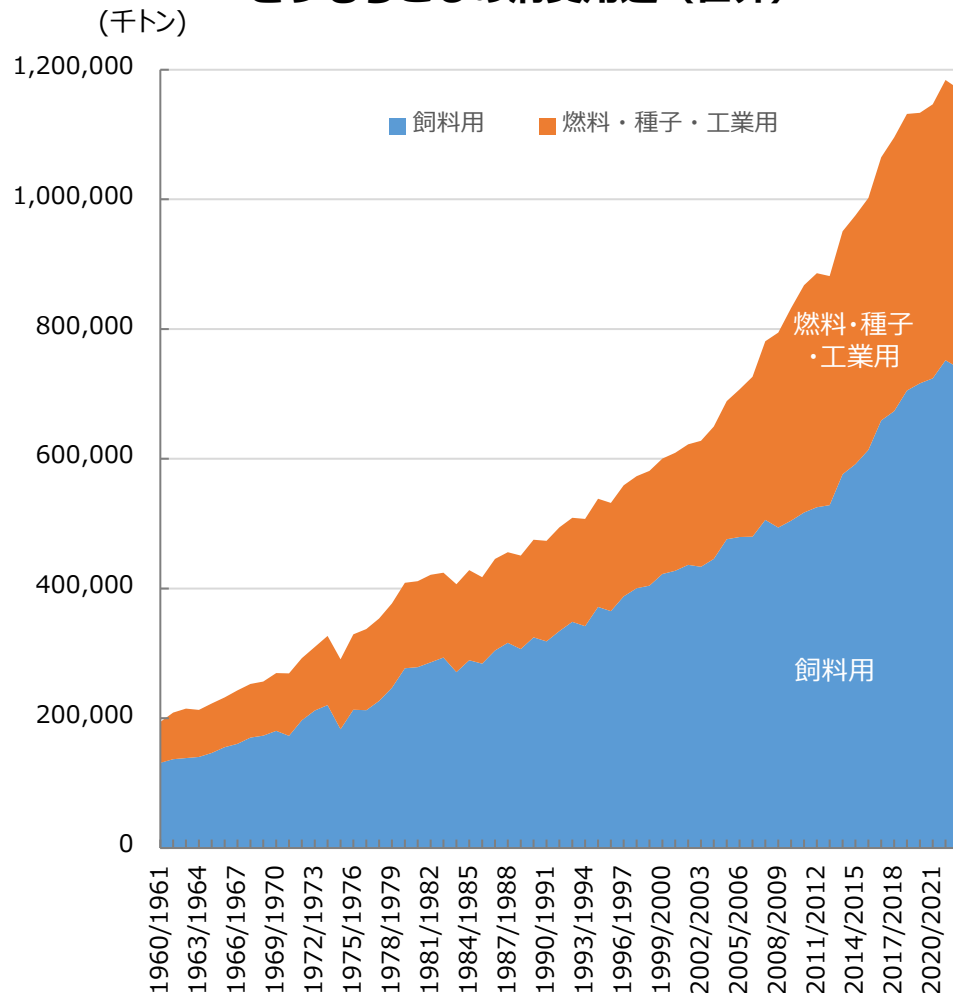


資料：東京商品取引所の資料を基に農林水産省が作成

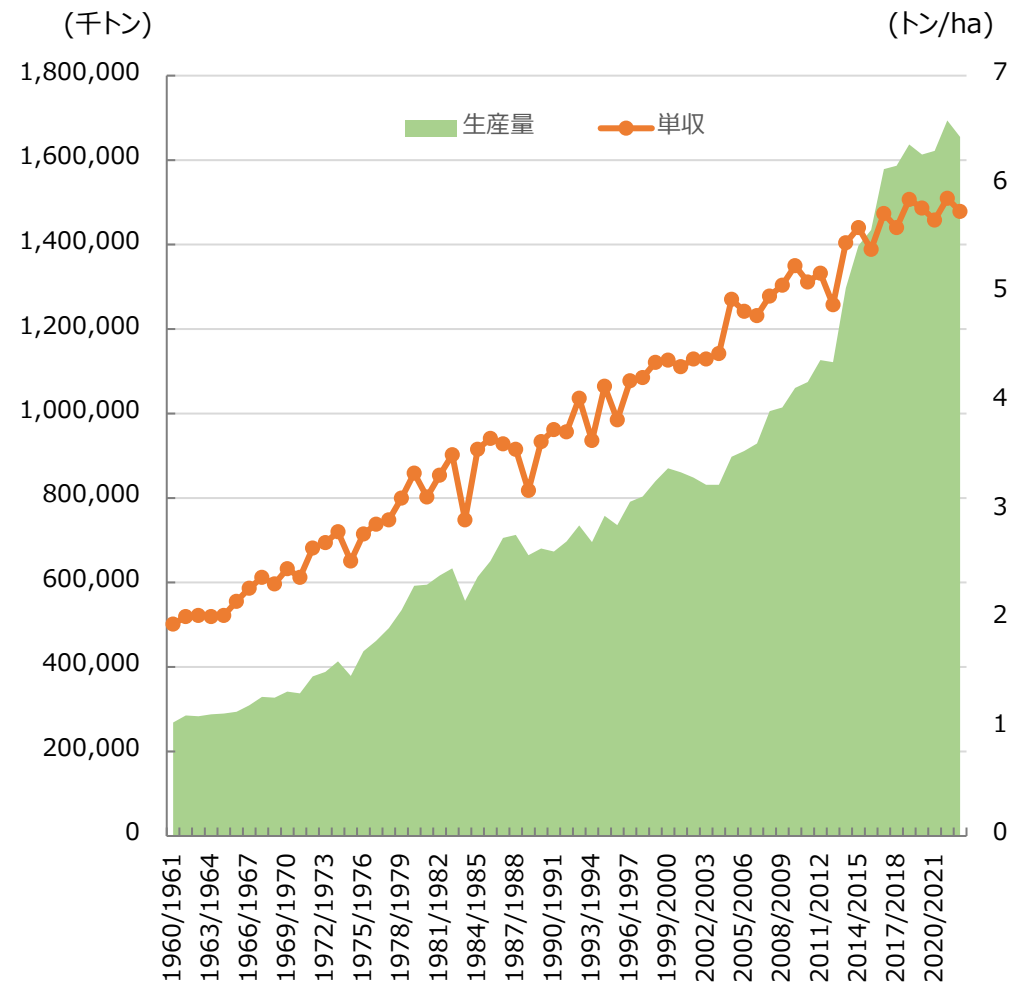
とうもろこしの用途（世界）

- 世界のとうもろこしの消費は、肉用需要の拡大などに伴い、飼料用の消費が世界全体の増加を牽引。燃料・種子・工業用の消費については、近年は概ね横ばいで推移している。
- とうもろこしの生産量は単収の増加等により支えられてきた。

とうもろこしの消費用途（世界）



とうもろこしの生産量と単収（世界）

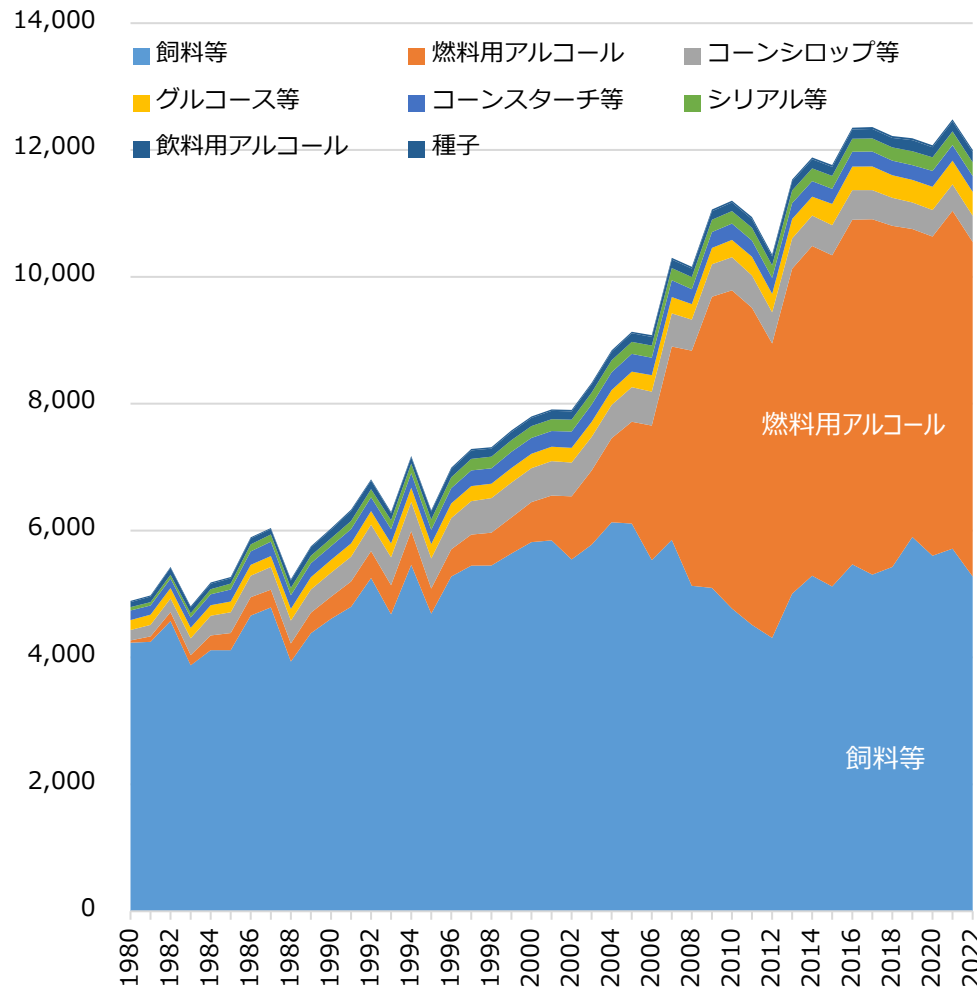


資料：米国農務省PS&Dを基に農林水産省が作成。

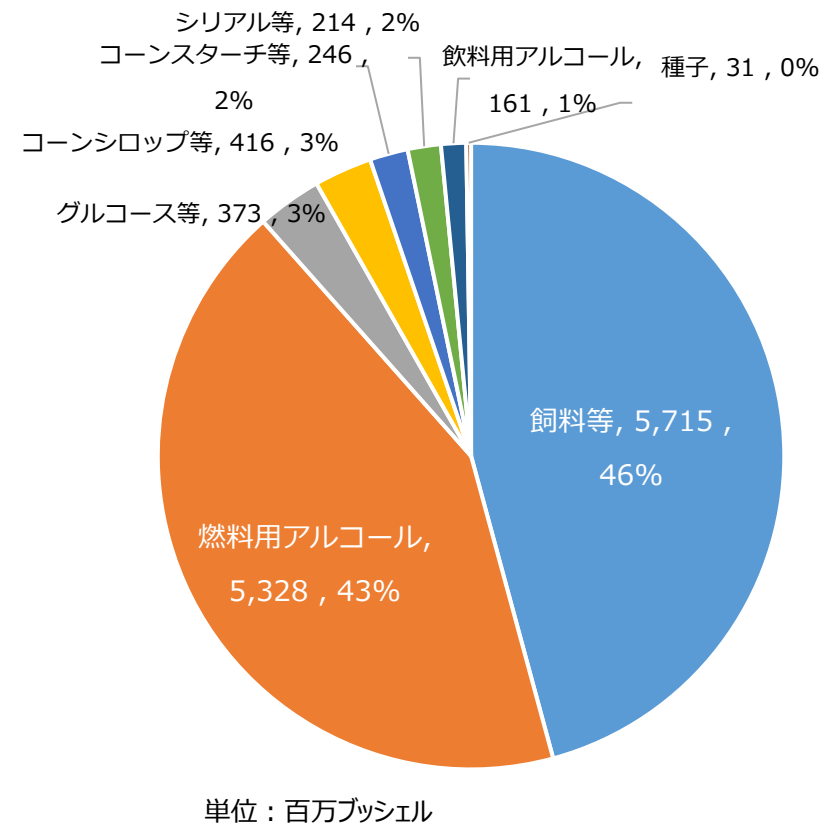
とうもろこしの用途（米国）

- 米国内でのとうもろこしの消費用途は、飼料、アルコールで8割超を占める。2000年代以降のとうもろこしの国内消費量拡大は燃料用アルコール向け（バイオエタノール向け）により牽引された。

（百万ブッシェル）
とうもろこしの消費用途（米国内消費）



とうもろこしの用途の割合（米国）



資料：米国農務省 Feed Grains: Yearbook Tablesを基に農林水産省が作成。

注：「Feed and residual use」を飼料等、「Alcohol for fuel use」を燃料用アルコールと表記した。

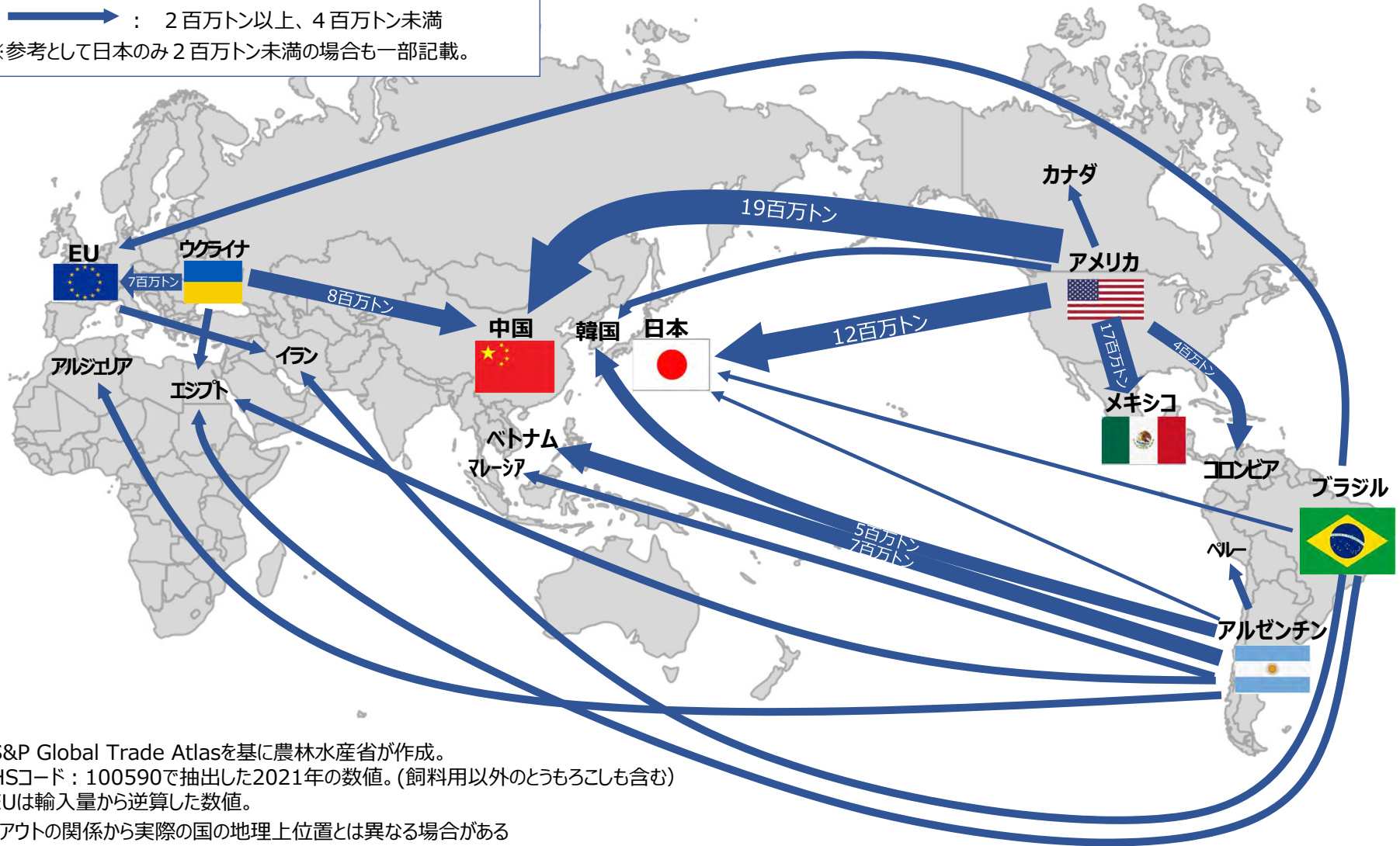
とうもろこしの貿易フロー（2021年）

○ とうもろこしの輸出について、米国から、中国、日本、中南米などに輸出され、ブラジルやアルゼンチンから、アジア、中近東、EUなどに輸出されている。ウクライナからは、中国、EUなどに輸出されている。

- 2百万トン以上輸出している貿易フローを作図

→ : 2百万トン以上、4百万トン未満

※参考として日本のみ2百万トン未満の場合も一部記載。



資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

HSコード：100590で抽出した2021年の数値。(飼料用以外のとうもろこしも含む)

EUは輸入量から逆算した数値。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

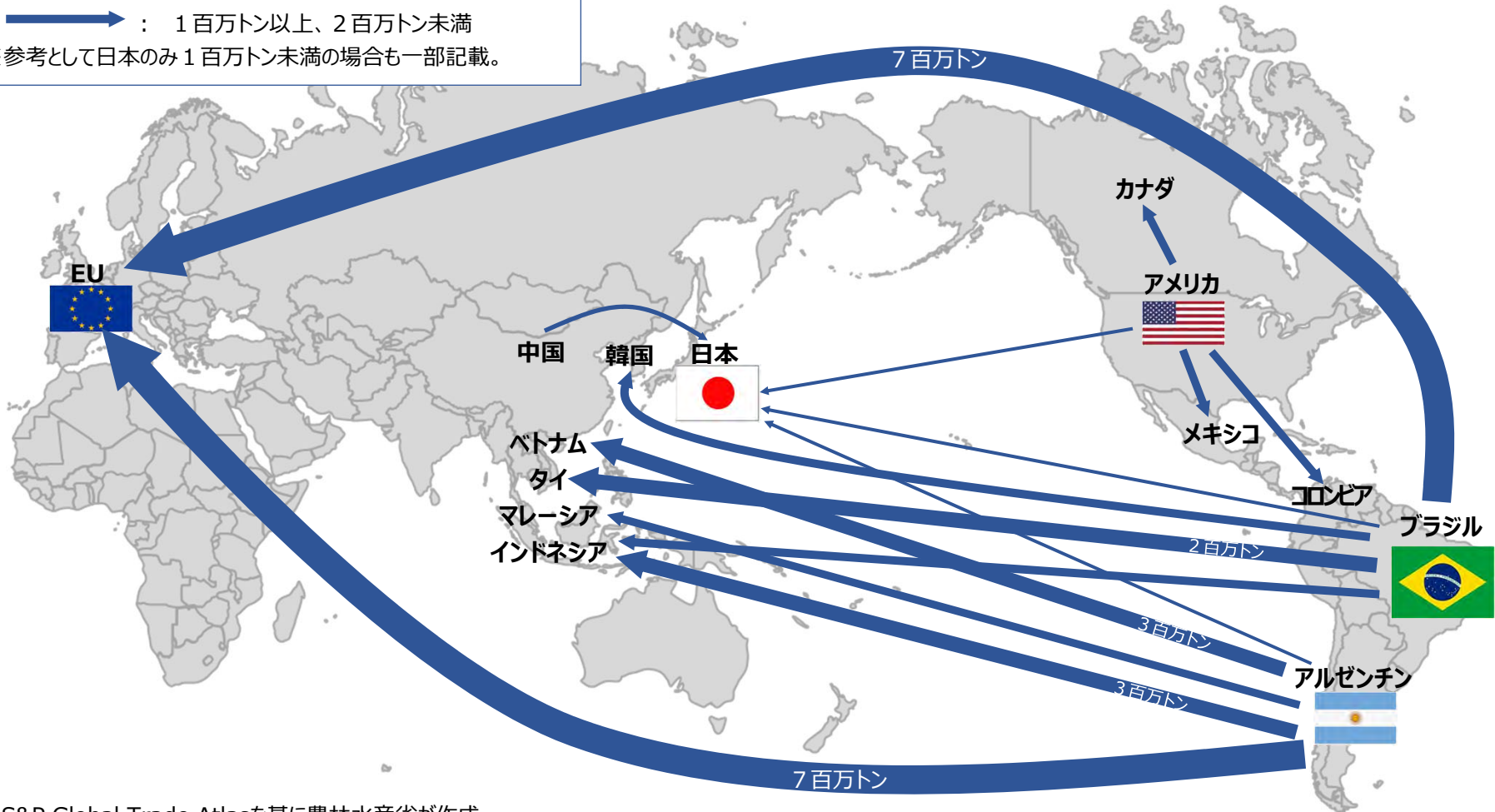
大豆ミールの貿易フロー（2021年）

- 大豆ミールの輸出について、ブラジルやアルゼンチンからEUやアジア向けの輸出が多い。
- 日本は中国、ブラジル、米国、アルゼンチンなどから輸入しているが、数量は比較的小さい。

- **1百万トン**以上輸出している貿易フローを作図
➡ : 1百万トン以上、2百万トン未満
※参考として日本のみ1百万トン未満の場合も一部記載。

- **1百万トン**以上輸出している貿易フローを作図
➡ : 1百万トン以上、2百万トン未満
※参考として日本のみ1百万トン未満の場合も一部記載。

- **1百万トン**以上輸出している貿易フローを作図
➡ : 1百万トン以上、2百万トン未満
※参考として日本のみ1百万トン未満の場合も一部記載。



資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

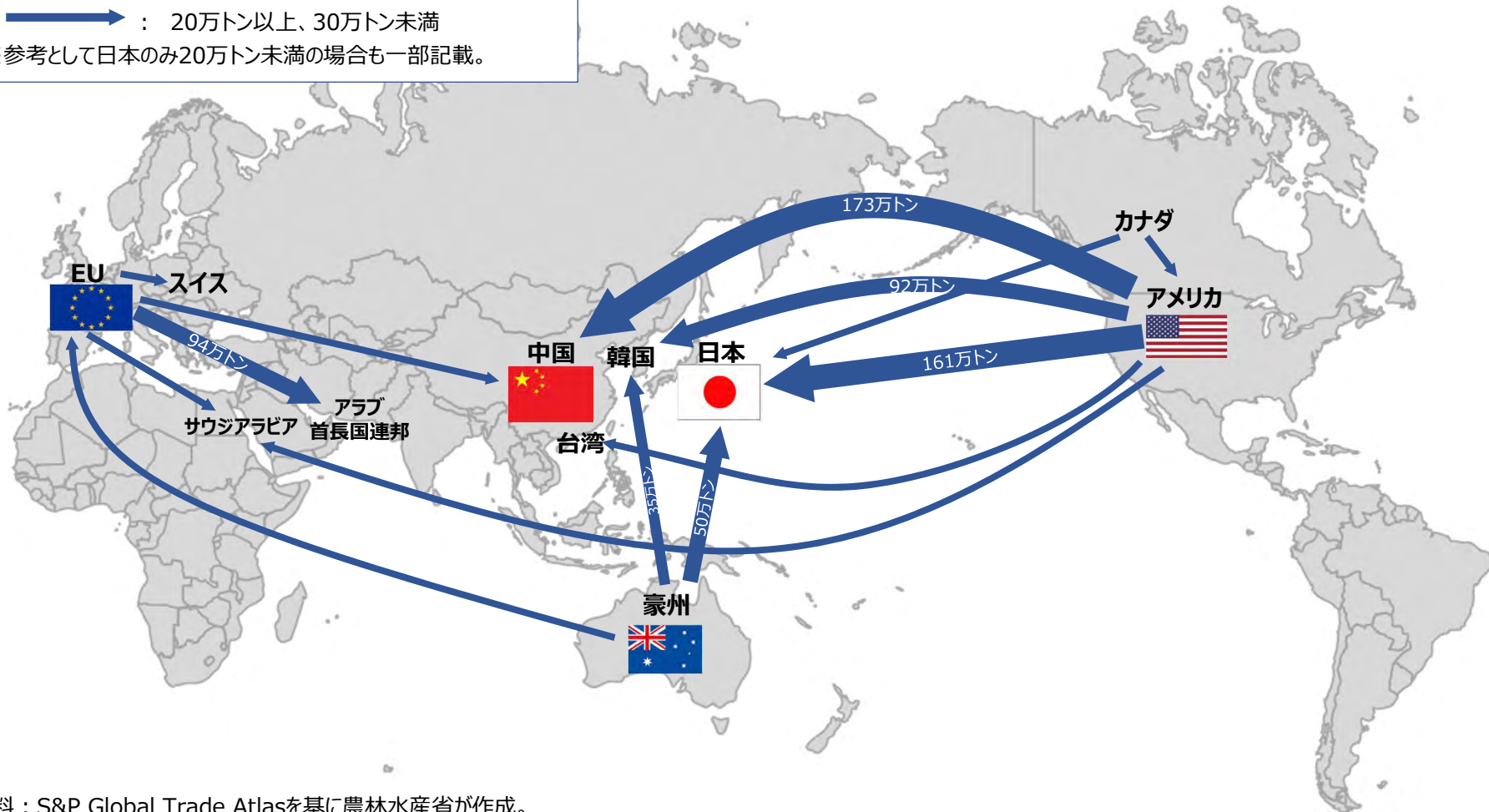
資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

乾牧草の貿易フロー（2021年）

○ 乾牧草については、世界全体の貿易量自体がとうもろこし等と比較して小さい。輸出国のアメリカや豪州から、中国、日本、韓国などに輸出されている。EUからは、中近東などに輸出している。

- 30万トン以上輸出している貿易フローを作図

→ : 20万トン以上、30万トン未満
※参考として日本のみ20万トン未満の場合も一部記載。



資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。

HSコード：121490で抽出した2021年の数値。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

(参考) 世界の飼料業界の概況

○ 飼料生産の上位は、農畜産物、食料品販売等も手掛ける複合経営の企業が多い傾向。

順位	社名	国	飼料生産量 (千トン/年)	飼料 工場数	取り扱い					
					養鶏用	養豚用	反芻 動物用	水産 養殖用	馬用	ペット 用
1	CP Group	タイ	28,175	—	○	○	○	○		○
2	新希望集団	中国	28,000	200	○	○	○			
3	海大集団	中国	19,630	—	○	○	○	○		
4	Cargill	アメリカ	19,600	39	○	○	○	○	○	○
5	Land O'Lakes	アメリカ	13,500	—	○	○	○	○	○	○
6	牧原食品	中国	13,110	—		○				
7	JBS S.A.	ブラジル	11,000	49	○	○	○			
7	双胞胎集団	中国	11,000	—		○				
9	BRF	ブラジル	10,071	27	○	○				○
10	For farmers	オランダ	10,000	35	○	○	○	○	○	
10	Tyson Foods	アメリカ	10,000	32	○	○	○			○
10	Wen's Food Group	中国	10,000	—	○	○				
17	JA全農	日本	7,200	22	○	○	○			

資料：WATT Global Media「Feed Strategy」（2021年）※飼料生産会社144社のランキングから抽出

注：WATT社調べによるデータ内のランキングであり、全世界の生産量におけるカバー率は約42%。

(参考) ウクライナ産とうもろこしをめぐる情勢

○ ウクライナ情勢による家畜飼料や食肉価格に与える影響がEU各国から報告されている。

EU

欧州配合飼料生産者連盟(FEFAC)が5月20日に公表した2022年のEUの配合飼料生産見通しによると、EUの養豚・養鶏は飼料原料の高騰、市場需要の低下、鳥インフルエンザの拡大の影響から、豚用配合飼料の生産は前年比4.2%減、鶏用配合飼料は同3%減、牛用配合飼料の生産も同1.6%減とされており、配合飼料全体の生産量は同2.9%減(430万トン減)と予測されている。

2022年3月に採択された「ベルサイユ宣言」の中で、EU各国首脳は「主要な農産物および投入物の輸入依存を減らし、特に植物由来タンパク質のEUでの生産を増やすことにより、食料安全保障を強化する」ことに合意しており、FEFACは、EU各国首脳の立場を支持し、「EUは、穀物および油糧種子の食料・飼料用途を優先した包括的なEU食料・飼料安全保障危機管理計画を策定する必要がある」としている。また、特に「EUは、域内の穀物、油糧種子、植物性タンパク質の生産強化のために、革新的な植物育種技術と優れた農業実践を支援する必要がある」としている。

オランダ

オランダの農協系金融機関ラボバンクの報告によると、オランダの輸入トウモロコシの5割がウクライナ産であり、ロシアによるウクライナ侵攻後はトウモロコシの入手が困難となりオランダの養豚と養鶏業界に影響が出ており、オランダはウクライナ産トウモロコシの輸入不足を補うために他市場からの輸入を増やし配合飼料の設計を見直す必要があるが、トウモロコシ価格の上昇に伴う豚や鶏の飼料費の上昇は避けられないとしている。

特に養豚業での飼料費の比重は大きく、肥育豚では総生産費の7割、母豚ではその5割を飼料費が占めるため、飼料費の上昇は養豚経営の利益率に直に影響する。また、豚肉の需要に対する供給はやや過多であり、生産費の増加分を肥育豚価格や豚肉価格に転嫁することは難しく、飼料費の上昇により養豚業者および豚肉加工業者の利益は圧迫されるとしている。養鶏業では鶏肉は世界的に需要が供給を上回っているため、飼料費の増加分の販売価格への転嫁は養豚業界ほど難しいとし、鶏肉の生産費は短期的に1割の上昇が想定されている。

スペイン

スペイン飼料工業連盟によると、スペインは家畜飼料原料の40~60%を輸入しており、うち約3分の1はウクライナからの輸入とされている。

例年2~7月は、ウクライナなど欧州を中心とした北半球の国から輸入し、8~翌1月はブラジルなど南半球の国から輸入している。このため、ロシアによるウクライナ侵攻が北半球からのトウモロコシの輸入時期と重なったことで、飼料会社はウクライナからの穀物輸入が途絶えた場合、1カ月後にはトウモロコシが不足し、生産者は家畜を淘汰する必要があると懸念していた。

このような状況下でスペイン農業食料環境省は3月14日以降、飼料会社からの要請もあり、ウクライナ産トウモロコシの輸入減少分を補うため、アルゼンチンおよびブラジル産トウモロコシの輸入要件を一時的に緩和していたが、現地報道によると、スペイン国内の飼料工場では、配合飼料の販売価格が前年比45%上昇しており、南部の干ばつによる牧草の生育不良も、これを後押する一因になったとされている。

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 10 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--